
アイドルッ！

未吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルッ！

【Nコード】

N6917X

【作者名】

末吉

【あらすじ】

ある意味特殊な体質を持った主人公が、幼馴染によってアイドル育成高校に入学し、そこで奮闘するお話。キャラが濃すぎる人たちが多いドタバタコメディ。

プロローグ 〓自分の近況〓（前書き）

常識ではかろうとしないうでください。

プロローグ
く自分の近況く

突然だが、諸君はアイドルやタレントなどについてどう思う？たいていの意見としては、あこがれや、なりたい職業だと思う。しかし、俺の意見としては、よくやってられるな、とか、なりたくはない、だな。何故って？そりゃあ、目立つからだよ。

なぜこんなことを言ったかという、俺はいたくもない学園に無理矢理入学させられて、学園生活を送っているからだ。お前はどの学校にいるんだ？と訊きたくなるだろ。今から順に説明してやる。

俺が入学した学校の名は、アイドルやタレント、俳優みたいな表舞台で活躍する人から、大道具みたいな表舞台には出ない人たちを教育・育成・輩出している私立スミレ学園。この学園ができた理由が、6年ぐらい前に亡くなったある有名な俳優が遺言で、『私の全財産は、これから俳優などになりたい人たちを育成できる学校のために使ってくれ。』みたいなことを書いていたかららしい。しかも、学費は普通の公立よりちよつと安い。………どんだけ金持ってんだよ。

凄いの、毎年毎年入学希望者が多いのにもかかわらず、入試などはなく、書類審査だけしかない。要は、書類を送ったら合格通知か不合格通知のどちらかが送られる仕組みである。ちなみに、この学園の倍率は毎年十倍くらいになる。よくそんな学園に合格できたなと思うだろうが、俺は送った覚えがない。そして、こんなことをしたのは間違いなくあいつである。

本宮いつき。俺の幼馴染で、家がお金持ちの、いわゆる御曹司である。顔は、大体の予想を裏切らないで、美形。ただし、若干女っぽい顔立ちをしている。それでも女子にはモテるんだがな。いつも笑っているが、顔の事をからかわれると、翌日にはからかった人がいなくなる。ちなみに、俺も何回かうっかり言ってしまったが、消される、ということとはなくむしろ、ものすごくいじめられた。具体的

には、あいつのSPと喧嘩したり、山の中に放置されて、一人で脱出したりしたな。……他にもあるが、思い出たくないので割愛しておく。

ともあれ、こいつのせいでこんな学園に入学しなきゃならなくなつた。その経緯は、

？ ある日、家の郵便受けの中に一つの封筒が入っていた。

？ それを家の中であける。

？ 合格通知が入っていた。

となる。俺は普通に近くの公立高校に通おうと必死で勉強していたのに、この通知が来たわけだ。その時に俺は、反射的に本宮に電話した。

『何？つとむ？何か用？』

「とばけるな。お前のところにも合格通知が届いてんじゃねえのか？」

『合格通知……？ああ！そういうば届いてたね、そんなの。ん？お前にも、って事はつとむのところにも来たんだね！？やったね！！また一緒に学校だよ！！』

「そうか。いや、それはこの際どうでもいいが、生憎俺にはこの学校に書類を送った覚えがない。となるとだ、いつき、てめえ勝手に送りやがったな？」

『やっぱりばれちゃったか。』

「そうか、やっぱりお前だったんだな。今すぐ合格を取り消したいんだが、どうすればいい？」

『へ？知らないの、つとむ？合格通知が届いたら取り消しはおろか、退学も出来ないんだよ？』

「は？」

『やっぱり知らなかったんだね。という訳で、ちょっとしたら入学に必要な書類が届くだろうから、それ書いて郵便局に出しておいて

ね。』

「おい、ちょっと待て。勝手に送られた拳句に、退学も出来ないだ
と？こつちの都合も考えやがれ！！」

『お父さんたちも喜ぶだろうね。息子がテレビに出たら。』

「なんだその締め方！？俺はちつとも嬉しくねえぞ！」

『うるさいなあ。他に言いたいことがあるだろうけど、それは明日
に聴くから。』

「おい！ちよつと待て！おい！………切りやがったな、
あいつ。」

その後、この通知を妹に見つかり、両親がそろって『祝いだ！！』
とか言っただいぶ奮発したのか、割といい値段の肉を買ってきて焼
肉をした。その翌日俺は、中学の担任にいつきが送ったせいでこの
学校に合格したと合格通知を持って告げると、『よかったじゃない
か。お前もテレビに出れるぞ。』と言ってきやがった。人の気も知
らないで何を言っでやがる、と思っってしまったが、口には出さな
かった。

さて、長々と説明をしてきたがお前は誰だ、と感じているだろう。
他の紹介ばかりで自分の事を忘れていた。

俺の名前は八神つとむ。目つきが親と似つかないとよく言われる
ほど鋭く、容姿だけを見ると、不良とよく見間違えられる。趣味は
一人で散歩をすること。特技が家事全般。夢が、一人旅と、平穩に
暮らすこと。後は、俺の体質について説明するだけなんだが、いい
加減億劫だから、これは後程説明しようか。

では、始めるか。この話——俺とこの学園の奴らとの学園生活を。

プロローグ 〓自分の近況〓（後書き）

これからもよろしく願います。

第一話　～出会いはいつも巻き込まれて～（前書き）

へタすぎる出会いはどうですか？

第一話　出会いはいつも巻き込まれて

ここは都心からちよつと離れているたかあき町、の隣のくれな町。この町には私立スミレ学園という、アイドルや俳優など、テレビ関係の人を輩出している学園があるので有名である。その町で、一人の少年が自転車を爆走させていた。

「ふう。このくらいなら何が起こつても余裕があるな。できるなら、このままスムーズに行けたらいいぜ。」

腕時計を確認しながら呟く俺。なぜ急いでいるのかって？それはな、これからバイトがあるんだよ。遅れたら、時給の関係上確実に減られる。それだけは避けなければならない。そう思つて必死にペダルをこいでいたのだが、

「いいだろ、これから、なあ？」

「や、やめてください！！」

「いいじゃなえか、ねえちゃん。少しだけだからよ。」

「は、放してください！！」

と、前方で不良に絡まれている女子を発見。しかも、完全に道をふさいでいるので、右も左も空いているスペースがない。またか、と思いつながら俺は、

「邪魔だ。」

どしやああああ！！！！

『ぐはっ！！！！』

「きゃっ！！」

不良どもを思いっきり轢いた。その反動で自転車の勢いがなくなつたが、まだ時間はある。そう思つて、俺は立ち止つた。

「テ、テメエなにしゃがるんだ！！」

「そつだ！！何の躊躇いもなしにぶつけるんじゃないか！！」

「ああ！？うるせえな。邪魔だ、って言つてんだろ？文句あ

んのか!？」

そう言いながら振り向く。すると、

「お、お前は……………!!」

「も、もしかして……………こ、『皇帝』様ですか？」

「そうだが……………恥ずかしいな、その呼び名。まったく、どこまで広がっているんだ、その名は。」

俺を見た不良どもが、恐れおののいていた。全く、そんなのこっちじゃ呼ばれたことなかったのに。ため息をつきながら俺は、

「さっさと帰れ、お前ら。この時間帯だと目立つぞ。」

今の時刻は六時二十分。俺は一つ目のバイトを終えて、二つ目のバイトへと移動中にこの現場に遭遇した。正直この時間だとギリギリのような気がするが、まあ、何とかなるだろ。

でも万が一の場合に備えてさっさと行きたいので、

「おい。」

『はッ、はい!!』

「さっさと帰れ。いいな。」

『りよ、了解しました!!』

と、軽く睨んだだけで不良たちは逃げ出していった。よし、このままバイト先に行こうか、と自転車のペダルをこごとしたら、

「あ、あの、た、助けてくれて、あ、ありがとうございます!」

と絡まれていた女子がお礼を言った。……………こいつの恰好を見る限り、おそらくは夕飯の買い物を終えて、帰ろうとしたら絡まれたんだな。と、どうでもいいことを考えながら俺は、

「あつそ。じゃあな。」

と言って、そのまま走り出した。それが意外だったのか、

「え!?!ちよつ、ちよつと待ってください!!せ、せめて名前だけでも!!」

と後ろの方で叫んでいた。こっちにもいろいろあるんだ、かまってられるか。と、後ろの方で叫んでいた女子に対して、心の中でそう言った。

「お疲れ様でした——！！」

二つ目のバイトを無事に終えて、今日は残すところ帰るだけとなった。しつかしきついな、このバイト。もうこの生活を始めて十日になるが、未だに筋肉痛がくる。日付としては、四月二十二日火曜日。時刻は午後十時を少しまわったところ。また妹が待っているのか、そう思いながら家に帰った。

「ただいまー。」

家へと帰る途中、何事も起こらずに無事に着けた。疲れたから風呂入って寝よ。そう考えて俺は二階に行こうとしたら、

「お帰り、お兄ちゃん。今日もまたバイト？ そんなにお金が必要なの？」

と、妹がリビングから顔を出して訊いてきた。

こいつの名前は、八神茜。今年で中三になる俺の妹だ。ただ、こいつは俺の本当の妹じゃない。その理由は、俺が小学生になる前に両親が、『これからこの子がお前の妹だ。』と言ってきた。その当時俺は、母さんがまだ生んだのかと思ったが、両親に事情を聞いた後俺は、世の中何でもアリなんだなあと感じた。その事情というのが、『散歩してたら孤児院があつてさ、その中を覗いたら、可愛いこの子が寂しそうに遊んでいたから引き取っちゃった。テヘッ』だそうだ。これが本当にできるのか、といつきに訊いたら、

『法律上は問題ないよ。』

だそうだ。こうして、俺と茜はめでたく兄妹となったわけだ。ちなみに、こいつの過去の事は、俺は何も訊いちやいねえし、あいつも言う気がねえから、今のままでいいと思っている。余談だが、最近こいつは誰に見せたいのか、よくファッション雑誌を見て、オシャレをしている。その度に俺は、こいつに『どうかな？』と訊かれている。なんで俺にいちいち見せに来るのか疑問に思ったが、現状の問題があまりにもでかいたため、そのことについては保留にしている。

「ああ。何かと必要なんだよ。」

「例えば？」

「昼代だろ、本代だろ、あとは……………」

「ええ！？あの本全部自分のバイト代で買ったの！？」

「昔は親からもらった小遣いからだが……………って、ちよつと待て！？お前いつ俺の部屋に入っただ！？鍵をかけてくはずなんだが！？」

「え？お兄ちゃん、たまに鍵かけ忘れるよね？」

「なんだとっ！？」

しまった。特に見られてヤバイものはないが、これからは時間に余裕を持って行動しよう。

……………今まで以上に。そう決心した俺は茜に、

「そろそろ二階に行け。そして寝ろ。」

と言った。すると、

「お兄ちゃんが『お休み』って、言ってくれないと寝ないもん。」

と、あるうことが条件を出してきた。畜生！なんでそんなこと言わなきゃいけないんだ！

そう思いながら仕方なく俺は、

「分かったよ……………お休み、茜。」

と言ったら、

「お休みなさ〜い！」

と、上機嫌になって二階に行った。あれで寝られるのか甚だ不思議だが、気にしてもいられないので、俺も二階に上がって自分の部屋で風呂に入る準備をした。

準備が終わって下に降りると、

「おかえり、つとむ。」

「お前、バイトやっているからって遅くないか？どこでやっているんだ？」

両親が、リビングで酒盛りをしていた。一応、両親の紹介をしておくか。親父の名前は八神すすむ。普通のサラリーマンである。ただし、喧嘩はそこのヤクザどもを圧倒する。俺も何度か勝負したが、

たいていはボコボコにされる。昔より衰えた、と本人は言うが、今でこの強さなら昔はどのくらいだったのかと思う。そして、お袋の八神玲子^{りょうこ}。お袋は、何かというと俺に家事をやらせる。自分は専業主婦なのになんで俺にやらせるんだと訊いたら、『いつもやっているから。』と笑って言いやがった。なので、俺がいる時は問答無用で家事をやらされる。

まあ、そのおかげで得意になったんだがな。説明としてはこれくらいだが、俺の両親は体質の事は知っている。ついでにいうと、いつもも知っている。そろそろ俺の体質について話そうか。

俺の体質。それは、何事にも巻き込まれてしまう体質だ。例えば、今日起こった不良に絡まれた女の子と遭遇する。こんなことが、毎日のように俺の身に降りかかる。他には、一番古いのでは、ヤクザ間の抗争に巻き込まれたことが挙げられる。その当時俺は、両親とはぐれてしまったために歩き回っていたんだが、その時に丁度抗争が勃発した場所にてしまったために巻き込まれてしまったという訳だ。それで以降俺は、何かと事件やトラブルに巻き込まれてしまうことが多くなった。その度に全部解決している俺は、いつきに『よく全部解決できてるね。普通なら一つでも解決できただけでもすごいのに。』と言われた。それに関しては俺も同感だが、時々、交通事故に巻き込まれるんじゃないかと思ってしまうたりする。

・・・・・・現実にならないように祈るか。

これで大体の説明は終わったな。じゃあ、さっきの場面に戻るか。
「別に。大したところじゃねえよ。っていうか、中学二年の時に小遣い停められたときに、

『高校に入ったら、バイトでもして小遣いためる。』と言ってきたのはあんたらじゃねえか。」

「そうだったな。」

「そうねえ。」

と、思いつきり他人事のように流す両親。おい。そのおかげで、中

「二から中三の頃にも買えなかったじゃねえか。そんな恨みを知らずに、」

「さっさと寝たらどうだ。明日も早いんだろ？」

「そうよ。寝たら？」

「言われなくとも寝るが、その前に風呂だ。お休み。」

『お休み。』

これで普段の一日は終わり。明日も早いことだし、さっさと寝るか。そして俺は、風呂に入った後に、自分の部屋のベッドに突っ伏して寝た。

1 - 2 いつきと俺

翌日。いつも通りタイマーの音で起きるのかと思ったら、

「お兄ちゃん、起きなよ。」

茜が起こしに来ていた。・・・・・・・・・・よし、まだ寝られるな。

そう思いながら二度寝した。

そして、目覚まし時計が鳴る六時に俺は起きた。

起きてみると、頬を膨らませた茜が目前にいた。

「おはよう。お前がここにいてるってことは、また鍵かけ忘れたんだな。」

と状況の確認をしていたら、

「お兄ちゃん！どうして私が起こしに来たの無視して、目覚ましで起きるの!？」

茜が怒っていた。どうして、ってお前・・・・・・・・・・茜が怒っていた。どうして、ってお前・・・・・・・・・・

「自分で決めた時間までは寝たいから。それにお前、普段俺より先に起きないだろ。」

「うう。そんなにはつきり言われると反論しづらいよ。」

はつきりと言ってやったら、言い返せなくなった茜。それより・・・

「なんで今日はこんな早く起きたんだ？」

「ひ、秘密!」

目的を訊いたら、勢いではぐらかされた。・・・・・・・・まあ、別にいいか、それは。そう思っただ俺は着替えようとしたら、

「え!？ちよつと、お兄ちゃん!？私の目の前で着替える気!？」

「ん?・・・・・・・・ああ。じゃあ、ちよつと着替えるから出てけ。」

「その言い方はあんまりじゃない？」

「じゃあ、どう言えと。」

「もうちよつとソフトに言ってくればいいじゃん。」

「そんなことしているうちに時間が無くなるから、さっさと出てけ。」

「
と言って、茜を部屋から追い出した。結局、どうしてあいつが早起
きして、俺の部屋に来たのかは分からなかったなと、考えながら着
替えていった。部屋の外から、『お兄ちゃんの寝顔見れたし、別に
いいかな。』と聞こえたのは、不思議に思わないと駄目だろうか。」

「いつてくる。」

朝食を食べて、学校に行く準備をし終えた俺は、自転車にまたがっ
て言った。俺が通っている学校は隣町なので、自転車で行くと一時
間位かかる。なので、毎朝七時には必然的に家を出ないといけなく
なる。ちなみに、いつきはリムジン。格差社会ってこれを感じられ
るね。ただいつき自体は、俺を乗せてもいいと言っているが、そう
するとバイトに遅れる可能性があるので丁重にお断りしている。

「いつてらっしやうい。」「頑張ってね、お兄ちゃん。」「気を付
けて行けよ。」

と、三人が口々に言ってきた。・・・・・・・・何事も無け
ればいいよな、本当に。」

登校中は何事もなかった。その一言に、俺はちよつとだけ感動し
かけたが、学校にいる間にまた厄介なことが起きそうだと考えて
しまったために感動が失せた。俺はいつものところに自転車を置い
て、自分の教室に向かって行った。

「おはよう、つとむ。」

「よう、いつき。」

教室に入って自分の席に着いた時、いつきが俺に挨拶してきた。こ
いつは、席が自由なことをいいことに、俺の隣か、その周辺に座る。
俺はというと、最初に座った時から変わらず窓際の席である。よし。
この学校に構造について触れるか。

この学校は、結構広い土地に建っているので建物が色々とある。
俺達がいるところが役者専門のところ。校門の正面の方であって、
別名『スターの館』。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・こ
れパクリだよな？

この両隣には、林と体育館がある。そして俺達がいる校舎の後ろの
方に、大道具やメイクなどを専門で学ぶところがある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・こんなもんでいいだ
ろ。

さてと、もう説明するのも面倒だし、元の場面に戻るか。

「なあ、いつき。ちょっと相談があるんだが。」

「またあ？これでもう七度目だよ？」

「分かってる。だがな、同じ道を通ったらまたすぐに巻き込まれち
まう可能性があるんだよ。だから、こうやって相談してんだろ。」

「もう、しょうがないなあ。いいよ。じゃあ、早速だけ地図出し
てよ。」

「おう。」

「えーと、昨日まではこの道だったんだよね？」

「ああ。」

「じゃあ、ここを通って、こう行けばいいんじゃない？」

「おお！ありがとな。いつも助かるぜ！」

「どういたしまして。僕もいつも楽しませてもらってるからね、別
にこれくらいならいいさ。」

「それが無ければいいやつんだけどな・・・・・・・・。」

こいつは、あまり人が寄ってこない俺に、子供の頃から一緒にいる。
まあ、家が近かったんだ、最初の方は。そのせいでちょっとした事
件に巻き込まれたが、あいつにとっては楽しかったらしく、その事
件が解決した後に、

『話には聴いていたけど、つとむって面白い体質してるね。うーん
・・・・・・・・そうだ！これから一緒にいてあげるよ。どうせ君、その
目つきのせいで友達いなさそうだから。』

と言ってきた。しかもかなりいい笑顔で。それから、こいつは何かという俺と一緒にいる。それと、助けてもらってもいる。高校に入ってバイトをしているのは、こいつのおかげと言っても過言ではない。

・・・・・・・・・・・・・・・・ふむ。ここだけを見ればいいやつに見えるな、こいつ。

「实际いい人でしょ？」

「そこだけは反論させてもらうぜ！！確かに良いやつではあるが、その分俺を色々巻き込んでいるだろ！！」

「いいじゃん。僕は楽しめるし、君はいろいろと経験できる。バイトみたいなものじゃん。」

「うるせえ！！何が『色々』と経験できる。』だ！！そのせいで変な通里名が付いちまったじゃねえか！」

「皇帝、だっけ？あれには僕も驚いたね。でも僕が引つ張る前から呼ばれたみたいだよ？」

「まじでか！？」

嘘だろ。俺はこいつに連れ出される前からそう呼ばれていたのか。

1 - 3 学園と俺

そのことに若干ショックを受けながらそのまま話していると、

「あ。もうすぐ午前中の『あれ』が始まるよ。」

「もうそんな時間か。それじゃ、行くか。」

「そうだね。」

もうすぐ午前中を使つての『あれ』が始まるので、俺達は急いで教室を出た。

諸君は俺達が言う『あれ』が何かわからないだろう。『あれ』とは、役者にとつて大切な体力や声の大きさ、滑舌などの基礎を徹底的にやることである。これは一年生は必ずやらなといけない。まあ、俺にとつては別にどうでもいいんだがな。

正直に言つと俺は、この学校にいること自体が嫌だ。だが、いつきがこの学校と一緒にいる限り、俺を必ず学校に連れて行くだろう。

だから俺は、真面目にこの学校に通っているわけだ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もはや、これは愚痴だな。すまん。その話は置いておいて、授業に行こうか。

「次!!八神!!」

「へえい。」

「そんな声で返事するな!・・・・・・・・まあい。さつさとやれ!」

今はその授業中。何をやっているかつて?確か『十メートルの幅をいかに美しく思いつきり飛べるか。』だな。要は舞台と舞台の間の走り幅跳びだ。それくらいなら普通に飛べるんだが、問題は、『美しく』の部分。これに美しさなんて求めてどうするんだ?そう思っている、

「早くせんか!!」

と叱られた。うつせ。やればいいんだろ、やれば。若干キレそうになりながら俺は、

「だらつしゃ——！！！！！」

と叫びながら、十メートルを余裕で越えていった。着地は普通にきたから、怪我しなくて済んだな。そう思いながら舞台から降りると、

「裏から出て行けと言っているだろ！！何度も言わせるな！！」

と怒られた。なので俺は、

「わっかりましたあゝ。」

と、とりあえず返事をした。直す気なんてねえけどな。その返事を聞いた先生は、

「まあいい。次！！本宮！！」

「はい！！」

次はいつきか。あいつなら無難にできるんだろうな。そう思っている、

「よっと。」

「すごいじゃないか、完璧だ！！」

あっさりとクリアした。しかも、先生の奴が言う『美しく』までクリアしやがったみたいだな。あいつは超人か、と疑問に思えてしまっても仕方がないような気がするな。そう考えていたら、

「失礼な。僕に言わせると、君の方が超人だと思うんだけど。」

「うおっ！！！！いつの間に！？」

いつの間にか、いつきが俺の目の前にいた。そのことについてはツッコまないが、

「お前、人の心が読めるのか！？」

「付き合いが長いからじゃないかな。」

と、至極あっさりと答えるいつき。それでもすごいじゃん。そう思っていると、

「よし！！今日はこれまで！！午後からの授業を寝ないで受けてくれ！！！」

と、締め言葉を言っていた。どうでもいいぜ、そんなこと。聞き流しながら、そんなことを思った。

「相変わらず混んでるね、ここは。」

「普通じゃないか？ 食堂なんだから。」

そう。ここは食堂である。ここは、一年から三年までとたくさんの生徒が利用する。ちなみに購買という手もあるが、あそこはスーパ―のタイムセール並みに混むだろうから、大人しくここを利用して

いる。

察しのいい奴は、これで俺達は弁当を持ってきた来ないんだとわかるだろう。いつきは、家が家なので弁当がかなり豪華になるから弁当は作ってもらってないと言っている。俺はというと、母さんが『あんだ、自転車で通学するんでしょ？ だったら弁当作ったら中身が飛び散りそうで怖い。』と言って、作ってもらっていない。それは俺もちよつと否定できないので、バイト代からいつも出している。余談だが、俺のバイト代の使い道は、旅行雑誌の購入代や昼飯代、後はたまにCDを買ったりしている。まあ、ほとんどが貯金だがな。

「じゃあ、いつものように僕が席を取るから、つとむは僕の方まで料理を取ってきてね。料金は食べてる時に払うよ。」

「分かった。目印は？」

「多分、女子が集まっているところじゃないかな？」

「了解。」

そう言っただけ俺は、券売機に並んだ。これは初めて食堂を利用した時から変わっていない。それは、これが何かと効率がいいからだ。いつきだと並んでいる途中に抜かされたりしそうだが、俺だと外見のせいで抜かされることはない。たまに譲ってもらったりしている。その時は断っているがな。

・・・・・・・・・・・・・・・・自分
で言っただけ悲しくなるな。

まあいい、気にしないで待っているか。

1 - 4 食堂 喧嘩

十分後、俺は券売機でいつきのカレーを、そして自分の親子丼を買って、料理を作っているおばちゃんに券と料理を交換していつきを探していると、

「こっちだよ、こっち。」

と、窓際の席からいつきが手を振っていた。ずいぶん日当たりがいいな、俺はそう思いながらいつきのところに向かった。

「ほらよ。」

「あ、サンキュー。じゃ、いただきます。」

「いただきます。」

と言って、俺達は食べ始めた。その間の会話はざっとこんな感じ。

「お前って、いつもカレーだよな。どうしてなんだ？」

「こういう家庭料理の中で、カレーが一番好きだからだよ。つとむはどうして丼もののなの？」

「この系統が一番安くて、ボリュームがあるから。」

「即答だね。……………でもそんなにお金が必要なの？」

「貯めておいて損はないだろ。」

「そうだけど、さ……………あ。」

「なんだよ。」

「今思い出したけど、巻き込まれた事象を訊いてなかったね。教えてくれる？」

「ちつ。分かったよ。っても、そんな大したもんじゃないぜ。不良に絡まれてた女子を助けただけ。ハイ終わり。」

「なるほど。あそこは道が狭いからね、そうしなきゃいけなかっただろうね。」

「だろ？」

「それで、その女の子は誰なの？」

「知らねえよ。バイトに行く途中で巻き込まれたからな。その後はそのままあの場所に行ったぜ。後ろの方から何やら叫んでいたがな。」

「うわ。流石というか、不愛想というか、君のスルースキルは相も変わらず健在のようだね。」

「俺は急いでたんだ。あつちが何といおうが、俺にとっちゃあ、あの時はうるさい以外の何物でもなかったな。」

「それって、見る人が見れば、酷いとか、人の心がないのかーとか、言われそうだね。」

「関係ねえよ。どんなことを言われようとな。」

そんな会話をしながら、俺は食べ終わって食器を片付けようとしたら、

「あ、待っていてくれたっていいじゃん。どうせ午後からは普通の授業なんだし。」

「俺はさっさと寝たいんだが。」

「授業中に寝てるでしょ?」

「それはたまにだ。」

「だったらバイトやめればいいじゃん。」

「俺にこれからの生活をどうしろと?」

「僕がお金を貸してあげるよ。」

借りた後が鮮明に思い浮かんだので、

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かったよ。待っていてやる。」

「本当!?ありがとね、つとむ。」

「別に。」

と言って、大変不本意ながらも、いつきが食べ終わるまで待つことにした。

「それにしてもさあ、つとむって本当によく巻き込まれるよね、事件とか。どうしてなんだろうね?」

「知るか。それより、しゃべってばかりいねえで、さっさと食べ

る。」

「分かったよ。……でも、これから巻き込まれるんじゃないかな？」

「は？」

どういうことだよ、と訊こうとしたら後ろから、

「うわっ！！」「おうわっ！！」

誰かがぶつかってきて、その反動で俺はテーブルにぶつかった。

イテテテ……。あ、危なかった。食器は無事だ。弁償なんて面倒だからな。

それにしても誰がぶつかってきたんだ？そう思い俺は後ろの方を向くと、

「僕は何もしてないじゃないですか！！」

「うるさい！お前は我らが『アイドル』の光さまに近づこうとしたではないか！それは許されない行いだぞ！！」

「そ、そんなことはないですよ！」

と言い合っていた。それにしても、『アイドル』？『光さま』？こ

いつら、新手的宗教団体かなんか？こいつらが何を言っているのか分からないので俺は、

「何言つてんだ？こいつら。」

いつきに訊いた。すると、

「君つて、本当に知らないよね……。確か、入学式にいろいろと説明があったでしょ？」

「寝てた。」

「はあ……。」

いつきがため息をついた。この学校にいたくないと思っていたら、いつの間にか寝ていた。

だから俺は、何の話だか分からない。それに、俺は教室にいる時はほとんどが寝ているため、誰も（いつき以外）俺に話しかけてこない。廊下を歩いている時は、俺の外見のせいか話しかけてくる奴はいない。せいぜい、俺の事を見てひそひそと話すだけだ。

「いつも思っただけど、君は友達をつくった方がいいんじゃない？」
「そんな事より早く説明してくれ。」

「わかったよ。……僕達の学科ではね、入学式に『アイドル』を選ぶんだよ。そのアイドルってのはね、僕達と違って優先的に仕事がまわされるんだよ。彼女たちは将来を嘱望されているからね、結構僕達とは違うカリキュラムを受けているんだって。」

「へえ……。ん？ちよつと待て、今『彼女たち』って言わなかったか？」

「うん。各学年に一人ずついるんだよ。だから言っただでしょ？入学式に選ぶ、って。」

なるほどな。だからあんな奴らが出てくるのか。そう思いながら、静かに成り行きを見守ろうとしたら、

「ん？なんか静かじゃないか？それと、なんで俺らを見ているんだ？」

「そりゃあ、君が何も知らないからだよ……。」
と、ため息を再びはいつき。え？それが何か問題でもあるのか？
そう思っていると、

「おい、貴様。貴様も同じ学科なんだろう？ならば、^{ひかり}光さまのことを何故知らない？」

さっき、俺に人をぶつけたやつが威圧感を出しながら訊いてきた。
……正直これくらいなら普通だな、さっきの奴はビビっていたが。そんなことを考えながら俺は正直に、

「興味がない。」

と言ったら、

「な、なんだと！？貴様、それでもこの学園にいるものか！？」
と、なんだか役者めいた反応を示してきた。

「別にいいだろ。そんなのは人の勝手だ。それと、さっきの話を聞いて思っただが、別に話そうとしたりするのは良いんじゃないか？」

「^{ひかり}光さまは『アイドル』に認められた方だぞ！！そのような方が、

こいつみたいなのと喋るなんて言語道断!!」

「かつこいいこと言っているように聴こえるがお前ら、自分が何のためにここに入学したのか、忘れたのか?」

「なに!?!」

「お前らは『テレビ』に出たいんだろ? それなのにそんな親衛隊みたいなことしたり、追っかけみたいなことしたりと、普通の人たちとなんら変わらないじゃねえか。」

『うつ・・・・・・・・・・・・・・・・』

俺が言った一言で、いつき以外の奴らは全員黙った。俺としては当然だと思っただけがな、この考えは。と思っていると、

「そうだな!! 俺達テレビに映りたいからここにいるんだったよな!!」 「そうね! ちょっと目標を忘れていたわ!!」 と急にあたりが騒がしくなった。俺にぶつかってきた奴は、「かつけえ・・・・・・・・・・」 とか言っていた。

・・・・・・・・・・ はっ! しまった! つい、いつものノリで言ってしまった! 役者とかそういうのになんたくないのに、何を言っているんだ俺は!?! と顔には出さずに一人で葛藤していると、

「・・・・・・・・・・ ふん!! とりあえず今日のところは見逃してやる。次我らに口答えするなら、容赦はしないぞ。」

と捨て台詞を吐いて去っていった。・・・・・・・・・・ 俺に言われてもな、そんなこと。それに、容赦しないのはこっちの方だぜ。なんて思っていると、

「あゝあ、本当に役者向きのような気がするんだけどなあ。」

「おいこら。てめえ、さっきの事を肴にしながら飯食ってただろ?」

「そんなことないよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ 感想は?」

「楽しかったよ。・・・・・・・・・・ はっ! ず、ずるいよ

! 誘導尋問だよ!!」

「誘導尋問の意味を辞書で引いて確認して来い。今のは自爆というんだ。」

「うう……、卑怯だよ。」

「そんなことより、さっさと食堂出ようぜ。授業の準備しねえとな。」

「うう、君のスルースキルが時々憎くなるよ。」

「何の話だ？と心の中で首をかしげながら俺達は食堂から出た。その時に、」

「あ、あの！先程は助けてくれて、ありがとうございます！僕の名前は菊地慎です。あなたの名前は？」

「……………八神つとむ。」

「僕は本宮いつきだよ。」

「八神つとむさんですか。あなたの先程の言葉、とても心に響きました！これからあなたのこと、『アニキ』と呼んでもいいですか！？」

「はあ！？なんでそうなる！？」

「だって、先程のあの親衛隊に一步も引かないあの態度！みんなの目標を再確認させるあの言葉！それらを見て僕は感動しました！！だから呼んでもいいですか！？」

「ははは。この学校でも『アニキ』呼ばわりか。君はつくづく人を惹き付けるね。」

「うつせ。……………いいぜ。ア

ニキでもなんでも。」

「本当ですか！？ありがとうございます！僕の事は、『慎』と呼んでもらって結構です！それでは！」

「と言って、俺にぶつかったやつ——菊地慎——は食堂を後にしていた。やれやれ、変な奴に気に入られたな、なんて思っていると、友達できたじゃん。よかったね。」

と笑いかみ殺している感じが言ってきた。

「どちらかというと、舎弟に近いような気がするんだが……………」

「はははは。地元じゃあ、君は『皇帝』って呼ばれているんだもん

ね。」

「そこに触れるんじゃないよ。」

等と言いながら、俺達は自分の教室に向かって行った。

1 - 4 食堂 喧嘩（後書き）

主人公、最強（笑）。

1 - 5 お礼 無視

「会長。昼休みに食堂で起きた騒動の事です。」

「早いですね。それで、何が起こったのですか？」

「は。どうにも一年の親衛隊が過剰な行動に出たみたいで。」

「それは穏やかじゃありませんね。ですが、その時は丁度昼休みのころだったんでしょ？どうして報告が上がってこなかったのでしょうか？」

「それは………」

「それはですね、同じ一年がその騒動を収めたらしいんですよ。その上、みんなを勇気づける言葉を言っていたそうですよ。」

「そうなんですか？」

「ええ。訊いたところによりますと、その一年は暴力に頼らず、言葉だけで収めたそうです。それに、自分たちの目標を思い出させる言葉を言っていたとか。」

「それはそれは………ふふつ。で、誰なんですか、その人は？」

「それが………」

「実は、我々でも調べられないんですよ。」

「あら？どうしてですか？」

「おそらく、学園側が何らかの理由で情報の封鎖をしているのでしよう。どうしますか？」

「じゃあ、しばらくは様子見ということ。いいですね？」

『分かりました。』

「………ふふつ。たのしみですね。どんな人なのでしょう？」

会長と呼ばれた生徒は、楽しそうに笑っていた。

キーン、コーン、カーンコーン！

「ふわぁ〜。やっと授業がひとつ終わったぜ。」

「言って俺は、欠伸をしながら起きた。すると、

「君は良い神経をしているね。僕だって寝たいと思っているのに。」
前からいつきの声がした。

「だったら、寝ればいいじゃんか。」

「そうしたいけどね、僕だっていろいろと体面があるんだ。君みたいに外見が不良みたいじゃないからね。」

「大変だな。」

「ねぎらいという言葉なのか、同情という言葉なのか、判別しにくいね。しかし、まだ授業は二つあるわけだが、それを全部寝るのかい？」

「当たり前だろ？誰かさんのせいで、思いつきり先まで勉強しちまっただけからな。」

「あれは、君が『受験勉強したいんだが、いらないやつでいいから参考書くれ。』と言ってきたんだろ？だから僕は、いらないと思った高校の参考書全教科、三年分を君にあげたんだよ。」

「しかし、カバーには『高校受験に必ず勝てる！！』とか書いてあったよな？」

「やってから気付いたんでしょ？どうして返さなかったの？」

「一度貰ったら返しにくいだろ？だからだよ。」

「君は律儀だよな。そして真面目だ。僕があげた本、結局僕に訊きながら、全部終わらせたもんね。」

「あれのおかげで、授業が始まって五分くらいで寝れるぜ。」

「いや、ノート位は取ろうよ。」

と会話していたら、急にあたりが騒がしくなった。

「どうしたんだ？一体。」

「あれじゃないかな？」

といつきが指差した方向にいたのは。

身長はパツと見160ぐらい、髪はショート的茶髪、全体的な雰囲気は何処かオドオドしている。顔立ちは、可愛い、の部類に入るんじゃないか？俺は知らんが。体型はとりあえず、どっかのグラビアかと思えるぐらい他の人よりはいいじゃないか？こういうことに關しては俺は知らん。と適当に觀察しながら俺は、

「あいつ誰だ？分かるか？いつき。」

と訊くと、本日何度目かのため息をいつきが吐きながらこう言った。「君はこの学校の常識とか、そういうものを調べた方がいいじゃないかい？……彼女が食堂で言っていた、今年の一年生の『アイドル』だよ。」

「ふん。……名前とかわかるか？」

適当に相槌を打っていたら、

「君は一度、僕に頼らず自分で調べてみてはどうか？」

と声にちよつと怒りが入っていた。正直これはまずいな、何とかしないといけない、と頭を必死に動かしていると、

「あれ？ねえ、つとむ、彼女がこっちにくるよ？」

「は？」

と、いつきが言ってきたので顔を上げてみると、確かにこちらに向かつて走ってきていた。辺りからは、「なんで光さまが！？」「おい！あいつって、……。」「一体どういう関係なのかしら？」などと、大変うれしくないひそひそ話が聴こえた。変な噂が流れそうで怖いな、まじで。と思いながら、ふと取り巻きが言っていた一言を思い出した。

「なあ、いつき。もしかして、あいつが『光さま』か？」

「そうだよ。長谷川^{ひかり}光。一年の『アイドル』認定生で、この学校に入る前から色々と仕事をしているみたいだね。スリーサイズは上から、」

「そこまで訊いていない。……っていうか、お前のその情報はどこから仕入れているんだ？」

「それは、いくら幼馴染だからと言っても教えられないよ。」

「その言葉でなんとなく想像できるから、いい。深くは訊かない。」
「それはどうも。」

とやっていたら、

「あっ、あの、あなたですよ？昨日、私を助けてくれたの。」

いつの間にか目の前まで来て、そんなことを言ってきた。いつきは、その言葉で事情は理解したらしい。俺も理解したが、他の奴らは分からないらしく、頭に疑問符を浮かべている。俺としては、これ以上また何かに巻き込まれるんじゃないかと思い、

「人違いだろ？俺はあんたとは今日初めて会ったんだぜ？」
思いつきり否定した。

よくいるんだ。助けたやつが俺のところに来て、お礼を言おうとするのは。俺はその時、周りに人がいなくても否定する。その理由は、別にお礼を言われるようなことはしていないし、俺は巻き込まれただけだ、という気持ちが大きいからだ。そのことをいつきに言つと、『君は特徴があつて分かりやすいからね、いくら否定しても、君が助けてくれたと確信できるんじゃないの？』と言ってきた。まあ、その時相手側が一回引くんだが、また日を改めてお礼を言いに来る。その時に俺は否定しないので、やっぱり、とよく言われる。え？そんなの、初めから肯定しとけばいいだろ？今の状況みただと、肯定すると確実に学年全体で噂になる。それだけは何んとしても避けたいので、この場はそのまま否定させてもらおう。そう思つてそいつ——長谷川^{ひかり}光の次の言葉を待っていると、

「嘘ですっ！昨日確かに、私を助けてくれました！」

と言つてきた。ちよつと理詰めで攻めるか。と、俺は否定する方法を決めてこつ言つた。

「証拠は？」

「しょ、証拠つて……。」

「俺だと確信できる証拠は？」

「そ、それは……。」

「ないなら人違いだな。さつさと自分の教室に行け。とんだ無駄足

だつたな。」

「・・・・・・・・・・あ！昨日あなたはあそこを通りませんでしたか！？街灯があつて狭い道のところですよ！！」

「この町、そういうところ多くないか？どこだか分からないんだが。」

「うつ！そ、そうでしたね・・・・・・・・・・。じゃあ、私に絡んでいた人の人数は？」

「しらん。」

「はうつ！！・・・・・・・・・・これでも駄目ですか。じゃあ、あの人たちに『皇帝』と呼ばれていませんでしたか？」

「え？そんな奴いたのか？」

そいつが訊いてくることに對して俺は、全部を否定した。罪悪感？何ソレ？

そして、ついに訊くことがなくなったのか、

「やっぱり人違いだったのでしょうか・・・・・・・・・・？」

と呟き始めた。その時にニコマ目の授業が始まるチャイムが鳴ったので、

「ま、また訊きにきますからね！私、確かに見たんですからね！」
と言って、去つていった。だから、俺じゃねえって。と言おうとしたが、そいつが教室を出て言ったので、何も言わずに寝ようとしたんだが、

「本当は？」

ニコニコ顔でいつきが訊いてきた。こいつは俺がやったことを知っていて、なおかつ俺が隠す理由を知っているはずなので、これを訊いてくるということは・・・・・・・・・・、

「この状況で遊ぶ気か？」

「駄目かな？」

と訊いてくるにつき・・・・・・・・・・なんでお前、上目づかいをしてくるんだ？いくら女っぽい顔立ちだからといって、やるか、普通？なんて思っていたら先生が来たので、

「この話を引つ張るんじゃないぞ。」

と忠告した。それをちゃんと理解したのか（多分、理解していても、構わず引つ張る気にいるだろうが）、

「分かったよ。君に退学されたら僕もつまないからね、ここは君の言う通りにしよう。」

と言ってきた。・・・・・・・・素直なところもたまにあるんだよな、こいつ。

ニコマ目、ニコマ目の授業をなんだかんだ言って寝ていた俺は、終わりのチャイムが鳴ったと同時に机をきれいにし、それを素早く終えた後に教室を出た。他の奴らは教室で友達とかと話して、俺の事に気付かなかったようだ。・・・・・・・・それでも、いつきだけが俺と一緒に帰っている。理由は、『家でやることがあるから。』らしい。

1 - 6 事情 人目

俺はかなりの急ぎ足で廊下を歩いている。他の奴らから見ると、俺はかなりの速さで走っているように見えるらしい。まるで何かに追われているような感じみたいだと、いつきが言っていた。そのいつきはというと、俺を追いかけるように走っていた。

「ちよっと！いつも思っただけどさ！走っているんじゃないんだよね！？」

「ああ。急ぎ足だぞ、これでも。」

「ちよ、ちよっと、は、速くない？」

「そうか？」そう言いながら俺は、歩く速度を少し遅めた。それでようやく、いつきが俺に追いついた。

「ふう。君の歩く速さが尋常じゃないくらい速いんだけど。急ぎ過ぎじゃない？」

「別に。いつものようにさっさと帰りたいだけだ。それに、」

「バイトがあるから？」

「そう。一時間でも多く働かないと時給の関係上、金が貯まりにくいからな。」

俺のバイトについては……後で説明できるだろう。
「前から訊きたかったんだけどさ、つとむって、お金貯めて何をしようっていうの？そんなに必死に働いてさ、倒れたら元も子もないんだからね？」

「俺がこんなに必死に働いて、金貯めてる理由？そりゃあ、旅をしたいからだよ。」

「旅、って……どこに？」

「さあな。とりあえず、目標は三十万だな。それぐらいあれば、日本のどこかには行けるだろうから。」

「ツアーとかじゃ駄目なの？」

「一人旅だ。これだけは譲れない。そうじゃないと、何のためにバ

イトして金貯めてるのか分からねえからな。」

「どうしても？」

「お前がついて来るって言っても、絶対に置いていくからな。．．．
．．．．．平穩な一人旅をしたいんだ、俺は。」

と自分の夢を語っていた。．．．．．あれ！？いつの間に！？
これだけは両親にも内緒だったのに！！などと、今更ながらとんでもなく恥ずかしいと思っていると、

「ふうん。．．．．．いい夢だね。でも僕はついていくからな。君が何と言おうと、ね。」

いつきはそれでも俺と一緒に行くと言い出した。．．．．．

．．．．．なあ、

「それだけ聞くと、告白っぽくなるんじゃないか？」

「うえええ！！な、何をい、い言っているのかな！？僕はそんなつもりで言っていないからね！勘違いしないでよね！？」

思いつきり、いつきがうるたえていた。珍しいな、こいつがこんな顔するなんて。

「いや、俺にはそっちの趣味はないんだが．．．．．

」

「僕だつてないよ！！」

それを聴いて俺は、ふと前から疑問に思っていたことを、いつきに訊くことにした。

「なあ、いつき。」

「僕だつてそっちの趣味はないからね！．．．．．へっ！

？な、なに、つとむ。」

「いや、お前モテるのに、どうして告白を全部断っているのか前から訊きたくてな。どうしてだ？」

「え！？．．．．．え、えーと、そ、そのー．．．．．

．．．．．あ！だつて彼女をつくったら、つとむが巻き込まれたことを逐一かんさ．．．．．話が聴けないじゃないか。」

「おい、今『観察』って言おうとしただろ。」

「そんな訳ないじゃない。……君だってモテるのにどうして彼女をつくらないの？」

「は？俺が？モテる？」

「うん。」

それを聞いた俺はびっくりした。そんなことは知らなかったし、そもそも俺はこの外見でモテないと思っているからだ。続けていつきはこう言った。

「小学校の頃のバレンタインデーにチョコもらったでしょ？あれね、君への数が一番多かったんだよ。あと中学の時、よく文化祭などの時に『暇だったら来てくれませんか！』とか言われてチケット貰ったでしょ？これらを聴いてもまだピンと来ないのかい？」

確かにそんなことあったな。と思い出しながら、なんでこいつはそんなに憶えているのか不思議に思った。しかし、

「あれって、全部お前宛じゃなかったか？俺はそれらの後必ずお前に渡したはずなんだが。」もう。君は本当に鈍くて自覚がないのか、それとも興味がないのかい？」

「興味がない方だな。だから俺は一人旅をしたいと思っているんだよ。」

そう言い合いながら、俺達は校舎を出て別れた。

いつもの場所に置いてある自転車のロックを外して俺は、バイト先まで自転車をこぎだした。この学校は、くれな町の割と外れにある。なので、自転車で通うやつが多い。電車やバスを乗り継いだり、歩いてきたりする奴や車で来るやつもいる。車で来るやつは、いきみみたいな金持ちや、学校から近くにある職場の親が送ってくるくらいである。俺はというと、雨が降ろうが、嵐が来ようが、地震がこようが、自転車で行かなきゃならない。理由は、まず親が車を持っていない。次に、俺自身が節約としてバスや電車を使わないと決めているからだ。実際、このことをいつきに言ったら、『君はバカかい？』と本気であきれられた。やっぱりあきれられるのか？普通は。

1-7 バイト 労働

俺は自転車をこぎながら時計を確認した。時刻は午後三時四十分。このままいけば普通に着けるな。そう思ってそのまま自転車をこいでいった。

「ふう〜。今回もちょっと危なかったな。これからはスピードあげて行かないと駄目だろうからな。」

とバイト先について早々、俺はそんなことを言った。・・・・・・。独り言だから気にするな。そして、俺はバイト先の店に入った。

カランコローン！

「よう、つとむ。今回もギリギリだなあ、さつさと準備しろよ。」
「分かってるよ、マスター。」

ドアを開けた先にいたのは、大分いかつい顔をしているマスター。辺りを見渡すと、いつもながら人がいない。よくこれで店がやっていられるもんだ、といつもここに来ると思う。

この場所は、俺のバイト先の一つである『喫茶モニタージュー』。

この店は、いつきがよくコーヒーを飲みに来ていた店らしい。そのおかげで俺は、ここでバイトができるんだがな。

ちなみに、いつきが言うには、『あそこの店はコーヒーぐらいだよ。本当においしいのはね。だから君がそこで働いたら、結構繁盛するんじゃない？』らしい。俺はマスターの料理は不味いと思ったことはないけどな。あと、俺のバイト代は時給七百五十円、賄い飯付き。
「準備できたぜ。」

そう言いながら俺は、調理場のほうに来た。ここの従業員はマスターと俺の二人だけ。家族とは離婚して以来会っていないらしい。俺が働く場所は基本的に調理場だが、たまに店内で起こった揉め事を解決したり、接客をやったりしている。

ここに来るやつらは（俺がいないときは知らないが）、近所の暇な奴らか、近所の女子高生どもぐらいだな。後は、いつきが来たり、

俺の知り合い（俺が働いていることも知らないで）が来たりしている。．．．．．知り合いの場合は、俺がここで働いていることを他言無用にさせている。知られたくないだろ、こんなところ。ちなみに、家族は俺がバイトをしていることは知っていても、どこでバイトをしているのかは知らない。

「おせえぞ。さつさと注文されたものつくれ。え」と．．．．．ショートケーキにチーズケーキを二つずつだ。ちなみに、飲み物はもう出しているからな。」

「了解。生地はあるんだから他のやつから作ればいいか。」

そう言いながら、俺は注文されたものを作り始めた。マスターが言うには、『お前がくると、料理の注文が出始める。』だそうだ。俺自身は料理が上手いと思ったことはないが、いつきに言わせると、『君は料理が本当に上手だね。もっと君が作る料理を食いたいな。』らしい。お前、それで何かと俺を家に呼び出して色々なレシピ見せただんな？．．．．．そのおかげでレーパトリーが増えたがな．．．．．話を戻そう。

「ほら、出来たぜ。ショートケーキにチーズケーキだ。」

「相変わらず早いな。よつと、．．．．．はいよ。ショートにチーズだ。」

「うわあ、これって八神君が作ったんでしょ！？いつ来てもすごいわ。」

「そうだよな。私達、八神君がくるこの時間帯狙って来るもんね。」

「うう！やっぱりおいしいわー！．．．．．ねえマスター、今暇なんだから八神君をこっちに呼んだら？」

「いいけど、あいつ凄い人相悪いぞ。お前らそれでもいいのか？」

「私一回会ったことあるけど、そんなに怖い人に見えなかったよ。ちよつとだけ目つきが悪かったけど。」

「悪かったな。これは生まれつきなんだ。」

と一通り会話が進んだので、俺はカウンターの方へ来た。その時の

客（女子高生が四人）の反応はというと、『結構カッコイイじゃん！』『でしょ？』『怖そうだけど、結構イケているわね。』『怖そうなのに料理ができる、ってギャップがいいね。』と口々に感想を言っていた。

……これは褒められているんだよね？そう思っていると客の一人が、

「ねえ八神君。八神君って彼女いないの？」

どうして女子たちは、何かと彼女とか恋愛ものについて訊いて来るんだ？いつもそう思うが、男子が好きなモデルとか訊いてくると同じなんだろうな、と、いつもその結論にいたってしまう。別に気にしないが。

「いねえよ。それがどうした。」

「えゝ、そんなの勿体無いよ。八神君、折角かつこいいんだからさ、誰かと付き合えばいいじゃん。」

「生憎と、俺には今好きな人がいないんだ。それに、仮に付き合ったとして、長く続かないと思うしな。」

「そうかな。八神君はその人を一生大切にしろそんな気がするなあ。」

「あ！分かるよ、それ！確かに、八神君って普段は怖そうな人だけどさ、話してみると結構親しみやすいんだよね。」

「あと、八神君は女性に優しいわね。料理を出す時は必ずと言ってもいい程女性に最初に出す、と聞いたことがあるわ。」

それは親父と勝負しているときに、『男ならば、女子には優しく接するべきだ！』と言いながら俺を殴っていたからである。そのおかげで俺は、割と女子に対しては普通よりちょっとだけ優しく接している、らしい。らしい、とは、いつきが『僕と女子との接し方がちよつと違う。』と不満顔で言っていたからだ。……

「それが不満だったのだろうか？」

「それ、誰から聴いたんだ？」

「でも、確かに八神君って優しいよね。なんだかんだ言ってるけど、キとかにトッピングしてくれたり、ちょっとサービスしてくれるじゃん。……その分の代金は払わせられるけど。」

「いいな。私、これからもここに来ようかな。」

「来るのは別に構わないが、何か注文しろよ。」

「八神君が作るならいいよ。」「私も。」「私も、だな。」「そうだね。」

そんな話をしていると、

「ん？もう六時か。マスター、俺は上がるわ。」

「おう。ほら、まかない飯だ。バイト代は…….いつも通りだな。」

「分かってるよ。じゃあ、また明日。」

「おう。」

と言つて、俺は喫茶店を出た。さてと、次のバイト先に行くか。

いつきが考えてくれた新しいルートで俺は、次のバイト先に向かった。昨日までのルートよりちょっとだけ時間がかかるが、それぐらいならなんとかなる。そう思つてペダルをこいで行った。

「お疲れ様です！」

「おう！！さつさとしろよ！つとむ！！」

「はい！！」

俺は二つ目のバイト先に何事もなく着いた。…….言い忘れていたが、俺はバイトを掛け持ちしている。さっきの喫茶店と、今からやる道路工事での雑用だ。夜のバイトって、高一では無理じゃないかって？まあそこはな、いつきに色々やってもらっているから大丈夫なわけだ。ここでの時給は千五百円。それで、ここで働く時間が七時から十時の三時間。要は、ここでのバイト代が、普段の俺の生活資金に充てられる。つまり、ここで働かないと普段の俺の生活はできないという訳である。

ここの人たちは結構いい人たちなので、本来は時給千五百円なんだが、たまに二千円にしてくれる。…….どこから出して来

るんだろう、その金は？

こんな感じで俺のバイトの説明は終了。ここからは、特に面白いことはないので概略だけ説明するか。

この後は、何事もなくバイトを終えて、何事もなく家に帰り、茜にいつもの言葉を言い、両親に、お休み、と言って寝た。明日は何事も無ければいいぜ。

第二話〜面倒事ほど近づいてくる〜（前書き）

これから第二章が始まります。

第二話　面倒事ほど近づいてくる

翌、二十三日木曜日。今日もいつも通りに起きて朝食を食べているところで茜が起きて、昨日遭った出来事を色々と話しあった。ちなみに、俺が巻き込まれたこと（一年同士の喧嘩）については話していない。いらぬ心配をかける気がするからだ。そして、いつもの時間に俺は、学校に向かった。

俺がいつもの道を自転車で走っていると、一人の老人が赤信号のなかを渡ろうとしていた。それを見た俺は、反射的に自転車を降りてその老人に駆け寄り、肩をつかんでこう言った。

「危ねえだろう！！いったい何考えてるんだ！死ぬところだったんだぞ！？」

そう言いながらその老人の目を見てみて俺は、

「・・・・・・・・・・チツ、余計なお世話だったか。そんなふりするんじゃないよ。紛らわしい。」

そう吐き捨てて自転車を再びごうとしたら、

「・・・・・・・・・・なぜわしが演技をしているとわかったんじゃない？」

とその老人が訊いてきた。俺は自転車の調子確かめながら説明した。

「あんたの目を見て気付いたんだ。あんたの目は、これから死のうとしての奴の目じゃなかった。これから死のうとしている奴の目は、本当に死んだ魚のような感じがするんだ。目に正気がないって感じが。あんたの目には正気を感じられた。だからだよ。」

そしたらその老人は、

「ほう。まるでその人を見たことがある言い方じゃのう。」

と言ってきた。あそこまで話したからこのまま話していいだろう、と時計を確認しながらそう思って、俺はまた説明した。

「あるよ。今までで、少なくとも二十回はな。そいつらはな、いろ

いろな理由で死のうとするんだ。家族に死なれた、とか、借金ができた、とか。その度に、俺はそいつらの事を見ながら、そいつらをなんとか生かそうとしたからな。雰囲気でなんとなく分かるんだよ。そのことでは、あんたには騙されたぜ。じゃあな、爺さん。」

「と言って自転車をこごうとしたら、」

「お主、名前は？」

と訊いてきたので、俺は自転車をこぎながら、

「八神つとむだ！もうこんな事するんじゃないぞ！！！」
と言った。だから、

「今年の一年にそんな奴がおったのう。……今年には面白そうなことになりそうじゃ。」

と老人がつぶやいたのを、俺は知らない。

「ふう、なんか変な爺さんだったな。あいつのせいで、ちょっとスピードを上げなきゃいけなくなった。」

そう言いながら自転車をこいでいると、

「キャ——！ひったくりよ！！！」

と叫ぶ声が近くで聴こえた。……また巻き込まれそうな感じがして嫌だな、と思っていたら、何とひったくり犯が俺の方へ向かってきた。やっぱりか、とあきらめにも似た感じで溜息をつきながら、

「おい。」

と犯人に呼びかけたら、

「邪魔だ！！どけっ！！！」

と言って、ナイフを向けながら俺に向かって来た。……

・ナイフごときで俺がビビるかっての。そう思いながら俺はその犯人に、

「大人しくしろ。」

と言って相手の両手首をつかみ、そして、

ガシッ！！ドシャアアン！！！！

「ぐはああ!!」

と背負い投げをしてその犯人を気絶させた。ふう、やれやれ、こうなったら今日は遅刻確定だな。と半ば諦めて俺は、いつきに電話した。

ブルルルッ!ピッ!!

「なに?つとむ?朝から僕に電話なんて珍しいね。」

「ああ。単刀直入にいうとだな、今日は遅刻するから理由を含めて先生に言ってくれ。」

「はあゝん。また巻き込まれたんだね?.....分かったよ。理由は僕の方で考えるから、君は何があつたのかを、学校に来てくれたら話してくれ。」

「助かるぜ。ありがとな、いつき。」

「そう思っただったら、今度泊まりに行ってもいいかな?」

「.....それは考えておこう。」

「じゃあね、あんまり遅くならないでよね。」

と言って電話を切った。.....最後の言葉を聴くだけだと、待っているって感じがするのは、なんでだろう?そう思っていたら、

「あ、ありがとうございます!」

と、ひったくられた人がお礼を言ってきた。俺としては、いつもの事なので、

「別に。」

と素っ気なく返した。そうこうしていると、誰が呼んだか知らないが、パトカーが来た。どうせ俺がかかった事件なんだから、いきが恐らくあいつを呼んでいることだろう。俺達が巻き込まれた事件の時に知り合った、あいつを。

第二話〜面倒事ほど近づいてくる〜（後書き）

これまでの感想、お願いします。

2 - 2 警察 ひつたくり

「やっぱり、お前か。本当によく巻き込まれるな、いろんなものに呪われてんのか？」

「うっせえよ、菅さん。あんたが呼ばれたんなら、俺がいるってことぐらいわかるだろ？」

「まあな。」

とタバコを吸いながら笑う菅さん。ちなみに犯人は、俺の背負い投げで気絶してパトカーに連行された時に気が付いた。・・・・・・よかったぜ。死んだのかと思った。

さてと、菅さんについて説明しなきゃな。名前は菅本信吾。すがもと しんご職業は、この流れからわかるように、警察官。俺といつきが巻き込まれた事件で世話になって以来、俺が巻き込まれた事件の時には必ず来る。俺と菅さんは、その原因はいつきだとにらんでいる。

「しっかし、お前、凄いな。」

いきなり菅さんがこうつぶやいた。

「あ？何がだよ？」

当然俺は分からないのでそう返したら、

「なにがって、お前が捕まえたひつたくり犯、指名手配されてたやつだぜ。なかなかシッポをださねえから、どこに居るのか分からないかったんだぜ。」

と説明してくれた。ふん、結構すごいやつだったんだな。と捕まったやつに対してちょっとだけ賞賛をしていたら、

「さてと、これからはいつも通りのやつだな。じゃ、行くぞ。」

と菅さんが手招きしてきた。俺も慣れているので、

「自転車で行くから先に行っててくれ。あ、学校には遅刻するって言っているから。」

と返した。

「やっぱり慣れてんなあ。」

「慣れる必要はないと思うんだが。」

「まあ、そうだな。」

と言って、菅さんはパトカーで、俺は自転車で警察署に向かった。

ところ変わって、学校では、

「八神……。ん？八神は欠席か？」

「あ、先生。八神君は自転車のタイヤがパンクしたとかで、学校に遅れるそうです。」

「そういえば、あいつは隣町から来ているんだったな。分かった。

え」と、次は、安井。」

「はい！」

そんな感じで点呼が進んでいた。

「学園長、おはようございます。」

「おはよう、諸君。」

「それにしても、少し遅かったようですが、何をしていらしたんですか？」

「ちよつとした練習をしていたんじゃ……。まあ、その練習で危うく死にそうになったかの。」

「な、なんてことしていたんですか！！そんなことなさないでください！！」

「いいではないか。それに、そのおかげで改善点が見つかったしのう。」

「……。？」

「そういえば訊きたいことがあるんじやが、八神つとむはこの学園にいたかのう？」

「ええ、いますよ。教師達からはだいたい評判が悪いようですが。」

「ほほう。なるほどのう。……才能とは意外と誰にも
気付かれないものじゃな。」

「学園長、何か言いましたか？」

「なんでもないわい。……さて、今日も一日、頑張る
かのう。」

と言って、学園長と呼ばれた老人——鯨井朱雀——はいつものよう
に仕事を始めた。

「久し振りだなあ、ここに来るの。」

俺は警察署を見上げながらそうつぶやいた。ああ、シンド。自転車
であそこから地元の警察署まで軽く二キロぐらい走ったぜ。と、息
を整えていたら菅さんが、

「ほらっ、さっさと来いよ。調書つくれねえだろ。」

と言ってきた。分かっているよ、全く。そうつぶやきながら、俺は警
察署の中に入った。

「これで、全部だな。」

「ああ。」

「登校中にひつたくり犯が向かってきたので、返り討ちにした、と。
いつもとかわんねえなあ、おい。」

「別にいいだろ。」

「……いいぜ。もう終わったからな、さっさと学校に
行けよ。」

「分かっているよ。」

と言いながら、俺は席を立てて帰ろうとしたんだが、そこに一人の
刑事が来て、

「野郎、証拠は拳がっているのになかなか他の件を認めません。」
と言ってきた。往生際が悪いな、そいつ、と思いつながら帰ろうとし
たら、

「そうか。……おい、つとむ。」

と菅さんが呼び止めた。俺はその後の言葉が予想でたので、
「断る。」

「いいじゃねえか、俺とお前の仲だろ？」

「ふざけんな！！それぐらい自分で口をわらせる！！」
と言ったら、

「……………やってくれたら、お前さんのせいで被った被害に、目をつむってやるぜ。」

と言ってきた。それに俺は、ものすごく心当たりがある。畜生、こんなところで使いやがって。

「てめえ、そりゃあ、脅しっていうんじゃねえのか？」

「で、やるのか？やらないのか？」

「……………いいぜ、やってやるよ。そのかわり、次からこんなこと俺にさせるんじゃねえぞ。」

「分かってるよ。じゃ、よろしくな。」

と言って、菅さんは俺を取調室に入れた。菅さんに報告した刑事は、『なんで一般人にやらすんですか！？』と言っていたが、菅さんと俺は気にせずに入った。

「なんで一般人に手伝わせるんですか！？」

「ああ、お前はまだここに来て間もないから知らないんだな。」

「何がですか？」

「あいつ——菅さんと一緒にいた少年は、事件解決にすごく貢献しているからな、この署じゃ結構な有名人なんだよ。」

「そうなんですか？」

「ああ。それと、この町はヤクザや不良グループがほかの町より多いだろ？」

「そうですね。なんだか雰囲気としてはどこもかしこも一色触発、って感じがしますからね。」

「でも、その割にはそいつらの犯罪件数が少ないだろ？」

「確かにそうですね。ですが、それと何が関係しているんですか？」

「まとめているのはあの少年だ。この町のヤクザや不良グループは、あの少年がいるからこの町では犯罪を起こさないんだ。いや、他の町でも起こせないかな？彼はそういう騒ぎに敏感のようだからね。」

「・・・・・・・・・・。」

「という訳だ。この町が平和なのは、ひとえにあの少年の力があるからだろうな。」

「す、凄いですね。」

「ああ、全くだ。」

2 - 3 事情聴取 遅刻

「邪魔するぜ。」

と言いながら俺は、取調室に入った。もちろん菅さんも一緒にだ。そいつ——名前は横井達哉と言うらしい——は、俺を見た時に思いっきり舌打ちをした。捕まえたやつが来れば、その反応は当然だよなあ、と感じながら俺は、

「こつからは俺達がやるから、あんたらは別にいいぜ。」

と言つて、さつきまで取り調べをしていた奴らを部屋から出した。

「俺もここにいなきやいけねえのか。」

と言つた菅さんはスルーして、

「さてと、こつからは取り調べ第二幕だ。早速訊くが、お前、他に十数件ひつたくりをやっているんだつて？」

「やってねえよ。今回が初めてだよ。」

「その割にはだいぶ慣れてる感じだったけどな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

俺のその一言で、そいつは黙ってしまった。恐らくは言い訳でも考えているのだろう。が、そんなことをしても意味がないことを思い知らせてみるか。そう思つて俺は、唐突にこう訊いた。

「おいあんた。何処かのグループに入っていないのか？」

「あ？なんでそんなこと訊いてくるんだよ？」

「いいだろ、別に。で、どうなんだ？入っているのか？いないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・入ってるよ。」

「リーダーの名前は？」

その一言で、菅さんは俺がどうするのか分かったようだ。・・・・・・・・このおっさん、勘と推理力はすごいのに、どうしてずっと平刑事をやっているんだ？と毎回疑問に思うところだが、過去に何かがあつたんだろうな。そう考えていると、

「・・・・・・・・安達剛志さんだよ。」

と言った。安達剛志、ねえ。俺は、そいつが言った名前を頭の中で復唱しながらケイタイのアドレス帳を見た。え〜と、安達、安達・・・・・・・・あつた、あつた。よし、あいつには悪いがちょっと電話に出てもらうか。そして俺は、電話をかけた。ちなみに、捕まったやつは俺の行動を見て不審に思っていたことは、言うまでもないな。

ブルルルルルッ!!ピッ!!

「よう、久し振りだな、安達。」

「つとむじゃねえか!!なんだよ、いきなり電話してくんじゃねえよ!びつくりしたじゃねえか!!」

「悪かったな。・・・・ところで、今大丈夫か?」

「ああ、いいぜ。珍しいな、お前が電話してくるなんて。いったいどういう風の吹き回しだ?」

「ちよつと確認したいことがあつてな。・・・・・・横井達哉つて、お前らのグループに入っているのか?」

「横井達哉?・・・・・・・・ああそうだ、入ってるぜ。そいつがどうしたんだ?」

「ひつたくりをして捕まったんだよ。」

と俺は正直に言った。ここまでで、横井の顔がものすごい勢いで青ざめていった。こつから先は、お前に言論の隙は与えないぜ。

「あいつ・・・・・・・・。また性懲りもなくやりやがったな!!だから指名手配になった時に、『もう自首しろ』って言ったのに!!」

と安達が怒っていた。ほほう、つまり・・・・・・・・、

「指名手配になる前からやっていたと。」

「ああそうだ。・・・・・・・・なあ、つとむ。そいつに代わってくれねえか?」

「いいぜ。・・・・・・・・ほらよ、安達からだ。」

と言ってそいつに電話を渡した。そいつは、全身をガタガタと震わ

せながらゆつくりと電話を受け取った。

『よう、横井。お前、捕まったんだな。』

「は、はい……………」

『……………馬鹿じゃねえかテメエ！！なんでそんなことして
いたんだよ！！』

「す、すみません……………。つい出来心で……………」

『それで済むなら警察はいらねえだろうが！！……………
もういい。お前は今日からメンバーから外す。分かったな？』

「わ、分かりました……………」

『じゃあ、ケイタイは持ち主に返しとけ。』

「は、はい……………」

と言つて、横井は俺にケイタイを返した。それを受け取って俺は、
「ありがとな。」

『いいさ、別に……………それより、こんなことになつてし
まったのは、俺がしつかりまとめていなかったせいだ。済まない。』

「いいさ、そんなことは。お前はよくやっているよ。」

『その言葉はありがたいな……………もう用は済んだか
？』

「ああ。助かったぜ。」

『そうか。じゃ、また会おうぜ。』

「おお。」

と言つて、電話を終了させた。それと同時に、

「さうて、全部はいてもらおうか。」

と菅さんが言った。すると、さっきの態度が嘘のように自分の犯行
を淡々と語った。

……………よほどショックだったんだな。と思ったが、自
業自得なんだから同情する必要はないな、すぐに思い直した。

「助かったぜ、つとむ。お前のおかげで事件が解決したよ。今回も
表彰状いらねえんだろ？」

「いるわけなえだろ。あんなの、大分もらっていたからな。」

取調室から出た俺と菅さんは、そんなことを言いながら歩いていた。「そういえばそうだったな。小学校に上がる前からもらっていたんだよな。そりゃあ、いらねえよな。」

「ま、それは今はどうでもいいわけだが。今何時だ？」と肝心なことを訊いてみた。

「ん？今は十時半ぐらいだな。．．．．．そういえば、おまえ、学校に行く途中だったんだよな。ワリイ、ワリイ。」と笑って流そうとする菅さん。おい、そりゃあ．．．．．、

「まじでか！？俺はさっさと行くからな！！またな！！」

というと同時に俺は駆け出した。ヤバイヤバイ！！ここから学校までは最低一時間二十分ぐらいかかる！！そう思いながら署内を出て、俺は自転車を思いっきりこいだ。

その時の光景を見た人は、

『まさか自転車で自動車と同じような速度を出す人がいるなんて．．．．．』

と言っていたという。

2 - 4 再び 二年

「どりゃあああ——！！！！！！！！」

キキッ——！！！！！！！！ズザザザザ——

と、ものすごい音を出しながら自転車が進んだ。

ハア、ハア、ああ、もう駄目だ、死ぬ。と思いながら腕時計を見ると、時刻は十一時十分。なんと一時間も経たずに着いてしまった。……人って、死ぬ気でやればできるもんなんだな。そう思いながら俺は、自転車をいつもの場所に置きに行つて、校舎に向かった。

昼休みは十一時から十二時まで。十二時から五十分の授業が三つ。だから帰りが三時くらいになる。という説明を忘れていたな。スマン。

そのまま食堂に行つたら、

「おい、ここだよ、つとむ——」

といつきが叫んでいた。今の俺には、それに対して怒鳴ることができない。なので、スルーして自分の料理を取ってきてからにしよう。そう決めた俺は、券売機に並んだ。

意外にも早く順番が来たので、俺はとりあえずカロリーが高いものを三つほど頼んだ。受け取る時におばちゃんが、『あんだ、ものすごい怖いけど、大丈夫かい？』と心配された。今の俺はそんな大変なことになっているのか？そう思いながらもいつきが待っている席に向かった。

「もう、なんで無視するのかなあ？」

「大丈夫ですか？アニキ？」

席に着いた時にいたのは、つとむと菊地慎だった。ツッコむ気がお

きない俺は、

「もう無理。死ぬ。」

と言って、勢いよく自分が頼んだものを食べ始めた。その光景を見た二人は、

「・・・・・・遅刻した理由を訊くのは、今は無理そうだね。」

「ずいぶん食べますね・・・・・・。」

とバラバラなことを言っていた。

二十分後、

「あゝ、食った、食った。今日でちょっと散財したから、明日からどうすつかな？」

と言っていたら、

「僕たちの事を忘れていないよね？」

「そうですよアニキ。僕達を忘れないでください。・・・・・・。つていうか、さっきのアニキの顔、ものすごい顔でしたよ。そこらのヤクザが裸足で逃げだしそうなほどの。」

と言ってきた。・・・・・・。そんなにひどかったのか？俺の顔。ふと疑問に思ったが、いつもの事なので、考えるのをやめた。

「ところでさ、ずいぶん遅かったんじゃないの？僕の予想では、午前中の授業の途中に来ると思っていたのに。」

「ああそれはな、いろいろとあったんだ。」

とはぐらかしていると、急にあたりが騒がしくなった。

「なんだ、なんだ？」と驚いていると、

「あ、あれですよアニキ。」「あ、なるほどね。」

と、慎が指をさした方を見ていつきが納得したようだ。何が起こつてんだ？と思って慎が指をさした方を見るとそこには、

「久し振りに食堂を使うというのも悪くはないですわね。」

と言いながら入ってきた、

いかにもお嬢様です、って雰囲気を出している奴が、取り巻き――あれは親衛隊か？――を引き連れながら席を探していた。ふむ、もしかすると・・・・・・、

「あいつも『アイドル』か？」

「よく気付いたね．．．．．と言いたいところだけど、彼女の名前と学年はもちろん知らないよね？」

「当たり前だろ。」

「堂々と言い切らないで下さいよアニキ．．．．．。」

それに慣れているいつきが、

「彼女は二年生の『アイドル』で、篠宮ルカ。篠宮財団の娘さんだね。あ、ちなみに妹がいるよ。」

「いや、最後の方はいないんだが．．．．．それはどこで仕入れたんだ？つて、訊くのは野暮だな。いろんな所で会っているんだろ？」

というと、ため息を吐きながらいつきが、

「そうなんだよ。僕はああいう性格は嫌いなんだよね。あの、はなにつく態度もね。」

と言った。本当に珍しいな、こいつがここまで言うなんて。

「面と向かつては言えないんだろ？」

「それが言えたらどれだけ楽か。」

と話していると、

「え？本宮君とあの人は知り合いなの？」

と、慎が訊いてきた．．．．．こいつも意外と何も知らないよな。そう思いながら俺は、

「こいつの親はな、金持ちなんだよ。だから、ああいう奴でも知り合いになっちまうんだよ。狭いからな、金持ちの世界つて。」

と説明した。それで慎は納得したようだ。いつきはというと、『まあまあだね。』とでも言いたそうな目つきだった。ふう、何とか俺の命の危機が去った。上手く説明しないと、いつきが俺に罰ゲームと称して、色々ヤバイもんをやらせる。一番最近にやられたのが確か、雪山で一週間生き延びる、だったな。あれ以降、俺はこいつの説明をうまくできるように、毎日毎日考えていた。それが報われてよかったと感動していたら、

「あれ？アニキ、本宮君。その人がこっちに来るんだけど。」

あ、なんか既視感^{デジャブ}。いつきの方を見ると、あいつも呆気にとられた様だった。そして、篠宮ルカがこちらの席に近づいてこう言った。

「あら、こちらの席を使ってもよろしいでしょうか？」

物腰としては穏やかな感じがするが、口調は完ッ全に俺達が席を譲る、と決めつけている感じがする。それを聞いた俺らは、

「どうしようね？」「僕はまだここにいたいんですけど。」「だな。俺もさつき食べ終わったばかりだから、もうちよつとゆっくりしたい。」「なら、つとむ。君がそう言いなよ。」「ハア！？何言つてやがんだ！？」「アニキ、頼みました！！」「だつて。」「結局俺なのか・・・。」

と相談をしていた。結論が出たので喋ろうとしたら、

「貸しなさいと言っているでしょ！？」

と勝手にキレていた。これがこいつの本性なのか。と感心しながら俺は、

「貸せるか、馬鹿野郎。」

と吐き捨てた。これを聞いた他の奴らが、「おい。あの一年、二年相手にケンカ売ったぞ。」「でも、あの人って確か昨日の・・・。

・・・。」「おい。こりゃあ、生徒会呼んだ方がいいんじゃないか？」と話していた。また騒ぎが大きくなりそうだな。とぼんやり思いながら俺は、目の前のやつ——めちゃくちゃ怒っている先輩にあたる人——を適当に観察していた。・・・。

こいつは感情に流されるタイプだな。一旦怒れば冷めるまでそのまま、って人だな。と観察結果を分析していると、

「なんですって！？どうして貸せないかしら！！」

と案の定、キレたまま突っかかってきた。理由ってそりゃあ、

「俺達が今ここを使っているんだ、どうして貸さないといけないんだよ。」

「それは私が、ここで昼食を食べたいからですわ！！」

「他にも似たような席があるだろ。そこを使え。」

「私はここがいいんですわ！」

「子供みたいなこと言ってるじゃねえよ。お前はあれか？自分が言ったことがそのまま現実になるとでも思っているのか？だったら、やっぱ子供だな。」

「なっ！！？そ、そんなことはないですわよ！」

「言ったな。だったらこの席は諦めるんだな。」

「うっ！！・・・・・・分かりましたわ。と言うってもお思いでしたか！皆の者、この物を強制的に他の席に移動させなさい！！」
『はっ！！！！』

と言っで、そいつの周りにいたやつ——親衛隊だろうな——が俺達を強制退去させようとした。なので俺は、

「ふざけてんじゃねえぞ、テメエら。死にたいのか？」

と、俺がいつも不良の喧嘩に巻き込まれた時に出す冷たい声と、殺気を周りに出した。いつきはそれを平然と受け、慎は腰が抜けた状態になり、周りの親衛隊も完全に怯え、命令した本人も、腰が抜けたみたいだった。

2 - 5 口喧嘩 称賛

はん。暴力沙汰で俺にかなうと思うんじゃねえよ。

そう思いながら、俺は殺気を引っ込めつつ、

「一年もそうだが、どうして親衛隊をつくるんだろ？あんなものの、つくったって何の意味もないのに。」

と言った。すると、怯えていた親衛隊の一人が、

「ば、馬鹿にしているのかっ！！親衛隊はその人を守るためにつくられるものだぞー！」

と言った。それってよう………、

「自分でそれ位できるだろ？っていうか、それ位出来ないんだったら、テレビに出るなんていうのはやめるべきだな。」

「な、何を言っているっ！！」

「なにつて、簡単なことだ。テレビに出るってことは、自分が有名になるってことだろ？だったら、ストーカーとか自分で何とかできなきゃいけねえだろ？このご時世なんだからよ。」

俺が言ったことにより、他の取り巻きとかも「そうだよな……」。
。「確かに、今は何かと危ないわよね。」
。「人を頼るにしても、誰が信用できるか分からないよな。」
。「結局自分で何とかするしかないのか……。」と話していた。

いい具合に周りがざわついたな。これは、俺がこうなるような言葉を言ったただだが、予想以上に効果が出ているな。などと辺りを見渡していると、

「お前には、守りたいと思っているものがないのか！？」

とそいつが言った。よくしゃべるな、こいつ。他の奴らはまだ怯えているのに。と素直に驚きながら、

「じゃあ、お前はそいつを、命を懸けて守ろうと思うのか？そいつには命を懸けて守るだけの『何か』があるのか？」

と言ったらそいつは、とうとう黙ってしまった。それを好機と見た

俺は、

「ないと思ってるんだろ？そういう奴が偉そうなこと言うんじゃないよ。軽々しく『命を懸ける』なんて言葉を二度と口にすんじゃないぞ。次俺の前で言ったら、今度はこれだけじゃすまねえからな。」と言ったら、今度こそそいつは黙った。やれやれ、ようやく終わったか。と先程座っていた席に再び座ったら、

「おお——！！！」「すげえ——！！！」「なんだあの一年！？二年相手にあそこまで啖呵をきれる奴がいたのか！？」「やべえ、同じ一年としてすげえ誇りに思うぜ！！」「私は二年だけど、彼、とても素晴らしいこと言うわね。」「テレビのワンシーンだと思っただぜ！」「私も！！カメラがどこにあるのか探しちゃった！！」などと歓声を上げていた。

「……………ひよつとすると俺、またやつちまった？畜生！！なんで毎回毎回こうなるんだよ！！と誰にもぶつけられない怒りにさいなまれていると、

「アニキ！！僕、ずっとついていくッス！！」

「全く、君は生まれながらの役者だよ。」

とそれぞれ感想を言ってきた。慎は良いとしてもだ、いつき！！お前ふざけてんじゃないやねえ！元はと言えばテメエが俺に押し付けたからだろうが！！その心の中でツツコンでいると、

「……………フン！！気分が悪いですわ！こんな奴に負けるなんて！！」

と言いながら篠宮は戻っていった。あゝ、ようやく終わった。今日はいえらく巻き込まれるなあ。とここまでに巻き込まれたことを確認していると、

「ねえ、君。名前は何ていうの？」「お前、よく言ってくれたぜ！！」「どこのクラスにいるの？」「趣味は？」「どうやったらあんな演技ができるの？」と、さっきまで成り行きを見ていた奴らが俺に詰め寄ってきた。うおっ！！いきなり来んじゃないやねえよお前ら！！また面倒なことになっちまったぜ！！と思いつながら、どうしようか

考えていたら、

「あ。もうすぐ授業だよ、つとむ。」

といつきが言った。

「そうか。じゃ、教室へと急ぐとするか。」

と言って、俺は詰め寄ってきた奴らを飛び越え、いつきはその隙に
慎と一緒に食堂を出た。残ったやつらは、呆気にとられたまま食堂
に残された。

2 - 6 学園長 爺さん

「zzz・・・。。。」

「つとむ、もう一コマ目終わったよ。起きなよ。」

「zzz・・・。。。。。」

「ねえ、つとむってば。」

「zz・・・。。。。。。。」

「もう、こうなったらこれしかないね。」

「zzzz・・・。。。。。。。」

「（ゴニョゴニョ）」

「（ガバツ!!）俺はそんなことをしていない!!」

俺の一言で辺りが静まりかえった。その原因をつくった張本人はと言つと、

「あ、やつと起きたね。全く、疲れてるのは分かるけどさ、説明し
てくれないかな?」

と俺の目の前でそんなことを言いやがった。・・・起
こすためにあんなこと言つたのか?おい。と半ば俺が呆れていると、
「早く説明してよ。」

といつきが催促してきた。・・・しょうがない。さつさ
と説明してさつさと寝るか。そう考えて俺は、簡単に事の有り様を
説明した。説明を聴いたときは、

「それは大変だったね。・・・怪我とかしなかったの
?」

と言ってきた。珍しいな、こいつが俺の怪我を心配するなんて。な
んて思いながら、

「別に、どこも怪我してねえよ。」

と正直に言ってから、

「三コマ目が終わったら、起こしてくれ。」

と言つて俺は寝た。・・・今は体力を回復させるのが優先だか

らな。話してる場合じゃねえんだ。と考えていただろうが、そのまま意識がなくなった。

「全く、いつもいつも無茶をするね、君は。だから僕は心配しているのに……。」

といつきが呟いていたら、辺りが騒がしくなった。それが誰のせいなのかはもう知っているので、いつきはそのまま放って置くことにした。すると、

「こつ、今度こそあなたという証拠が……って、あれ？ 寝ているんですか？」

と、近づいてきた光はそう言った。それを聴いたいつきは、

「朝から大分大変だったらしいからね。多分、今日は放課後まで起きないよ。残念だったね。」

普通に状況を説明した。それを聴いて光は、

「あうう、そ、そうなんですか……。」
と言って戻っていった。

「全く、君は巻き込まれたことを全部解決しちゃうから、こんなことになるのに気付いているのかな？……まあ、僕もその内の一人なんだけどね。」

いつきが微笑しながらそう言っていたことは、誰も気が付かなかった。

「さて、バイト行くか。」

完全に回復したとは言いが、七、八割は回復しただろうな、と体をほぐしながら考えていたら、

ピンポンパンポン！！

「八神つとむ君。至急、学園長室に来てください。繰り返します。八神つとむ君。至急、学園長室に来てください。」

と放送が流れた。クラスの奴は、「おい、あいつ何かやったのか？」

「昨日と今日で騒ぎに関わったから、それについてじゃない？」と言っていた。確かにそうだが、そしたら昨日の時点で、俺は呼ばれているはずだぞ？と思っていたら、

「取りあえず、行ってみないと分からないでしょ？」

と、いつきが俺の隣で言ってきた。ん？これは……………

「ついて来るつもりか？」

「うん。」

即答だった。なので、俺はあえて返事をせずに、そのまま学園長室に向かった。

……………もちろん、急ぎ足で。

「ええ！？ちよつと、それはあんまりじゃないの！？」

と言いながらも、俺の後を追ってくるいつき。

……………にしても、学園長が俺を呼んでいるのか。一体どうしてだ？

「失礼します。」

「失礼します、学園長。」

初めが俺で、後がいつき（本当についてきた。）の声。

早速中に入って視界に映ったものは、見覚えがある爺さんと、秘書っぽい人だった。

……………

「って、あん時の爺さんじゃねえか！もしかして、学園長ってあんたなのか！？」

「ふお、ふお、ふお。朝は世話になったのう、八神君。そうじゃ、儂がこの学園の長、鯨井朱雀^{くじらいすゞく}じゃ。よろしくな。」

「あつ！朱雀さん！！お久し振りです！色々とありがとうございませ！」

「本宮の子か。久し振りじゃのう。よくこの学園に入学できた……………」

「・・・と言いたいところじゃが、お主にとっては当たり前じゃったかのう？」

「そんなことはありませんよ。むしろ、僕はつとむが合格したのは当然だと思っていましたからね。」

俺が話していたはずなのに、いつの間にかいつきと爺さんが話してんでいた。なので俺は、

「帰る。」

と言って出ようとしたら、

「すまん、すまん。呼び出しておいてこの態度はなかったのう。早速呼び出した理由からいこうかの。」

と爺さんが呼び止めた。

「・・・最初から話を脱線させるなよ、爺さん。と思いながら俺は、

「さつさと話せや、爺さん。」

と言いながらソファに、いつきと一緒に座っていたら、

「学園長になんて口のきき方だ!!」

秘書っぽいやつが怒鳴っていたが、

「別にいいではないか。」

「何故ですつ!？」

「そのように呼ばれても、僕は別に気にしておらんからじゃ。それに、こっちの方が親しみがあっていいじゃろ？」

「・・・分かりました。これからそのことについては、もう触れないことにしましょう。」

と言って、一応口論が終わったようだ。壁に掛けられた時計を見ると、三時十分になるところだった。

「・・・やばいな。このままじゃあ、バイトに遅れちゃう。などと焦っていると、

「さて、君を呼んだ件というのは、食堂で起こった騒動についてではないから安心せい。」

と言ってきた。俺はその件とは関係ないと思っていたんだが。

「で？要件ってなんなんだ？まさか、今日のお礼を言うだけに、俺を呼んだんじゃないだろうな？だったら、俺は帰るぞ。」

「ふむ。それもある。が、それだけではない。」

「は？」

「お主、今日学校に遅れたのは自転車のパンクではなく、ひつたり犯を捕まえたからではないか？」

「それはそうだが………それで？」

「やはりか。まあ、それは別にいいんじゃないが。」

「いいのかよ！！」

「さて。まずは礼を言っぞ。助かったのじゃ。」

「どうでもいい。で？」

「その礼じゃが………どうじゃ？お主にぴったりのドラマがこの度撮影されるのじゃが、その出演交渉権というのは。」

「………断る。邪魔したな、爺さん。」

爺さんから、助けてくれたお礼の内容を聞いた俺は、即刻断りの返事を言っつて、その場を立ち去った。後ろから、「待ちなさいっ！！まだ話は………！！」と言っていたが、そんなのは無視だ、無視。そう考え、俺は廊下を走りだした。

2・7 現実 幻想

「行ってしまいました。」

と秘書っぽい人が言った。その言葉を受けて、

「どうしたんじやろうな？なぜ彼はいきなり出て行ったんじやろうな？」

と疑問に思っていた。すると、

「もう、朱雀さんも耄碌したね。つとむはドラマが嫌いなんだよ。見るのも、出演のもね。」

といつきが含み笑いをしながら言った。

「？」

「彼には、ドラマなんて時間内で終わらすためにつくられているただの幻想・・・幻かな？ともかく、そういった認識なんだよ。だから、彼はテレビをあんまり観ないんだよね。観るとしたら生放送か、実録！といった番組ぐらいだよ。」

「そうなのか・・・じゃが、どうしてじゃ？」

「彼の資料を見ているんなら分かるんじゃない？・・・」

じゃ、僕も行くね。」

と意味ありげな笑みを浮かべながら、いつきは部屋を出て行った。

「・・・学園長。どうするおつもりで？」

「ふむ。・・・今すぐ彼の、中学までの資料を集めてくれ。本宮の子のも、じゃ。」

「わかりました。」

「今年の一年はすごい才能を持った奴らが多いのう。・・・」

楽しみじゃ。」

学園長の顔をその時に笑っていたという。

廊下を歩いていると、曲がり角の付近で声がするのをいつきは聞いた。なんだろう？と思い、顔を覗かせると、

「なんなんですよ、あの男は！？折角わたくし自らが声をかけて差し上げたというのに、無視してそのまま走り去っていくなんて！！」と、篠宮が一人で怒っていた。これに関わるのは嫌だったために、いつきは迂回した。

全く、なんだったんだ？あいつは。急いでいたつてのに、わざわざ道をふさぎやがって。そのせいで、結局今日もギリギリだったじゃねえかよ。と思いながら店に入ると、

「つとむ！さつさと支度しろ！！おめえの料理じゃねえと嫌だ、とか言いだしてる客がいるんだからよ！！」

入った早々マスターの怒りの声が。これはさつさと支度しないといけないな。そう思って俺は、そそくさと支度をした。

2 - 8 取材 料理上手

「ほいよ。オムライスに、ショートケーキに、イチゴパフェだ。」
「おう。……………ほら、つとむがつくったものだ、満足だろ。」

と不機嫌そうに料理を手渡すマスター。それを見た客の一人が、
「マスター、不機嫌にならないでよ。八神君が普段通りの時間に来ないから騒いだのは謝るけどさ。その代わりに、マスターが淹れたコーヒーとか飲んでたじゃん。」
という、

「うるせえ。折角俺が作ってやるって言ったのに、どうして『八神君が来てからでいい。』なんだ!？」

と返してきたので、

「そりゃあ、」

「マスターより」

「八神君のほうが美味しいから。」

と客の奴らが言う、

「お前ら、俺にもプライドがあるんだぞ。」

と素早くマスターがツツコミを入れた。

「俺はマスターの方が上手いと思うけどな。」

と俺も会話に参加すると、

「そ、そうか。まだまだ俺に勝てねえのか。困ったアルバイトだな。」

「

とマスターが嬉しそうに言った。客の一人が、

「え？嘘じゃないの？」

と言ってきたので、

「ああ、まだまだだな。マスターは一人で喫茶店を経営してるからな。それに、^{まかないめし}賄飯を食べていると分かるんだが、アレنج力ハンパねえぞ。」

と俺が言つと、

「へえ、そうなんだ。マスター、それなら僕達にも出してくれればいいのに、賄飯。」

と言つてきた。

「馬鹿野郎。そんなもの出せるかよ。」

「いいじゃない。マスターの腕が本物がどうかわかるんだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かったよ。明日くればつくつてやる。」

「あ。明日は無理だ。」「私も。」「うん。」

「人の善意をどこまで踏みにじる気だ、お前ら？」

とマスターがちよつと怒り出した。何とかしないとあ、と思いいながら辺りを見渡すと、

「ん？マスター、あんな客いたのか？」

そこには、本を読みながら飲み物を飲んでいる客が窓際の席に座っていた。しかも、どうやら俺が通っている学校の奴だ。なぜかという、うちの学校の制服を着ているからだ。

と指をさした方を見てマスターが、

「ん？・・・・・・・・ああ、あの客ならさつきからいたぞ。お前が来る前からな。」

「そうなのか？」

「ああ。最初にコーヒを出してからずっとだな。」

「もう中身がなくなつてそうなんだが。」

「じゃ、頼んだ。注文を取ってきてくれ。」

と平然とした顔で言うマスター。

「仕方ねえ、いくか。」

何を言つても駄目だと思つたので、何も言わずに俺は、その客の方に向かった。

「ふう。この本を読んでいると、時間を忘れてしまいますわね。・・・・・・・・あら？飲み物はいつの間に無くなつていたのでしょうか？」

「そりゃあ、ちよつと前くらいだな。おかわりにするのか？それと

も、別のやつにするのか？」

「しかし、結構美人だな。そう思いながら俺が訊いたら、その客がこう訊き返した。」

「あら？この店員さんですか？」

「そうとも言えるが、アルバイト、だな。で、どうする？」

「そうですねえ……。おかわりしましょう。それと、飲み物ばかりじゃ悪いので、このチーズケーキもよろしいでしょうか？」

「分かった。コーヒーとチーズケーキだな。……………マスタ―！コーヒーひとつ！」

「ケーキはお前がつくれよ！！」

「知ってるよ！」

そう言いながら、俺は調理室でケーキを作り始めた。……………しかし、あの客、抜けているのかそうでないのか分かりにくいなあ。

「もうすぐ待ち合わせの時間なんですけど、来ませんわねえ。一応、場所は分かりやすいところのはずなんですけど……………」

カランコロン！！

「いらつしゃい。」

「あつ！ごめん！ごめん！！ちょっと仕事がおしてたものでね。」

「ようやく来ましたか……………とりあえず、取材の前に何か飲んだらどうです？」

「そ、そうだね……………えと、紅茶でも頼もうかな。」

「紅茶だな。少し待ってろ。」

「え？今ので注文終わり？」

「ここではそうみたいです。」

「はいよ。チーズケーキとコーヒー……………何か注文があったら呼んでくれ。」

「ありがとうございます……………聴いてた通り、おいしそうです。」

「そうか。」

と言って去っていった八神。それを見た後に、

「なんか目つきがすごいね。悪っぽい感じがするね。」

「見た目はそうですけど、話してみればそうでもありませんよ。」

「はいよ、紅茶。」

「どうも。」

お礼を言った時には、マスターはカウンターのところにいた。

「この店の人は戻るのがはやいね。」

「だから注文されたのを早く出せるのでしょうね。」

「（ゴクリ）……うまいね、この紅茶！」

「こちらのケーキもおいしいですよ？……うん。評判通りです。」

「誰の？」

「このあたりの人達です。」

「そう。……なら、僕も何か頼もうかな？」

「それもいいですけど、はやく取材をお願いしますよ。平塚さん。」

「分かったよ。白鷺さん。」

しばらく色々と話していたみたいだが、俺にとってはどうでもいいので自分の仕事（暇な時は調理室の掃除など）をしていた。マスターはというと、他の客と談笑しながら飲み物の注文を取っていた。……抜け目ねえな、おい。

そして、俺の仕事がひと段落ついた時に、丁度話が終わったらしい。二人が席を立つのを見た俺は、マスターに言われるまでもなくレジに移動した。

「会計をしたいn」

「コーヒーが一杯二百二十円。チーズケーキは四百三十円。紅茶は二百円。合計で千八十円。」

「早いね、君。千八十円ね。はい。」

「千五百円からだな。おつりは……四百二十円だな。はいよ。」

「ごちそうさまでした。おいしかったですわ。」

「そうか。それはよかったな。また来てくれれば、店としてもありがたい。」

「ふふつ。それならまた来ようかしら。……………そういえば、あなたの名前は？」

「は？どうしてそんなこと訊くんだよ？」

「また会いそうですから。」

「……………嫌な予想をありがとう。俺は八神つとむだ。んで、そっちは？俺だけってのは、ちとずるいんじゃないか？」

「そうですね。私の名前は白鷺美夏しひろみかと申します。それでは。」

「ありがとうございました！」

そんな会話をして、そいつ——白鷺は帰っていった、のか？さっきの奴と一緒に行くみたいだから、またどこかに行くんだろうな。とぼんやり考えていると、

「おい。もうすぐ時間だぞ。」

「何だとっ！？」

マスターの一言で、俺は我に返った。時計を見ればすでに五時五十分。もうすぐ上がる時間だった。なので俺は、いつも着替えているところに素早く戻って着替え始めた。

……………なんか、今日はこんななんばっかな。

「いや、あの店は静かで取材にはもってこいだね。今日はありがとうね、白鷺さん。」

「いえいえ。私も初めて行きましたが、静かだと思いますよ。」

「そういえば、どうしてあの店員さんの名前を訊いたの？それに、どうして自分の名前を教えたの？」

「なんとなくですよ。」

「そう。……………ところで、今日も帰りは迎えが？」

「そうですね。もうすぐ来ますよ。」

キキツ——！！

「来たみたいだね。それじゃ、僕はこの辺で。」

「ありがとうございます、平塚さん。一緒にいてもらって。」

「いいって、いいって。君に何かあったら、僕の首がとぶからね。これぐらい構わないよ。じゃ、また。」

「はい。またですね。」

「お嬢様。お迎えにあがりました。」

「ご苦労様です。」

「ん？お嬢様、何か喜ばしいことでもあったのですか？」

「いえ、そんなものじゃないですよ。それでは、帰りましょうか。」

「かしこまりました。」

そう言つて、お嬢様と呼ばれた少女——白鷺美夏は迎えの車に乗つて、帰っていった。

2 - 9 秘めし思い 苦勞

ふう。二つ目のバイトに行く途中に何もなくてよかったぜ。今日だけで三つぐらい巻き込まれたからな、こつから先は何もないと思いたいな。そう思いながら、二つ目のバイトをこなしていった。

「ただいまあゝ。」

と家に帰った俺の体力は、もうほとんどゼロ。正直、このまま布団に入ったら、翌朝まで寝てられる自信がある。そう思いながら玄関から二階に上がろうとすると、

「あ！お兄ちゃん！おかえり！……って、ちよつと！？大丈夫なの、お兄ちゃん！？」

と茜が心配そうな声を上げていた。

「ん？大丈夫だぞ。寝れば何とかなるからな。」

「そういう問題じゃないよ！！なんでそんな無理するの！？」

「いや、無理はしてないぞ。ただ、」

そう、無理はしていない。ただ、

「ただ？」

「面倒事が起き過ぎただけだ。」

「え？」

今日とはにかく、面倒事が起き過ぎただけだ。朝、爺さんが自殺しそうになったり、ひったくり犯を捕まえて尋問したり、二年の女子に絡まれたりと、ともかく大変だったんだ。だが、それをいちいち茜に言っていると、またこいつが心配しかねないので俺は黙ったまま、

「お前も、もう寝ろよ。俺も寝るんだから。」

「お風呂は？」

「明日の朝入る。」

と言って、俺は二階に上がり自分の部屋に入ったらそのまま寝てしまった。オヤスミ。

「お兄ちゃん、どうしたんだろう？」

そう茜がつぶやいた時、

「ん？つとむの奴、帰ってきたのか？」

と、すすむがリビングから顔を出した。

「帰ってきたけど、すぐ二階に行ったよ。」

「ああ、そう。ならもう、茜も寝なさい。」

と玲子が言くと、

「なんでそんなにお兄ちゃんに対しては淡白なの！？」

茜が怒り出した。すると、

「それがあいつに対しての愛情だからだよ。」

ぶつきらばうに、すすむが言った。それを玲子は『そうなのよねえ』と頷きながら聴いていた。その言葉を受けて茜が、

「え？なんでそれがそうなるの？」

と困惑していた。

「子供を守ろうとするだけが、愛情じゃないんだよ。特にあいつの場合は、自分で何とかできないと駄目だ、と思ったから、仕方なくこういう態度をとっているんだ。……そうじゃないと、あいつはいつ死んでもおかしくは無かったからな。」

最後の方は、茜に聴こえないように小声でそう言った。それで疑問が氷解したのか、

「そうなんだ。愛情ってわからないね。」

と言って、茜は自分の部屋に行った。それを見届けた後、

「いつまで隠しとけばいいんだろうな、あいつの体質。」

「いつまでも隠せるものじゃない気もするけどね。」

という夫婦の会話があったという。

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始めました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ラジオ！！イエーイ！」

「なんなの一体？」「なんなんだ、これ？」「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！『アイドルツ！』から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」「無視かよ。」

「『考える人』から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人を送る日常』からも主人公、池田連！」

「これはなんなの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ちなみに、D」
「は私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

「ドカツ！バキッ！ドオオン！」

「しばらくお待ちください」

「いたた………。これくらってよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつとむでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は大輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速いつてみよう！」

「説明しろ。」ドゲシツ！「グフォッ！」

「作者が泣き出したため、一時中断します」

「さあ！いってみよう！」

「切り替え早えな。」「タフだね。」「どうしてだろう？……………」
「はっ！」

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！まずは……………
好きな食べ物？」

「ベタ感マックスじゃねえか。」

「うるさいな。で？どうなの？好きな食べ物あるの？」
「誰から訊くんだよ？」

「そうだな。ここはあんまり話さない大輝からいってみよう！」

「え？僕は……………ハンバーグに、牡蠣に、ケーキに……………」

「十分後」

「……………ドリアに、カルボナーラに、キャビアくらいかな？」

「おい末吉。知ってたか？」

「え？知らなかったけど？」

「キャビアって、高級食材で世界三大珍味だよな？」

「うん。両親が送ってきてくれた時があったんだよ。あれはよかったなあ。」

「……………この庶民の敵が！！……………」

「えええ！どうしてみんな一斉に言うの！？」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！はい、好きな食べ物は！？」

「俺か。俺はそうだな……………あえて挙げるなら、マスターの賄飯か？」

「マスターって、誰？」

「つとむのバイト先の店長だよ。結構ちゃっかりしてるところあるよね。」

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？ちゃっかりしてるだろ？」

「へえ」。でもそれって、その時の契約内容になればやる必要はないんじゃない？」

「まじでかつ！……いつきに紹介してもらったバイトだからな。契約内容は詳しくは知らないんだ。」

「そりゃまた。」

「いい人だね。」

「だけどな、それ以上に俺が大変な目に遭っているんだぜ？例えばよ、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山奥に放置させられて一週間で脱出しろとか……」

「

くこれからしばらくはつとむのトラウマ話がされています」

「……ほかにもあるぞ？」

「もういいよ！お願いだからやめて！」

「そうそう！話がだいぶずれてきちゃったじゃない！ほら末吉さん！進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は何？」

「僕の好きな食べ物はカレー！」

「定番だね、連は。」

「普通すぎるね。」

「放っておいてよ！」

「末吉。その辺にしろ。連がうずくまっちゃった。」

「ごめんね、連。悪気はなかったんだ。」

「いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから……」

。

「

「ああ！連がなんだかネガティブに！」

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かったよ。」

「連が戻るまでしばらくお待ちください」

「よっしゃ！これで「はやくしろ。次だ、次。」わかったよ……
……では次！三人の共通点は？」

「「家事ができる。」」

「ですよ。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だね。」

「人ってどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさい！別にいいじゃないか、高望みしても！」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどっ！」

「作者が立ち直るまでしばらくお待ちください」

「さあ、次行こうか……………」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしすぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけっぱちじゃなかった？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思ってることは！？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わ」お。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかったか？」

「別に」。さて、理由は何となく想像できるから置いて。次！

「連以外は高校生んだけど、そこどこどう思ってる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思っていないぜ。」

「僕は中学生のほうがいいなあ。そっちのほうで楽しく遊べたから。」

「僕は……………どうなんだろう？先のことを考えてないから」

なあ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いつか。次のコーナー行ってみよう！」

「「これで終わりじゃないのかよ！？」」

「次のコーナーは……『苦労話を分かち合おう！』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねったら？」

「そんなことはどうでもいいから！ささ、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみよ。」

「私？そうだね……まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなっただけ。他の作品のやつを考えるのと並行してやってることが、苦労してるところかなあ。」

「そうか。だったら俺のところさっさと進める。」

「僕のところもね。」

「分かってるよ。じゃ、次は……大輝！」

「僕！？うーん、僕は……昔のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったところかな。その時は波風の家に世話になっていただけだね。そのころの僕、まだ小さかったからさ、色々と覚えるのに苦労したよ。」

「子供って、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だったらしく、それだったらということ、僕を置いて行ったみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな……。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いで言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行ったわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だったかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？どう考えても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐにわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言ったら『いいじゃん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言うんだぜ？俺は気にしなかったけど。ま、その反応に怒ったのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのって、たいてい男だよな。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかろうとしたら、どうやら主催したやつが来たらしくよ。殴るに殴れずそのままそのまゝそのほうに行ったんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなったの？」

「うゝん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば……」

三十分後。

「末吉。てめえ、連に苦労しかさせてねえのか？」

「もうやめさせようよ。連が変な空気まとい始めたから。」

「そ、そうだね。……つとむ！任せたよ！」

「はあ！？」

「殴れば何とかなるから！」

「……分かったよ。連、元に戻れ。」

ドカッ！

「……いてっ！……あ。ごめんごめん。」

「さて、次は何するんだ？」

「えつとね……大変言いにくいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで！」

「……はあ！？」

「まだ二つしかやってねえぞ！」「そうだよ！」「どうしてさ！」

「色々あったじゃない！色々と！そのせいで時間が足りなくなっ
たんだよ！」

「馬鹿じゃねえか！」

「二回目をやるかどうかは気分次第！あとは、質問が来ればやるか
もしれない！以上！第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない
ね？ラジオでしたー！」

「勝手にしめるんじゃない！！」

「これから一緒に買い物行かない？近くに安いところあるんだよ。」

「本当！？ちょうど部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思っていた
ところなんだよ！」

「……俺も行つていいか？」

「いいよ！」「うん！」

「D」は私、末吉！ゲストは池田連！八神つとむ！風間大輝でした
！アディオス！」

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常（後書き）

いかがでしょう、こんなラジオ番組は？

幕間 ちょっとした暇つぶし（前書き）

初の幕間です。お楽しみください。

幕間 ちよつとした暇つぶし

「あゝ、暇だゝ。」

「ちよつとつとむ？いきなりどうしたんだい？どうしてそんな無気力モード？」

「バイトはねえし、学校もねえ。やること無くて暇すぎる。」

「平穩に暮らしたいんでしょ？」

「ああ。今この場にお前がいなければ、平穩に暮らすという夢が少しかなう。だからどっかいけ。」

「まったく、君には本当に困ったものだね。しょうがない。そんな暇を持て余してる君には、これを貸してあげよう。」

「スマン、いつき。この通りだ。さっきの発言は俺が悪かった。だから電気椅子をどこかへ置いてこい。」

と、土下座する俺。プライド？何それ？

それを見たいつきは少しだけ残念そうにしながら、電気椅子をどこかへ置きに行った。

……ていうか、どこからあんなもの持ってきたんだ？

さて、先ほどの会話の意味がわからないだろうな。ちよつと簡単に説明すると、

今日はバイトがない休日だー！と、誰もいない家で万歳していた俺。

その後、しばらくのんびりと家の中で過ごしていたら、だんだん飽きてきた。

俺の理想とする平穩と、この状況がちよつと違うことに気づきそのままだらけていたら、インターフォンが。

何の気なしに玄関を開けたら、目の前にいつきがいた。

どうしてお前が？と訊く間もなく、いつきが勝手に侵入。

そして、先ほどの会話が繰り広げられたというわけだ。わかった

か？

そうこうしていたらいつきが戻ってきたので、再度訊くことにした。

「どうしてここに？」

するといつきは堂々と言った。

「暇つぶし。」

「家でやれ。」

どうやら、俺の言葉は想定済みだったらしく、

「家にいるのが暇だったから、ここに来たんだよ。」
と言ってきた。

はあ、まったくこいつは……………。

そう思いながら、俺はこのまま話を進めることにした。

「で、何をするんだ？」

「え？」

「え？じゃないだろ。俺のところに何をするつもりで来たんだよ？」
その言葉に、いつきはうるたえた。

「え！？ああ、おや、その、なんていうか……………」

「お前……………」

「……………そうだ！これだよ！これ！これをやるつもりで来たんだ！」

そう言っていつきが持ってきたものは、人生ゲームっぽい何かだった。

「これ、なんだ？」

「なにつて、知らないの？最近発売されたボードゲームだよ。」

「タイトルは？」

「『双六／＼人生設計編』だよ。結構面白いらしいんだよね。」
思いつきりパクリじゃないのか？

俺をすぐさまそう思ったが、言わぬが花だと思い何も言わなかった。

で、いつきはやる気満々らしく、もう準備をしていた。

「なあ。これ、四人でやったほうがいいじゃないか？」

俺は説明書を見ながらそう言った。そしたらいつきが、

「人数いないほうがいいよ。だって、結構恥ずかしいものがたくさんあるから。」

と言った。嫌な感じがめっちゃくちやするな、大丈夫なのか、これ？

で、やっているわけだが………。

「あ？『逆立ちしながら腕立て三十回』？だいぶ楽だな。」

「ねえつとむ。どうしてそういう筋トレ関係のマスにしか止まらないの？」

「よつと。……さあな……知るかよ……。」

俺はマスの指示通りに、逆立ちしながら腕立て三十回をやっていた。ちなみに、いつきは変装やらモノマネやらやっていた。で、さすがにあの学校に通っているだけあって、どれもうまかった。

で、俺が二十回をやったところで、いつきがサイコロを振った。このゲーム、ボード型だけあってマスが多い。かれこれ二時間ほどやっているが、俺たちはゴール手前でよくスタートに戻されている。

ていうか、明らかにこれが狙いなんじゃないかと俺は思う。

現在の地点は俺が半分くらい、いつきが終盤くらいにいる。

「お？やった。四だ。あと三以上でゴールできるよ。」

そっぴいながら、いつきがコマを進めていった。そして、止まったマスの内容を見て、いつきが固まった。

「どうしたんだ？」

三十回やり終えた俺は、固まっていたのを見て、訊いてみた。しかし、返事が返ってこない。

どういうことだと、俺は訝しげながらそのマスの内容を見た。

「なにになに……『好きな人の名前を言うか、スタートに戻る。』か。ふん。で、どうするんだ、いつき？」

俺がそう訊いたら、いつきは黙ってスタートに戻った。ま、言いた

くないというわけだな。

俺は気にせず双六を進めていった。

結局、このゲームが終わったのが二時間三十分後で、俺がゴールして終わった。これをやり終えた後、いつきが「ちよつとこの会社に文句言ってくる。」といって帰ってしまった。会社がつぶれないことを祈ろう。

そして、時計を見たら三時近くになっていた。

俺は明日いつきに感謝しないとなと思いながら、洗濯物を取り込んだ。

次の日。

「よう。」

「おはよう、つとむ。」

「昨日はありがとな。おかげで楽しかったぜ。」

「えー？あ、そ、そう！？ほら、僕が昨日来てよかったでしょう！？」

「あ、ああ。どうしたんだ、一体？」

「なんでもないよ！」

いつもの光景が繰り広げられていた。

「会社潰してねえだろうな？」

「まさか。ただ、『ボードゲームのマスを少なくして。』って言いに行ったただだよ。」

「そうか。」

人物紹介その1（前書き）

色々と変わったり、増えたりします。

人物紹介その1

八神つとむ（15）・・・このお話の主人公。巻き込まれ体质もち。そのせいで喧嘩や事件に巻き込まれまくるが、そのたびに決めている。ちなみに、そのおかげで町にいる不良たちやヤクザたち、警察たちと仲良くなった。何事も一人でやらなくちゃいけない環境だったので、基本的なスペックは高い。ドラマ嫌いなのは、現実を知っているから。人脈は結構あったりする。将来の夢は、平穏な暮らしをすること。恋愛には興味がないらしい。

本宮いつき（15）・・・つとむの幼馴染であり、つとむを学園に入学させた張本人。色々と秘密がある。家がお金持ちで、その影響力はとんでもなく強い。つとむの悩み事を聞いたり、解決したりしている。

八神茜（14）・・・つとむの妹。ただし、義理。本人は忘れているが、孤児院からつとむの両親が引き取って今の生活に至っている。つとむのことは、昔はどこか怖くて近寄りがたいと思っていたが、あることをきっかけにすごい頼りになる兄と印象が変わり、それ以降何かと一緒にいたいと思っている。本人は自分の気持ちに気づいていない模様。

長谷川光（15）・・・つとむが登校する学園の、一年生のアイドル認定者。ちょっと前まではグラビアの仕事をしていたらしいが、この学園に入学した時にアイドルと認定されて以来、ドラマとかの仕事に変わった。つとむに出会う前まではどこことなくオドオドとしていたが、今では割と自信にうち溢れているらしい。

篠宮レミ（15）・・・篠宮家次女。姉とは正反対な性格で、

傲慢さは一切ない。あることでつとむに出会って以来、つとむのことが好きに。お嬢様だが、姉とは違う学校に通っている。そのせいでつとむに会えないことに、若干の不満はあるようだ。

篠宮ルカ（16）・・・篠宮家長女であり、次期当主を有望視されている。高飛車で傲慢な性格なので、意外と人付き合いが悪いと思われるがちだが、猫かぶりが得意なので人当たりは良好である（ただし、つとむといつきだけは例外）。また、二年生のアイドル認定者で、ドラマにも多く出演している。最近の悩みは、八神つとむの存在についてらしい。

第三話　生徒会と喧嘩騒動（前書き）

最近、後悔先に立たずという言葉が身に沁みます。

第三話　生徒会と喧嘩騒動

次の日、となると金曜日なわけだが……目が覚めたら俺は、床で寝ていた。自分の部屋についたという記憶はあるのだが、そのまま眠ってしまったらしい。ねむい頭を働かせて起きたら、

「おはよう、お兄ちゃん!!」

茜が俺の部屋の前に突っ立っていた。

「ああ、おはよう。……俺、風呂入ってないよな？」

「うん。だって昨日のお兄ちゃん、凄く疲れたみたいだったもん。」

「そうか……。じゃ、風呂入ってくるわ。」

と言つと、

「またあ!？お兄ちゃん!ちよつとは私の事を気にしないの!？」

茜が怒り出した。これは最早あれか？パターン化しているのか？そう思いながら、

「んで？今日は何の用だ？まさか、挨拶するだけじゃないだろうな？」

と言つたら茜が、

「ち、違うよ!?!？今日はきちんと話すからね!?!？」

と慌てて言つた。俺に何の用があるんだ？そう思いながら、話の続きをまつた。

「え、えつとね、明日は土曜日だよね？」

「そうだな。」

「そ、それでなんだけどさ……。お兄ちゃん、明日暇？」と期待した目で訴えてくる茜。まあ、暇なんだが。

「暇だが。なんだ？何処かへ行くのか？」

「本当!?!？実はね、明日から撮影があるらしいから一緒に行つてほしいんだよ!?!？」

「ふん。撮影、ね……友達といつて来い。」

「ええええ！！？？妹をここまで喜ばせておいて酷くない!？」

「行きたくない、観たくない、近づきたくない。」

「いいじゃん、行こうよ。」

とやっていたら、

「話は聞かせてもらった!!」

「ん?」「だ、誰!？」

「ならば私と行こうではないか!」

そこには、ふざけたおっさんがいた。

………。

「さてと。茜、警察に連絡だ。」

「うん。分かってるよ。」

「ちよつと待て!! 実の父親にそれはないだろ!？」

「それで? 親父は何しに来たんだ？」

「ここでスルーか。お前はどこまでいつてもお前だな。」

それは当たり前じゃないのか? そう思ったが、口には出さない。

「んで? 何しに来たんだよ？」

「ああ。さつさと風呂入って、飯食べ。じゃないと、遅れるぞ。」

「………なに!!? こうしちゃおれん!!」

「お兄ちゃん、口調がおかしくなってるよ?」

「そんなの気にしてられつかよ!! とにかく! 話は帰ってきてからだ!!」

「ええ!!? それはないよ!!………つて、待つてよ!」

俺としては、早く行かないと巻き込まれた時に遅刻が確定してしまいかねない。なので、急いで下に行き、シャワーを浴びるだけにし、朝食をとりあえずという事でパン一枚を加えて、急いで二階に戻って準備をした。

「と、とりあえず、行ってくる。」

つ、疲れた。まさか朝から面倒なことになるなんて。おかげで、朝食はろくに食べなかった。

．．．．．仕方ない、コンビニ寄ろう。
また余計な出費だ。

もうこうなったら遅刻なんて関係ない！！そう思って俺は自転車をこぎ出した。

行く途中でコンビニに寄って、時計を見たら七時半。このまま道中にも無かったら、普通に学校に着けるなあと淡い希望を抱きながら、再び自転車をこごとしたら、

「あのぉ、お聞きしたいことがあるんですけど．．．．．」
と声がした。幻聴か？それとも、誰かほかに人がいるのか？後者の方だと思いたいんだが、生憎、うまい具合に誰もいない。と、なる

とだ。俺に訊きに来た、ってことになるわけだが．．、

「交番は近くにあるわけだが、なぜそこに行かない？」
「え？あ、そ、そうなんですか？ですが、こうして訊いてしまったのですから、答えてくれませんか？」

「あ？．．．．．分かったよ。んで？何が訊きたい」
「なんだ？と言いかけて俺は止めた。いや、やめざるを得ない、の方が正しいか。なぜなら、

「久しぶりに会話ができますね。憶えていますか？私のこと。」
と笑顔を向けながら俺に話しかけてきた。お前は．．．．．

．．．
「誰だっけ？」

「ええ！！？お、憶えていないんですか！？」

うつすらと憶えがあるが、誰だか忘れた。そんなことより．．．．．

．．．．．
「すまんが、そろそろ学校に行かないと遅刻しちまう。じゃ。」

「ま、待つてください！！！」

「．．．．．チツ。なんだ？この前の続きか？」

俺は急いでいるんだが。

「それもありますか．．．．．きよ、今日の昼休みに林に来てくれませんか！？」

「は？」

何の話だ？と訊こうとしたら、そいつは走っていった。・・・

・・・何だったんだ？そう思ったが、

「あ、いけね。遅刻する。」

学校の事を思い出し、そのまま自転車をこいでいった。

やっべえ、またいつきにネチネチ言われる。

第三話、生徒会と喧嘩騒動、（後書き）

人物紹介、そろそろ入れるべきですかね？

3 - 2 林 秘密の場所

学校に着いて、いつものように自分の席に着いて、買ったものを食べようとしたら、

「今日はどうしたの？いつもは家で食べてくるのに。」
「いつきがこう訊いてきた。」

「うっせえな。昨日から色々とあって、今日の朝も面倒なことになりかけたんだ。おかげで飯がパン一枚だぜ。」

「なるほど。だからコンビニで買ってきたのか。……と
ここで、君の噂が凄い事になっているのは知ってるかい？」

「は？噂？なんだそれ？そんな表情が出ていたのか、
「分かってないみたいだね。……このところ、

君が騒動を収めてるからだいぶ学校全体でもちきりだよ？」

いや、最後の語尾を疑問形にするなよ。とツツコミたがったが、

「その噂って？」

どういう内容だか気になったため、聴くことにした。

「僕が聴いたところではね、『二年を黙らせた一年がいる。』とか、
『役者としては一年の中で一番レベルが高い。』とか、『親衛隊を
十秒で黙らせた。』とか、『不良みたいだけど凄い奴。』とか。一
番はそうだね……。『本宮君とデキてる。』って
噂かな？」

最後はマジで聴きなくなかった。

「ぶほっ！！ゲホッ！ゲホッ！………食事中に
何言い出すんだよ！？」

「もちろん、最後の方は嘘だよ。」

くそっ。お前のおかげで食べる気が失せちまったじゃねえか。残ったのは……。仕方ない、昼にでも食べるか。と思っ
ると、

「そっいえば、さっき『昨日色々とあって』って言ったよね？あの

後何があつたの？」

と、いつきがふと思い出したかのように訊いてきた。……そこに食いつくんじゃねえよ。さてどうするか、と考えようとしたら、

「あ、もうすぐ授業だ。じゃあ、昼にでも訊くからね。」
と言ってきた。

「あ。昼はダメだ。」

「どうして？……もしかして、誰かに呼ばれてるの？」

「そのまさかだ。」

「ふん……そうだ！」

「尾行は禁止な。」

「だって誰だか気になるじゃないか。君みたいな人を呼ぶ人が。」

「ほっとけ。もうすぐ授業なんだろう？行くぞ。」

「待つてよ！！」

そして俺達は、授業に向かった。

午前中の授業が終わって、昼休みに入った。俺は教室に戻って今朝買ってきたものを持って、林の方に向かった。

「この中かよ……。」

いざ林の前まで来てみると、すっげえ生い茂ってるんだな。中がどうなってるのか分からねえ。どうやって中に入るうかと辺りを見渡したら、

「ん？看板……？なんであんなところに？」

俺のいるところのちよつと先に、看板が見えた。近づいてみると、

『この先、新緑の広場』

と書いてあった。……なんかの憩いの場所なのか？と思えてしまっしょうがない。ともかく、ここから行けると分かったので、俺はこの中に入った。

3 - 2 林 秘密の場所（後書き）

すみません。忘れてました。

3 - 3 相談 自信

んで、中を進んでみると急に視界が開けた。そこにあつたのは、
「随分とまあ、寂しいな。ベンチが一つだけかよ。しかもその周りには何にもねえし。」

そこにあつたのはベンチが一つ。その周りは掃除がされてるのか、大分綺麗だった。こんなところに呼んどいて、何の用だあいつ？と思つてベンチに腰かけて、今朝買つてきたものを食べようとしたら、
「す、すみません、私が呼んでおいて遅れるなんて……………」
。

長谷川が来た。そして俺を見るたび、いきなり謝つた。

「いや。俺もついさつき来たばかりだ。」

嘘は言つてない。その言葉を受けて、

「そ、そうですか。あの、隣、いいでしょうか？」

「あ？空いてるんだから勝手に座れ。」

「じゃ、じゃあ、し、失礼しますね？」

と言つて、俺の隣にぎこちない動作で長谷川は座つた。語尾が疑問形なのはなぜ？と思ひながら、肝心なことを訊いた。

「何の用だ？あの件だったら別にお礼を言わなくていいぞ。もう忘れたから。」

「え。そ、そうなんですか……………でも今回は違いますからね？」

「そうか。でもなんで俺に？先生に相談すればいいだろうに。」

普通はそうじゃないか？それが何でよりによつて俺？そう思つていたら、

「えっ！？えっ、えつとですね……………噂で聞いたんです。噂？またか。今度は一体どんな内容なんだろうな？と聴いていたら、『何でも解決してくれるやつがいる』っていう噂です。なんでもその人は目つきがとても悪いみたいなんです、悩みとかを解決し

てくれるそうなんです。」

.....

「おい。」

「はい？」

「その噂、どこから聞いた？」

「確か.....たかあき町周辺から出てたみたいですけど.....どうしたんですか！？頭を抱えだして！」

こいつの言う噂。その発信源はどうやらうちの地元だったらしい。その事実には俺は、このまま逃げて発信源の奴を殴ろうと思った。

確かに俺は、色々と解決した覚えはあるが、それは巻き込まれてからであり、こうやって直接相談に来るやつはいなかった。それをどこかで省かれた結果がこれだ。

「でも、目つきが悪いつてだけで俺に来るんじゃないよ。」

「はう！す、すみませんでした。」

全く、目つきが悪いつてだけだったら、俺の地元はほとんどが目つき悪いぞ。

「遠回りしたが、本題にいかがか.....食べながらでもいいぞ。」

「わ、わかりました。それで、相談したいことなんですけど.....

・実は私、今度ドラマの主演に決まったんですよ。」

「よかったな。」

「それは嬉しかったんですけど.....同時にそれが悩みになっちゃってます。」

「それが俺に相談したかったことか。」

「そうなんです。ドラマの主演に決まったことは確かに嬉しいんですけど、本当に私でよかったのかなって思ったりしちゃうんです。」

とうつぶきながら話す長谷川。.....どうでもいいけど、こいつ、食べる量少くないか？これだったら、俺は十分で空腹になるぞ？

「そもそも、私が『アイドル』に決まったことに対してもそう思っ
てましたから。なんで私なんだろう、他にもいい人がいるんじゃない
かって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから、今回もそう思ったんですよ。私以外にもできる人がいる
のに、どうして私が選ばれたんだろうって。」

その後、長谷川は何もしゃべらずに食べることに集中したみたいだ
った。・・・・・・・・・・これで相談内容は全部話したともいうよう
に。

3 - 4 回答 辛辣

そうか。こいつは自分に自信がないんだな。それについて俺に相談してきたのか。

なら、俺の答えは・・・・・・・・・・、

「おい。」

「は、はい！！な、なんでしょうか！？」

「お前の『悩み』について、俺の意見を言っただけ。それを参考にするかしないかはお前の自由だ。」

と前置きして、俺は俺の『意見』を言った。

「自信を持て。以上だ。」

あまりにもあっさりと言われたせいなのか、ポカンとしてから、

「ど、どういう意味ですか！？」

と訊いてきた。どういう意味かって？んなもん、簡単だ。

「お前はそれを選ばれたんだろ？ならそれに胸を張れ。そして選んでよかったと思わせる演技をすればいいだけだ。だから、自信を持てって言ったんだ。」

そこからさらに、

「大体、自分に自信がなくてどうする？選ばれたのにはきちんとした理由がある。その理由は分からなくても、選ばれたことを誇りに思えばいい。それが自信を持つという事につながるだろうからな。」と畳み掛けた。・・・・・・・・色々と思うことはあるが、今は気にしない。

「で、でも・・・・・・・・・・。」

「でも、どうした？こういう、役者とかになりたい奴なんか全国にいるんだぜ。そいつらの夢を壊すんじゃないかって、より一層『なりたい』と思わせることが大切なんじゃないか？・・ま、これが俺の『意見』だ。そこから何を学ぶかは、お前次第だな。」

その言葉で占めた。・・・・・・・・もう一度言おう。色々と思うことは

あるが、今は気にしない。

と、話が終わったのを直感したのか、

「そ、そうなんですか！！！やっぱり、あなたに相談してよかったですっ！！ありがとうございます！！」

とベンチから立って、俺に向かってお辞儀をした。

「そんなたいしたもんじゃねえよ。俺は、お前の『相談』に対しての『意見』を言ったただけだ。それをどう受け止めて、どう自分の意見にしてくかはお前次第だ。」

「でも！！あなたのおかげで解決したような気がします！本当にありがとうございます！！」

そう言ってまたお辞儀をした。・・・これ、誰にも見られてないよな？

「あゝ、いいよ、もう。それよりもお前、それだけで大丈夫なのか？」

「へ？え、えつと。大丈夫ですよ？」

と言っていたら、

グギュルルル！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今の音、あいつからしたよな？そう思っで見ると、

「え！？べ、別に、鳴ってなんかいませんよ！！いませんからね！！」

必死に否定していた。やっぱり、と思った俺はバイトのために取って置こうとしたパンを、

「ほれ。腹が減ってはなんとやらだ。食っていいぞ。」

「そ、そんな、悪いですよ・・・・・・・・」

「お前こそ、その状態だったら次の授業もたないだろ？だからほら、食え。」

折れたのか、それとも食欲に負けたのか、

「い、いただきます・・・・・・・・」

と言って食べ始めた。それから間もなく、

「そういえば、名前を覚えてもらえませんか？私、あなたの名前知らないままでしたから。」
と言ってきた。

「……………俺は八神つとむだ。あんたは名乗らなくていいや。二度目に会った時に、いつきに教えてもらったから長谷川光、だろ？」

「そうですよ。……………ところで、私は何て呼んだらいいんですか？」

「八神でも、つとむでも、どちらでもいいぜ。ただ、『皇帝』ってだけは呼ぶなよ。」

「あれ、やっぱりあなただったんですね。っていうか、どうして私の名前を知っているのに、呼んでくれないんですか？」
と会話していたら、

「そういえば、お礼をしたんですけど……………」

「いらね。」

「即答ですか!？」

そこで驚いてんじゃねえよ。

「何度も言うがな、俺は『意見』を言っただけ。そんなお礼なんていらない。」

「でっ、ですけど!!あなたのおかげで解決したみたいなんですから、私なりにお礼がしたいんです!!」

と力説してくる長谷川。どうでもいいが、はやくしないと午後の授業に間に合わなくなりそうなので、

「いいぜ。」

若干投げやりに言ったら、

「本当ですか!？」

と言った後に、

「お礼と言うのはこれなんですけど、見てくれませんか？」

と言って差し出されたのを見て、やっぱり思ってたため息をつきながら俺は林を出て行こうとした。それに驚いたのか、

「ま、待ってください八神君！！どうして何も言わないで行こうとするんですか！？」
と引き留めに来た。

3 - 5 本心 事情

「どうしてって、俺に『観に来てください』とでもいうつもりだったんだろ？生憎だが、俺はそういうドラマとかは、撮影も、出演も、観るのも嫌いなんだ。そういう訳だ。じゃあな。」

とそのまま行こうとしたら、

「嘘です！！だったらなんであんなこと言えるんですか！？あんなの、演技が好きな人にしか言えないはずですよ！！」

と反論してきた。さらに、

「だったら、どうして八神君はこの学校に来たんですか！？演技が好きだからじゃないんですか！？」

と言ってきた。なので俺は、自分の本心をばらした。

「はっ。俺は無理矢理この学校に入学させられたんだ。じゃなかったら、こんなところにこようとは思わねえよ。」

「！！！！？」

「それにだ、俺はこの学校に来てから疑問に思っていたんだが、この学校の奴らは本当にやる気があるのか？」

「あるに決まってるじゃないですか！！」

「それだったらお前ら『アイドル』の親衛隊なんて、なんで作ってるんだ？」

「そ、それは……………」

「学校は学ぶところだ。しかも、この学校は『テレビ関係者を輩出』している学校だ。それだったら、ここでは演技を学べばいいものを。」

「

と言ったら、長谷川はうつむいて黙ったまま、何も言わなくなった。これでもういいか。そう思っただけで再び歩こうとしたら、

「……………だったら、」

「だったら、どうして八神君はあんな演技ができるんですか！？」
と、涙をつつすらと浮かべながら顔を上げて長谷川が言ってきた。

ここまで訊かれたら、少し本気で言つてやるか。そう思つて、俺はこういつた。

「なぜ？……じゃあ、そうだな。お前、ヤクザの抗争に巻き込まれて死にそうになつたことは？」

「え？」

「不良グループの喧嘩に巻き込まれたことは？その時にナイフを刺されそうになつた時は？」

「な、なにを……」

「暴力団のアジトに乗り込んだことは？銀行強盗に巻き込まれたことは？通り魔事件の犯人を目撃したことは？暴走族の連中と喧嘩したことは？ないよな？もちろんないよな？」

「あ、あなたは……」

「あるさ。全部な。全部俺は体験した。それらを解決するために俺は、あれぐらい素でやらないといけなかつた。生きるためにはな。」

「……」

俺の話を聴いたせいなのか、長谷川は黙ってしまった。これでもう何も言わないだろう。

そう思つて歩き出したが、

「忘れてた。俺が、ドラマが嫌いな理由。」

「え？」

「さっきの言つたことから付け足すが、俺は実際に体験している。だから、あんな時間内に終わらそうとするために、いろいろと細工をしているのが分かるドラマが嫌いなんだ。それと、割り切ればいい、と思うだろうが、俺はそんなに賢くはないからな。割り切る、なんてことはできないんだ。」

と言つて俺は立ち去つた。後ろの方で泣いてる声が聴こえたような気がしたが、俺は気にせずに校舎に戻つていつた。

3 - 6 悪役 親衛隊

午後の一コマ目が終わって、次の授業の準備をしていたら、俺が座っている席の周りに見覚えがあるやつらが来ていた。

「どうした？何か用か？」

と普通に訊いたのだが、その時のそいつらの雰囲気が少し違い、違和感を持った。

「お前ら、話し合いに来たわけじゃなさそうだな。」

「当たり前だ！！貴様はもう許さん！！覚悟しろ！！」

そんなやりとりを聴いた他の奴らが、「また、あいつか。」「今度は何をやらかしたんだ？」と話していた。・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・こいつらは無視するか。

「んで？なんで俺が覚悟しなきゃいけないんだ？」

「しらばつくれるつもりか！！光さまを泣かせた罪、その身で後悔させてやる！！」

と思いつき大声で言ったのでクラスの奴らが、「おい、まじかよ・・・・・・・・。」「っていうか、どうして光さまに近づけたのかしら？」と、もうだいぶ噂で広まりそうなほど生きよくしゃべり始めた。・・

・・・・全く、面倒なことになっちまった。そう思いながら、

「いいぜ。お前らがやるっていうなら、オモテ出る。お前らを後悔させてやる。」

と言って、俺は窓から校庭に出た。ここは一階だから別に怪我はしない。それに、この行動に出たのなら、俺について来るだろうからな。俺の行動を見たそいつらは案の定、

「追うぞ！あいつを後悔させるために！！」

「「「「おおーーーー！！」「」「」」」

と言って、そいつらも窓から出てきた。数を数えてみるとざっと三十人くらいはいた。

・・・・・・・・ん？俺を囲んでたやつらは十人くらいしかいなか

ったはずだが……何があつたんだ？と疑問に思っていると、
「さっきの人が言った一言で、大抵の人が君を倒そうとしてるみた
だよ。」

いつきが窓の方から言ってきた。まあ、あいつが敵側じゃなくてよ
かったぜ。周囲の状況を確認してから、

「さてお前ら。覚悟はできてるんだろうな？俺は容赦しないからな。」

「と言ったら突然、」

「死ねえー！！！」

と言って突撃してきた奴がいたので、

「フン。」

バキッ！！！！

一発殴ったらのびたのか、そのまま気絶した。後二十九人か。とぼ
んやりとしながら空を見ていたら、

「全員、あいつを倒すぞ！！！」

「おお——！！！」

と言って、全員で俺に向かってきた。数で突撃なんて、サル以下だ
な。と思いながら俺は、迎え撃つことにした。

3 - 7 乱闘 天才（前書き）

戦闘シーンやらの描写に期待はしないでください。

3 - 7 乱闘 天才

「会長。校庭で乱闘騒ぎがおこってるようですが、止めに入らないと駄目なのでは？」

「そうですねー。でないと色々と言われますよー。」

「私もそうした方がいいかと。」

「皆さんの意見は分かりましたけど、あの状況でどうやって止めに入るのですか？」

「こ、これは……！」「うわー。」「なんだ、これは？」

そこで彼女らが見たのは、突撃してきた奴らを片っ端から倒している人影だった。

「どうです？これでも行きますか？」

「………無理ですねー。」

「そうだな。」

と二人はやめたが、

「だからどうした！！私は行く！！」

と言って一人は出て行った。それを見届けた三人は、

「どうしますか？」

「私達も行った方がいいと思いますよー。」

「そうですね………でも、あの人の戦ってる姿はとても絵になっっていますね。」

「そうですね。まるでドラマの乱闘シーンを彷彿ほつふつとさせる立ち回りです。こんな人がいたのですか。」

「これはもはや、“天才”と言ってもいいかもしれませんねー。」

「おや？終わつたみたいですよ？」

「どれどれ。」「早いですねー。」

見ると、ひとりを除いて三十人が倒れていた。その時に立っていた人の顔を見たのか、

「あら？あの人は………。」

「どうかしましたか？」

「いきましよう、みなさん。」

「どうしたんですか？いきなり。」

「ふふつ。あの人でしたか……。楽しくなりそうです。」
と言つて、割と早足で教室を出て行つた。

「ふむ。やはり儂の目に狂いはなかったのう。」

学園長室にて。秘書っぽい人と、学園長は校庭を見ていた。

「一人で三十人も……。どこの鬼神ですか？」

「あやつの資料を見たんじやが、これがなかなかすごくてな。」

「？いきなり話を変えられると困るのですが……。どう
ういった内容で？」

「小学校に上がる前から、警察から表彰状を貰っていたようじゃ。
「なにでもらつたのですか？」

資料をパラパラとめくりながら、学園長は言つた。

「それが……。おお！これじゃ！これ！……。
ふむふむ。もらつた理由が『ひつたくり犯の逮捕』だそうじゃ。」

「しょ、小学生になる前にそんな事件に遭遇していたのですか……。
」

「その後も『連続通り魔犯の逮捕』『強盗犯の逮捕に貢献』とかで
もらつてるみたいじゃな。」

「……。」。

「これで判ることはないかのう？」

「随分いろいろな事件に遭遇してるみたいですね。」

「そう。本宮の子が言いたかつたのは、おそらくそこじゃろつ。」

「？と、いいますと？」

「あやつがドラマを嫌いな理由。それは実際に事件に遭遇してるか
らじゃ。」

「憶測ではありませんか？」

「そうかもしれんが、これがしつくりとくる理由じゃ。」

「……………そうですね。しかし、この騒動に対する処遇をどうするおつもりで？」

「どうしようかのう。」

と学園長がつぶやいた瞬間、

パリ————ン!!!!!!!!!!

と窓ガラスが割れた。……………学園長のすぐ横の窓ガラスが。

「だ、大丈夫ですか?!?!? 学園長!!」

「大丈夫じゃ。あやつも、儂に直接やる気はなかったみたいじゃからのう。」

「そういう問題じゃありません!!? 誰がやったんですか!!」

「見ていなかったのか? あそこにいるやつじゃ。」

「え!?!」

と驚いて窓ガラスの方へ駆け寄って校庭を見ると、

「あ、あんなところから投げたんですか……………?」

「そうみたいじゃのう。」

校庭の中心に近いところからここまで、実に百メートルくらいはある。そこからどのくらいの速さで投げたのかと想像すると、秘書っぽい人は顔を青ざめた。

「あ、ありえない。い、一体、どうやってここまで投げられるんだ。」

「投げられたものを見てみるといい。」

学園長の言葉で投げられたものを見た。すると、

「木刀?……………まさか、」

「木刀を投げてここまで来ること自体驚きじゃが、あのスピードにも驚くじゃろ?」

「で? どうするんですか? これは退学ものですよ? しかも、前代未聞です。」

「じゃが、彼を手放すのは大変惜しいのう。ひょっとすると、大変

な損害になるかもしれん。」

「早く決めた方がいいですよ。．．．おや？久し振りに生徒会が動いたみたいですよ？」

「録画しておいてくれ。僕は処分について考える。」

「分かりました。」

と言って、学園長は彼らの処分について考え始めた。

3 - 8 遭遇 生徒会

一対三十人の戦いの割と始めの方に場面を戻す。

「うわあゝ。一人で特攻しちゃったよ。っていうか、この学園に勝てる人っているのかな？」

といつきがつぶやいたと同時に、

「や、八神君！！今すぐ逃げ・・・・・・・・・・」

長谷川が入ってきた。間が悪いのか遅れたのか分からないが、

「今やつてるけど。」

「え！？」

と言つて校庭に行こうとする長谷川。しかし、

「駄目だよ。今あそこに行つたら君も巻き添えくらっちゃうからね。」

いつきが腕をつかんだ。

「ど、どうしてですか！！？」

「よく見た方がいいよ。」

理由を尋ねる長谷川に対し、実際に見た方が分かんと言つてあえて言わないいつき。

しぶしぶ見ると、

「どりゃあ————！！！！！！」

「雑魚どもが。数だけで勝てると思つてんじゃねえよ！！」

ゴスツ！！バキツ！！ドシャ————！！

「グハ————！！！！！！」

まとめて攻められていたのに冷静で、それでいて洗礼された動きで攻撃してきた奴らをのした。

「ね？巻き添えくらうでしょ？」

「そ、そうですね・・・・・・・・・・」

と会話しながらも校庭を見ている二人。すると、

「でもなんで君は泣いていたの？」

「え！？ど、どうしてそれを！！？」

いつきのつぶやきが聞こえたのか、長谷川が驚いていた。

「どうしてって、親衛隊の人たちがつとむのところに来たから分かったんだけど……何があったの？」

「そ、それは……」

と事情を説明しようとしたら、

「ねえ！？あの人木刀もってるわよ！！！」

との声がしたので再び校庭を見ると、そこには木刀を持って攻撃しようとしている人がいた。

「あ、危ない！！」

と長谷川が言ったが、

「大丈夫、大丈夫。つとむはそんなものじゃ殺せないから。」

といつも通りの笑顔でいつきが言った。

『覚悟つ！！！！』

ガン！！！！

『な、き、効かないだ！？？化け物か！？』

『いつてえな。だがな、こんなしょぼい打撃で俺が倒せると思ったのか？』

ガシッ！！！！

『取りあえず、木刀だけは持つとくか。』

『ガッ！！！！』

と木刀を持っていた奴の腕をつかみ、木刀だけを落とさせて、そこらへんに投げた。

……人の方を。

「あゝあ。武器持たせちゃった。後はもう、全滅コースまっしぐらだね。」

「す、すごい。」

呆れたいつきと、怖さを通り越してカツコイイと思えるような強さを見て、驚く女子たち。

「これくらい普通にやるのがつとむなんだよね。しかも息が上がって

ないし。片手間で相手してるみたいだ。」

と冷静に状況を見て解説するいつきを見て、八神の本気はこれ以上なのか、と女子全員が驚いたのは言うまでもない。ちなみに、長谷川はこれを見て「（キュン）」となっていた。

その後、武器を持ったつとむが数十秒で残りの奴らを全滅させ、いらなくなった木刀は思いつきり投げた。………
……学園長室に。

「あ。あの方角は学園長室だ。もしかして………この騒ぎに便乗して退学する気かな？もしそうだったら、どうしようかな？」

と笑いながら呟くいつき。しかし、その笑顔とは裏腹に、もし退学したらどうしようかと怒りながら考えていた。その時、

「あ。誰かまた来たみたいだ。誰だろう？」

と、新しく来た人を見て、自分の情報にはない人が来たことに驚いた。それを見たひとりの生徒が説明してくれた。

「本宮君、知らないの？生徒会の一人で岡部未来おかへみくって言ってね、この学校で起きた騒動を、基本的に取り締まってるのがあの人なんだよ。」

「ふん。そうなんだ。ありがとね。」

いつきはその場でお礼を言って、すぐさま校庭に目を向けた。観ると、つとむと岡部がなにやら口論していた。その口論はそのまま殴り合いに発展し、岡部が殴りかかってつとむが避ける、の繰り返しだった。

「中々やるみたいだけど、結局駄目だね。つとむと彼女の場合が、倍以上だからかな？」

その光景を見ていつきは呟いたが、それは誰にも聞かれなかった。そして、しばらくすると、

「校舎側からまた人が出てきた。………もしかして、生徒会かな？」

残りの生徒会のメンバーが、校庭に集合した。その中に一人、見覚

えのある人がいた。

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・あの人ってここにいたの？」

3 - 8 遭遇 生徒会（後書き）

どこまでここが嫌いなんだろう、この主人公？

3 - 9 やる気なし やる気あり

また時はさかのぼって、三十人を全滅させた後。戦っている途中で木刀を使い出したつとむにとつて、残っていた十数人は取るに足らない相手だった。襲ってくる相手を木刀で一振りしただけで、その相手は全滅。それを繰り返す単調な作業になってきたために、つとむは欠伸をしだした。

「ふあゝあ。……ん？終わったのか。やっぱり弱かったな。そうそう、怪我はおそらく大したもんじゃねえから。」

と言って、この木刀をどうするかと考えていたが、ふと、これを使って退学できるんじゃないのかと思いついた。そして、
「……よし。これやれば確実に退学になるだろうな。というわけで、オウリヤツ！！！！」

ヒュン！！パリ——ン！！！！！！！！

『だ、大丈夫ですかっ！！？学園長！！』

「よしっ！大成功！！……さてと、これからどうするか……ん？誰だ？」

木刀は投げ終え、これからどうしようかと考え始めようとしたら、誰かがこっちに向かってきた。そいつ——恐らく言うつか、間違いない女子だろう——が俺の前まで走ってきてこう言った。

「生徒会だ！！大人しくしろ！！」

「いや。もう終わったし。この状況を見ればわかるだろ？」

「くっ！一足遅かったか……」

それ以前に、来ること自体遅かったような気がするんだが。そう思ったが、ふとこいつが初めに言った一言が気になった。

「お前、生徒会って言わなかったか？」

「ああ。確かに言ったぞ！！私は生徒会書記で二年の岡部未来だ！」
「そうか。なら、こいつらをどうにかしてくれ。どうせ、軽い怪我

だから心配はいらないが。」

「それもやらないといけないが、今はお前を倒す!!」

「ハア!!? いきなり何言ってるんだ? お前?」

「なぜなら、私は騒動の鎮圧を任されているからだ!!」

「ところでそいつは偉そうにした。……」

「あつそ。言っておくが原因は俺じゃなく、そこにのびているそいつだ。」

「何!?!」

「ただ、今は起きないんじゃないか?」

「それだったら、誰のせいであんなになったのか分からないじゃないか!!」

俺に言われてもな。そいつに対してだけは、私怨を込めて他の奴より強く殴ったからな。一時間すれば起きるんじゃないか? そう計算していたら、

「原因がどうであれ、お前はこいつらをやったことには違いないだろ?」

と、口調が多少冷静になった。何かスイッチが入ったのか? 今ので?

「最初に襲ってきたのはそいつらだが。俺は全部、正当防衛だぞ?」

「それでも、他に方法があつたはずだ。」

「方法、ねえ。……話し合いは無理だろ? なんせ、あいつらが襲ってきたんだから。」

「もつと穏便におさめる方法があつたのではないのか?」

「知らん。」

その一言に、そいつは黙った。その時に、俺はそいつの雰囲気が変わったことに気付き、戦闘態勢を取った。

「おつかねえじゃねえか。なんだ? やる気か?」

「なるほど。貴様はデキるみたいだな。なら本気で行かせてもらおう!!」

そう言っただけで、俺との距離を一気に縮めた。へえ、なかなかやるじゃないか。と思いながら、そいつが次々に繰り出す攻撃を、

かなり余裕を持ちながら避けていった。

「……このぐらいなら当たる気はしないな、まだ。」

俺の親父、もしくはいつきのSPの攻撃だったら紙一重か、かすりそうだ。

「……そういや、最近親父と手合わせしてないな。今度やつてくれるかな？そう思いながら避けていると、だんだん疲れてきたのか、」

「な、何故一発も当たらないんだ……。そ、それに、どうしてお前は攻撃しないんだ……？」

と質問してきた。え？それ言わないと駄目なのか？そう思いながら言おうとしたら、校舎の方から人がくるのが見えた。俺が何も言わないのがチャンスと見たんだろうが、俺の表情が気になったのか、そいつは後ろを振り返った。そして、

「か、会長！？な、何故来たのですか！？私はてつきり待っているのだとばかり……。」

と言った。会長？もしかしくなくてもそれって、生徒会の会長だよな？それは誰の事だろう？と思って、こちらに来る生徒を見てみた。そしたら、見覚えのある奴だった。

3 - 10 白鷺美夏 生徒会長

「あら？それは当然の事じゃありませんか？私も生徒会の一人なんですから。」

「お、お前、あの時の……！！」

「覚えてくれていましたか。私としては嬉しいことです。」

「……………まさか、あんたが会長か？白鷺さん。」

「名前まで憶えてくれましたか。八神君は記憶力がいいみたいですね。」

「くそっ！そういうことかよ。うちの学園の制服着た、見慣れない奴だと思ったら生徒会の会長か。……………しかし、あいつも俺については知らなかったみたいだな。」

「まさか、あなたがこの学園にいるとは思いませんでしたよ。」

「俺は何年生かと考えていたぜ。制服を着ていたからな。」

「でも、この制服結構好きですよ？私は。」

「会長！！この男とは知り合いなのですか！！？」

「会話していたら、岡部が割り込んできた。なぜだろう、俺としては助かったような気がする。」

岡部の質問に対して、

「まあ、知り合いといえば、知り合いですよね？」

「俺に振るな。」

白鷺は俺に振ってきた。というかよ、

「会長、そんなのんきに話してないで、さっさと仕事しましょうよ。」

「そうですよ、会長。話すことはいつでもできますから、その前に仕事をしましょう。」

この二人の話くらい聴いたらどうだと、俺が思ったが、

「そつえば、あなたがつくったチーズケーキ、とてもおいしかったですよ。作り方を教えてくれませんか？」

話は脱線していく一方だった。

「……とてもじゃないが、話を修正できる気がしない。」

そう思った俺は、

スタスタ……………

……

「会長！！逃げちゃいましたよ！！」

「というより、教室に戻ってるような気がしますね。」

「会長。あなたが話かけている少年はあっちに行ってしまったが。」

「あら？」

無視して自分の教室に向かった。あんな奴ら相手にするだけ無駄だな。そう思いながら、自分の席に置いてあった荷物を、手早くまとめていった。その時、

「あれ？帰るの？」

いつきが笑顔で訊いてきた。長年の付き合いだから分かるが、こいつがこんな顔をする時は、大抵、俺に何か良くないものが降りかかる。例えば、SPとの喧嘩だって、一週間以内に山からの脱出だつてこんな笑顔だった。今回は何が起きるのかとビクビクしながら、

「帰らねえよ。ちと、学園長室に行くだけだ。」

正直に言った。するといつきが、

「……………退学する気だね？」

と声のトーンを普段より低くして言った。そういや、こいつにはよく喋っていたな。退学したいー、とか。まあ、それに関しては、

「する気ではあるが、こればかりは学園側の判断だからな。何であろうが素直に受けるさ。もっとも、退学だったら俺としては儲けもんだな。」

と言った。そうなんだよね。こればかりは学園側の判断じゃないと無理なんだよね。とか思いながら、俺は荷物をまとめ終え、学園長室に向かった。（ちなみに、生徒会のメンバーは、俺の事よ

り白鷺に手を焼いていた。」

「邪魔するぜ。」

と言いながら俺は、自分で割った窓ガラスのところから学園長室に入っていた。

「おい、君！！校舎の中なんだから、靴ぐらい脱げ！！」

「……俺が窓から入ってきたのには、ツツコまなののか？」

「わあったよ。……ところで、爺さんは？まさかさっきで逝っちまったんじゃないだろうな？」

と靴を脱ぎながら俺は訊いた。……窓ガラスの破片がない。もう掃除したのかよ。と掃除の速さに驚いていると、

「お主、自分で外しておいてよく言えるのう。」

学え……。爺さんの声が、ソファから聞こえた。

「まあ、そうだがよ。……騒ぎを大きくしたんだ、当然、その分の処罰が下るんだろうな？」

「ふむ。それなんじゃが、まだ迷っておつてのう。」

「早くしたらどうだ？」

「あ。言つのを忘れていたが、主が三十人倒した後は録画されているからの。」

「そうか。別に暴れてないからいいんだが。」

実際は生徒会の奴が暴れていただけだ。

「学園長。この者の処分をどうするおつもりで？」

と秘書っぽい人が催促してきた。俺としても早くして欲しいんだが、と、そんなことをやっていると、

コンコン！！

ドアをノックする音がして、

「失礼しますよ。」「失礼します。」「失礼します。」「失礼する。」

生徒会のメンバーが学園長室に入ってきた。

「ふむ。．．．．．おや？白鷺君ではないか。今日は何用じゃ？」「今日はですね、その八神君に用があるんですよ。」

と、入って早々、爺さんと白鷺が会話していた。．．．．．白鷺を俺の方を指しながら。

まあ、あながち間違っちゃいないな。

「彼かね？残念じゃが、この騒動の処遇を考えている最中じゃから、その用というのは意味がなくなるぞ？」

「そうなんですか？．．．．．ですが、この騒動を仕掛けたのは彼じゃありませんよ？」

「そうなのか？」

白鷺の奴、余計なこと言っただな。．．．．．確かに、仕掛けたのは俺ではない。ただ、騒ぎを大きくしたのは俺だ。それを判らせないために、俺は全員を気絶、もしくは失神させたんだが．．．．．なぜばれた？と疑問に思っていると、

「クラスの人に訊いたんですよ。丁度、知り合いもいましたから。」と答えをばらした。それにしても、知り合いだと？うちのクラスにこいつの知り合いなんていたのか？と思っていると、気付いた。生徒会四人の後ろに、よく見ると二人ほど人がいることを。白鷺が、そいつらに「入っていいですよ？」と言うと、その二人は入ってきた。

．．．．．まさかその知り合いって、

「いつき！？お前かよ！！？．．．．．それと、なぜ長谷川がいるんだ？」

「私に対しては冷たくありませんか！！？．．．．．私がそもそも原因なんですから。」

「いやあ、まさかここに白鷺さんがいるとは思っていなくてね。しかも三年の『アイドル』で、生徒会長だったなんて。全く、まさか三年までは関わらないだろう、と思っていたから調べなかったの

があだになるなんてね。」

そう、まさかのいつきであった。ちなみに、長谷川も来ていたが、今の俺にとつてどうでもよかった。この状況をみて俺は、白鷺の『知り合い』の意味を悟った。つまり、

「白鷺さんも金持ちだつてわけか。」

「本宮君と一緒にいるからでしょね、私の素性を知っても驚かないのは。」

「そういう事にしとくか。．．．．．それで、こいつらから何を聞いたんだ？」

「この騒動のはじまりについて、ですね。」

「ほう。処遇については悩んでおったから、その話を聴いて考えるとするか。」

「なら、お話ししますね？」

と言つて、白鷺はこの騒動の始まりから順に説明していった。いつきと長谷川から訊いた話だろうから、それらの情報は全て否定できなかった。

「．．．．．というわけです。つまり、八神君は仕方なくこの騒動を片付けるために、こういう行動に出たんですよ。」

そう白鷺は締めた。その言葉で生徒会全員は納得し、学園長たちも納得したみたいだ。ただし、

「それは分かったが、学園長室の窓ガラスを割ったという行為の説明はできないぞ？」

と秘書っぽい人が言った。そう。俺は、それとは関係なく窓ガラスを割っている。しかも、学園長室の。元々は、さらに退学処分の決断を強めるためにやったものだが、今じゃ処分を受けるための保険となっていた。

「．．．．．ま、処分さえ受ければ俺に関わる奴はいなくなるからいいか。」

しかし、それは甘かった。

「それは本宮君が言っていましたけど。学園長。あなた、彼にドラマの出演について言っていたそうですね？」

この白鷺の声は、本当にこいつの声なのかと疑いたくなるほどの、平坦で、冷たい声だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「それなら、彼がこのような行動に至っても、おかしくはないですよ？」

これは完全に屁理屈だ。しかも、これにはぼっかりと空いた『穴』がある。そう思ったが、ひよつとすると俺がドラマ嫌いなことを知っているからわざと空けたのかと思い直した。

3 - 11 処分 早退

すると学園長が、

「彼が、ドラマが嫌いだってことを知っているのかね？」

と白鷺に訊いた。いつき、俺、長谷川、白鷺は驚かなかったが、他の生徒会の奴らは驚いた。

「ついさつき知りましたけどね。．．．．．嫌がっているのに

薦めようとしたから、それに対する報復行為じゃないでしょうか？」

「ふむ。そうともとれるのう。．．．．．となると、僕にも責任があることになるわい。さて、どうしたものか．．．．．」

．．．．．

と、爺さんが自分にも非があることを認め、これからどうするか考え始めた。このやりとりを聴いて疑問に感じたことを、俺は白鷺に訊いてみた。

「しっかし、なんでここまでするんだ？」

「あら。可愛い後輩の頼み事ですから、これぐらいやりますよ。それに、まだレシピを訊いていませんからね。」

「結局それなのか．．．．．」とうなだれていると、

「ねえ、つとむ。なんで白鷺さんと知り合いなの？僕と一緒にいる時は会ったことないよね？」

といつきが訊いてきた。

「ああ。昨日、店に来たんだよ。誰かは知らんが、他の奴も一緒だったよな？」

「平塚さんですか？あの人は雑誌の記者で、昨日取材を受けていたんですよ。」

「へえ〜、つとむってよく、こういう人たちと遭遇するよね〜。」

「？どうした、いつき？なんで怒ったような声なんだ？」

「べつ、つに？」

「どうしたんだ？いつきの奴。みると、長谷川もいつきと同じ状態だった。どうしたんだ？二人とも？と首をかしげていたところで、
「そういえば、お聞きしたいことがあったんですけど、よろしいでしょうか？」

と白鷺が訊いてきた。俺にだよな？

「訊きたいことって？」

「昨日と一昨日の騒動を収めたのって、あなたですか？」

「ああ。確かにそうだが、収めたわけじゃないぞ？」

「収めたじゃないですか。報告があつた時には、もう収まっていたんですから。」

そういうもんなんだろう？若干不思議に思ったが、

「決まったぞい。」

その爺さんの声で、それを考えるのをやめた。

「さて、お主の処分についてじゃが……………」
……………」

そう爺さんが言ったので、俺達は爺さんの前に並んだ。……………」

……………」

「なんでお前らまで？」

「私は会長ですから。」

「僕は親友だから。」

「私は原因ですから。」

「我々は生徒会だから。」

「……………」

もうどうにでもなれ。

「気を取り直して主の処分じゃが、二週間の停学処分を言い渡す。

他の生徒は、反省文でも書かせようかのう。以上じゃ。」

それを聴いた時、生徒会の連中は「そういえば、我々は何のためにこの騒動に首を突っ込んだのでしょうか？」「彼の処分を軽くする

ために、ですよ。」と言っていたし、長谷川は「よかったです。退学にならなくて。」、いつきは「二週間か・・・・・・・・ま、退学にならなくてよかった。」とそれぞれ言った。

「どうした？嬉しくはなさそうじゃが。」

「一ヶ月でよかったじゃねえか。なんで二週間？」

「理由はないわい。」

「それでいいのか！！仮にも教育機関の長だろ！！」

「冗談じゃ。理由は・・・・・・・・悪いが言えん。」

「は？」

「言えない？どうしてだ？」

「それも言えんわい。」

「それも秘密か。・・・・・・・・まあい。」

「これで処分が決まったんだろ？なら長居は無用だ。じゃあな。」

俺は荷物を持ってそのまま帰ろうとした。その行動をみて、

「あら？帰っちゃうんですか？」

「え〜〜帰っちゃうの〜〜？」

「帰るんですか？」

三人が俺を引き留めようとした。・・・・・・・・いつきはいいとして、他の奴らは何故俺を引き留めようとする？そう思ったが、

「じゃ。」

無視して、学園長室の窓（俺が割ったところ）から出た。

これからは大分バイトができるな、と思いながら。

3 - 1 2 処分内容の理由 マスター（前書き）

三十話突破してました。読んでくれているみなさん、これからよろしく願います。

3 - 12 処分内容の理由 マスター

つとむが帰ってしまった後、

「帰っちゃいましたね．．．．．残念です、まだレシピ訊いてないのに。」

「会長。そんなにおいしかったのですか？」

「とても美味しいですわよね？本宮君？」

「そうですよ．．．．．そこまで訊きたいの？つとむのレシピ。」

「何か言いましたか？」

「いえ、別に。」

「どうでもよくはないんじゃないが、お主ら。これから授業じゃぞ？八神については儂が説明しとくから、さっさと自分らの教室に戻らぬか？」

「．．．．．あ。」

学園長の言葉で全員が自分たちの教室に戻った。その後、

「いいのですか？彼も言っていたように、最低でも一ヶ月の停学が妥当だと思うのですが。」

「そんなこと言われてものう。あの二人が、無言の圧力で見てくるからのう。」

「誰ですか？」

「本宮の子と、白鷺嬢じゃ。」

「もつと厳肅にしてくれませんか？」

「それは無理じゃな。あの二人が関わってしまったら、割と面倒なことになるからのう。」

「そうですか．．．．．あ。きちんと録画はしましたからね？」

「八神君には、追悼の念でもおくるかのう。あの二人に関わったばかりに．．．．．」

「聴いてるのですか……？それと、まだ彼は死んでいませんよ！」

割れた窓ガラスのことなど忘れ、つとむの心配をしている人がいたとか。

「ん？つとむか？やけにはやいな、さぼりか？」

「ちげえよ。停学になったからさっさと来たんだよ。」

「お前が停学？……何やったんだよ、一体？」

「ちと、乱闘騒ぎになつてな。」

その一言で、マスターは事情を理解したようだ。「ま、詳しいことは訊かねえからよ。バイトするんだつたら着替えてくれ。」と言ってくれた。助かるね。

それから、俺は着替えていつも通り仕事を始めた。マスター曰く、「停学なんだから、営業開始からいつもの時間までやれよ。」。俺としてはそのつもりだったが、「連絡してくれば行く。」とだけ言っというた。

で、働いてみて思ったことだが、いつもの時間とは違い、人が少ない。そりゃそうか。今の時刻は午後二時をちよいまわったばかり。この時間帯だと本当に暇な奴らしか来ない。それか、締め切りに追われてる奴らぐらいか。

「暇だ。」

そうつぶやいたら、マスターに殴られた。

「ぼやいてないで、働いたらどうだ？」

「俺が普段してる仕事なら終わったぜ。他にないのか？」

「ん？そうだな……ない。」

「ないのかよっ……！」

「仕事があるまでは本でも読んでろ。レジの前でな。」

と言って、スタスタと行ってしまった。……要するに、マスターも暇なんだな。

その後しばらくして午後三時になって、ようやく俺が来るときの

常連が来た。

「いらつしゃい。」

「八神君じゃないか。いつより早いけど、もしかしてようやくサボリかい？」

「ちげえよ。停学くらったから直できたんだよ。」

「ということは、いつもより早く来ても八神の料理が食えるんだな。」

「嬉しいね。」

そんなに俺の料理は美味しいのだろうか？時折不思議に思うが、食ったやつらが「おいしい」というので、美味しいのではないかと思っている。・・・・・・これをいつきが知ったら間違いない。
「君はいろんなところが無自覚だね。」と言われるんだろうな。
ふう。

「注文は？」

「俺、ミートスパ。」

「じゃあ、私はイチゴパフェと、カフェオレかな。」

「俺はハヤシライス、粉チーズ付き。」

「マスター！！」

「分かってるよ！カフェオレは出しとくから、他のやつつくれ！！」

「了解！！」

と言つて、俺は料理を作ることにした。・・・・・・さつきまでが嘘のようだな。と今本気で思った。二十分後、

「はいよ。ミートスパ、イチゴパフェ、ハヤシライスの粉チーズ付き。」

「相変わらずうまそうだね。」

「ホントだよね。」

「ああ。」

出した料理を見て、それぞれに感想を言っていた。そういえば・・・・・・

「今日、来れないんじゃないかったのか？」

「ああ。本当は来れなかったんだけどね……」
俺が訊いたら、常連の一人が何故か落ち込んでいた。何かあったのか？

「それがね、美鶴が予約間違っちゃったみたいでね、」

「明日になってしまったんだ。」

「ふん。……で、何の予約だったんだ？」

「旅行だよ。俺達三人で行くんだ。」

「それはいいじゃねえか。どこに行く予定なんだ？」

「九州のほうだな。」

「その話聞いてたら、俺も早く旅してえなあ、って思っちゃったぜ。」

「

「八神君はどこに行くつもりだい？」

「俺は……まだ決めてないな。ただ、日本全国を旅したいとは思ってるぜ。」

「一人で？」

「ああ。」

「ま、頑張れ。」

「分かってるよ。」

そんな風に談笑していると、

「お前ら、俺の賄飯食べるんじゃないのか？」

「ああ。」

マスターの一言で、客の方の動きが止まった。……忘れてたんだな。

「そ、それじゃ、丁度八神君の料理もあるわけだし、マスターの賄飯出してよ。」

「そうだね。よろしく、マスター。」

「お願いする。」

客の一人が機転を利かせて、俺とマスターの料理対決になった。これ、誰が得するんだ？

「忘れてたんだな？……まあいいか。お前らに本当の実力

を見せてやる。」

と言って、マスターが調理室に行った。

「と、いう訳で、ちよつとの間、八神君の料理は食べられなくなっちゃった。」

「でもマスター、どんな料理作ってくるのかな？」

「楽しみだな。」

と話していること十数分、マスターがいつもの賄飯を持ってきた。

「ほらよ。これが俺の実力だ。」

「なっ！？マジかよ！！？いつも出してる料理とは全く違うじゃねえか！！」

「え！？これが本当に、マスターがつくった料理！！？」

「信じられん……………」

信じられないだろうが、これがマスターの本気。いつも出してる料理は、何故かおいしくないのだが、賄飯だと物凄くおいしくなる。……………これはいつきも知らない情報だ。

前に理由を訊いたが、

『レシピ通りにつくってるはずなのに、何故か不評が来るんだよなあ。』

と言っていた。いや、理由になってないから。

その賄飯を客の一人が食べてみると、

「……………うまい。」

と言った。

「確かにおいしそうだけど……………」

と言いながら二人目も食べてみると、

「おいしい。」

と驚いていた。三人目に至っては、何も言わずに黙々と食べていた。うまいよな、それ。

数分で三人は食べ終えて、それぞれ感想を言った。

「まさか本当においしかったとはね。最初はただの謙遜だと思ったよ。」

「な？嘘じゃねえだろ？」

「そうだね。これは八神君とどちらが美味しいのかな？」

「どっちもおいしいから、判断がつかないな。」

「そうだな！じゃ、引き分けだな！！」

結局、料理対決は引き分けになったらしい。俺としては、マスターの方が上だと思っただが、マスターも、その判定には満足しているみたいだ。

その後、俺がつくった料理も食べ、会計時に『賄飯・三百四十円』が追加され、その常連の人たちはちよつと後悔したみたいだった。
・・・・・・・・・・・・・・・・意外と抜かりないよな、うちのマスター！。

3 - 13 来客 集団

そして、俺が普段来てる時間帯になった。だから、いつもの客が来ている。ま、それは俺としては、ありがたいんだがな。何故って？いつもと変わらない日常。それは平穩の時間と変わらないと、俺は感じているからだ。ああー、あいつらと関わらないとこれほど平和に感じられるのか。と思いながら料理を作っていると、

カランコロンー！！

「いらつしやい。・・・・・・・・・・久し振りだな。」

また客が来た。この時間帯でもそんなに客が来ないのがこの店なんだが、今日は客が多いな。作り終えた料理を運びながら、俺はそう思った。

「ほれ。できたぞ。」

「おー。やっぱり八神君の料理はおいしそうだねー、いつも。」

「そうか。」

と客と話をしていると、ふと誰かの視線を感じた。しかも複数。誰だと思つて辺りを見渡すと、見つけてはいけない奴らを見つけてしまった。・・・・・・・・・・もしかして、さっき来た客はこいつらか？そう思いながら、どうやってカウンター席を通らずに調理室に行くか？と考えていると、マスターに捕まった。

「おい八神。こっち来て相手しろ。そっちの方は何とかしてやるから。」

「はあ！？ザケンじゃねえ！どう考えても地雷じゃねえか！！わざわざ踏みに行くかよー！」

「クビにするぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わあつたよ。たくつ、無事でいたいところだぜ。」

「任せたかなー。」

ハア。もうどうにでもなれ（二度目）。

「やあつとむ。今日は大分稼げるんじゃないかい？」

「やっぱりお前か。それで？なんでジジイの所に居たメンバーがここに居るんだ？」

「へ！？え、えつとですね・・・」

「それはですね、学校が終わった後に生徒会のメンバーでここに来る予定だったのですが、その時に本宮君と長谷川さんがここに来る話をしていたので、なら皆さんで行きましょうと言う話でまとまって、今に至るわけです。」

「丁寧な解説をありがとう。でも、結局は全員がここに来ることになつてたじゃねえか。」

「あら？」

「そうなりますね。」

「そうですね。」

「本当ですね。」

本当にこいつは抜けてるんじゃないか？そう思わずにはいられないのだが。

と、そんな話をしていたら、

「そういえばさ、さつき僕達のこと『地雷』って言つてなかった？」
いつきが低い声でそう言った。こいつは地獄耳か？と一瞬思ったが、ここはあんまり広くはないため、俺の声は普通に聞こえる。

「・・・こうなったら腹くるか。俺はそう思い、正直に言った。
「言つたよ。悪かったな、それは。けどな、お前も分かつてるだろ？俺は、あの学校は嫌いなんだ。そんなところの奴とはできるだけ、関わりたくないんだ。」

ここで俺は一区切りした。長谷川はうつむいて表情は見えないが、おそらく泣きそうになっているのだろう。白鷺は何やら思案顔だった。他の生徒会の奴らは「あいつ、やっぱり殴つてやる！！」「落ち着いてよく岡ちゃん。」「ここは店内だ。落ち着け。」とやっていた。

・・・・・・なんかスマン。

残ったときはというと、いつもの表情ではなく真剣な顔で俺の話
を聴いていた。こいつはこんな顔も出来るのかと思っていたら、
「そこまでハッキリ言うという事は、やっぱり君はあそこにいるの
が嫌いなんだね？」

「ああそうだな。俺は嫌いだ。だがな、」

と、いつきの質問に肯定してからこう言った。

「だがな、俺は一生懸命に役者とかになろうと頑張ってる奴は良い
と思うぜ。」

これは俺の正直な思いだ。頑張る奴はすごいと思う。

カウンター席の奴らを見てみると、長谷川は頬を染めているし、い
つきは「君はいつも正直な思いを口にするよね。反応に困るんだけ
だな。」と言ってるし、白鷺は「ふふっ。八神君は正直ですね。」
と言ってるし、生徒会のメンバーは「カッコイイですね。」「そ
うだな。」「フン！あれはどうせ演技ではないのか！？」と言っ
ていた。おいコラ、最後の奴。疑いすぎだろ。そう思いつつ、

「さてと、長話はここまでだ。なんにする？」

注文を取ることにした。こんな話、さっさと終わらせないと他のバ
イト行けなくなるからな。

「じゃあ僕はいつものね。」「私はこの、ショートケーキで。」
「それでは私は、昨日と同じチーズケーキで。」「私はイチゴパフ
ェで。」「私はイチゴのタルトで。」「私はチーズケーキだ！」一
斉に注文してきた。分かった、分かった。

「モンブランひとつ、ショートひとつ、チーズ二つ、パフェひとつ、
タルトひとつな。」

と言って、俺は調理室に向かった。こりや多いかな？

つとむが調理室に入った後、

「それにしても、どうして八神君はバイトをしているのですか？」

「うちの学校はバイトを許可していますが、やるバイトは普通、各
学科に關係のアルバイトをしていますよ。ですが、」

「八神君はその関係ではなく、普通の学生がやるバイトをやっていますね。申請はされていませんが。」

「え？あれって、申請しなきゃダメだったの？」

「ここを紹介したのはあなたですか？」

「そうだよ。つとむがどうしても、って言うから。」

「つきがはにかんでいうと、

「その話を聴くと、八神君と君は、昔からの知り合いのような気がするんですが？」

生徒会のメンバーの一人がこう訊いてきた。

「そうだよ。僕とつとむは幼馴染なんだよ。」

と嬉しそうに話すいつき。

「ところで、どうして八神君はここでバイトしてるのですか？」

そこで長谷川が話を戻した。

「ああ、それ？それは簡単だよ。単に小遣い稼ぎのためだよ。親が小遣いをくれないらしいからね。」

「え？」

「そうなんですか？」

「うん。だって」

と話をしようとしたら、

「そこまでだ。ほらよ、注文の品だ。」

つとむがそれを遮った。

3 - 1 4 評価 急ぎ(前書き)

一万PV突破いたしました!.....って、あれ?
一番最初の作品より早い気がします、きっと気のせいでしょう!
これから、お付き合いください。

3 - 14 評価 急ぎ

「まったく、気付いたら俺の身の上話になってたじゃねえか。しかも、なんでいつきが話してるんだよ？」

「あはは。最初の話題が君だったから、ね。」

「あつそ。・・・まあいい。さつさと食べる。」

「」「」「」「いただきまゝす。」「」「」「」

そう言つて、いつき達は食べ始めた。

「おいし〜。やっぱり、つとむの料理はいつ食べてもおいしいね〜。」

「

「そうか。」こいつはいつもそんなことを言う。・・・嬉し
いが。

「お、美味しいですっ！！八神君！」

「お、おう。ありがとな。」顔が近い。引くぞ。

「このレシピ教えてくれませんか？」

「頑張つてつくつてくれ。」教えてたまるか。

「おいしいです〜。」

「意外においしいですね。」

「意外とはなんだ、意外とは。」よく言われるが。

「・・・おいしい。」

「そりやどうも。」信じてなかったんだな？

それから、少し話をしていたが、

「あ。やべっ！」

「どうしたんですか？」

「マスター！俺上がるから！またな！」

「明日はどうするんだ！？」

「多分、無理！！」

と言つて俺は更衣室に駆け込んだ。後ろの方でマスターが、「マジでかつ！！」と言つていたが、気にしなかった。

急いで着替え終え、マスターからバイト代を貰い、店を出た。ふう。一つ目と二つ目のバイトの間の時間がきついんだよね。ま、こうなってもいいと言っちゃったからな。愚痴言わないでこぐか。そう思つて、二つ目のバイトへ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・何事も無ければいいと祈りつつ。

「どうしてあんなに急いでいたのでしょうか？」

「ちつ。つとむの野郎、時間を理由に逃げたな。」

長谷川が、なぜ八神は急いでいたのか、と疑問に思ったが、マスターは逃げたことを恨んでいた。・・・・・・相手が美人と評してもよい人たちと、頭が上がらない人だからである。

そこでいつきが、

「バイトの掛け持ちをしてるからだよ。」

と言った。それを聞き逃さなかった白鷺が、

「掛け持ち、ですか？どうしてそこまでお金が欲しいのでしょうか？」と訊いてきた。それに答えたのはもちろん、いつきだった。

「さつき言いかけたことなだけだね。つとむの家は、まあ普通の家なんだよね。経済面は。」

「・・・・・・・・？」

いつきが経済面だけを普通と言ったので、他のみんなは「なぜそこだけ？」と思つた。

「そこには触れないでおくけどね。・・・・・・・・とにかく、つとむの両親が『高校生になつたら自分でバイトしろ。』って中学二年の頃に言つたんだ。確か、その時から小遣い停められて、遊びに行つても何も買えないで見てるだけだったんだよね。ま、そのおかげか知らないけど、つとむは記憶力もよかつたんだよね。」「いつきが詳細を説明し終えた時に、全員が『割と大変な思いしてるんだなあ』』と思つたのは言うまでもない。

「さてと、僕もそろそろ帰ろつか。みんなは？」

「あ、私も帰ります。」

「私も帰らないといけません。もうすぐ迎えが来ますので。」

「私も帰らないといけないな。」「私もですね。」「私もです。」と全員が帰ることになったのだが、

「会計。金は払って行ってくれ。計三千四百三十円だ。」

マスターが、金を払っていけと言った。

「誰が払おうか？」

「なら、私が払いましょうか？」

「白鷺先輩、いいんですか？」

「構いませんよ。今日も来ようと思っていましたから。」

「ありがとうございます、白鷺さん。」「ありがとうございます。」

「いえいえ。今日はとても楽しい時間を過ごさせていただきましたから、そのお礼です。」

「会長、我々の分もすみません。」「助かります。」「感謝いたします。」

「どういたしまして。……では、これをお願いしますね？」

「五千円札か。普通の高校生がポンと出せるような金額じゃないんだが……。まあいい。お釣りの千五百七十円だ。」

「ありがとうございます。」

と言って全員が出て行った。それを見届けた後に、

「明日の店、どうすっかな？」

とマスターがつぶやいたのは、誰にも聞かれなかった。

幕間 八神つとむの災難な一日（前書き）

時系列？何それ、関係あるの？

というのは置いて。

このお話はつとむが長谷川光に会う前のお話です。

幕間 八神つとむの災難な一日

よっ！なんでか知らないが俺のちよっとした一日を紹介することになった。正直言つと、面倒だ。

大体、なんで俺の一日を紹介しなきゃならねえんだ！んなもん必要ねえだろ！しかもずつとやってるじゃねえか！！

愚痴を言つてスッキリした。本当は二、三十個くらいあるのだが、今回はこれくらいで勘弁してやるぜ。

ほんじゃ、始めるか。休みの日の紹介だけだな。

俺は、休みだろうが平日だろうがいつも六時に起きる。どうしてつて？習慣だ、習慣。

そのあとは着替えて、一階へ行く。ただ、今日は一階へ行こうとしたら、その前に立ちふさがっていた人がいた。

「どうした、茜？」

「お兄ちゃん。おはよう。」

「おう。おはよう。・・・なんか怒っていないか？」

「別に怒ってないよ！ただ、昨日は私のこと無視して二階に上がったよね！？」

「あ？・・・ああー、そうだったような気が・・・」

「ひどいよ！一人の妹を無視してそのまま行くなんて！！」

なんだか変なことで怒っているのが、妹の八神茜。ま、義理だが。

朝から元気だなーと思いいながら、俺は茜に謝った。

「スマン。昨日はとてつもなく疲れていたんだ。気づかなくてごめん。」

そう言ったら、急に茜の勢いがしぼんだ。

「あ、そ、そその……うん！今回は許してあげる！条件付きだけど！」

かと思ったら、再びよみがえった。ていうか、どうでもいいことで怒られてないか、俺？

今更ながらそう思ったが、それを言つとまた怒られそうだったので、俺はおとなしく従うことにした。

「で？条件つて、なんだ、一体？」

そう訊くと、茜がうるたえた。

「え！？えっと、その、あの……」

もつしかして、勢いで言つたのだろうか？

そう思った俺は、なら別に従わなくてもいいんじゃない？と思って降りようとした。そしたら茜が、

「きよ、今日、一緒に遊びに行こう！そ、そしたら許してあげる！」

と言つてきた。明らかに即興のようだったが、これ以上の条件を付けられたら面倒なので、俺は

「いいぜ。九時くらいに出るから、それまでに行く場所決めといってくれ。」

と言つて一階に下りた。

一階に下りたあと、俺は朝食の準備をする。普段はお袋がやるのだが、休日に関しては俺がやることになっている。茜にでも任せりゃいいだろといったが、お袋曰く『家事ができる男はモテるわよ。』だ。

それで文句は言わないでやっているのには理由があつて、一人旅をするときに料理くらい作れないと大変だと思つたからだ。

さて、そんな話をしているうちに朝食が完成した。俺は、テーブルに人数分の料理を並べた後、一人で食べ始めた。いや、食べ始めようとした。なぜなら、

「おはよう、つとむ。今日も元気そうだな。」

「親父。さっさと食べる。会社に遅刻するぞ。」

俺の親父、八神すすむが下りてきたからだ。起きたばかりだとみられるが、スッキリしていた。そんなに気持ちよく寝られたのだろうか？と、俺は思った。

「はっはっは。俺がそんなへマすると思うか？」

「思う。」

親父の質問に対し、俺は即答した。当たり前だろ？雰囲気的にダメサラリーマンだし。

俺が即答すると思っただけだったのか、親父はショックを受けた感じでとぼとぼとテーブルまで来て、朝食を食べていった。

俺たちが朝食を食べ終えた後、茜とお袋が下りてきた。茜はなぜか気合が入ったファッションで降りてきて、お袋はまだ眠たそうだった。親父と対照的だが、一体何があったのだろうか？

茜の服を見て、親父は驚いていた。テンションあがったな、たぶん。

「お、おま、一体誰と出かけるつもりなんだ？」

驚いた後に出てきた親父の言葉。そこでどうしてそんな結論が出るのか、俺は不思議でたまらなかった。

対して茜は、

「いいじゃん別に。お父さんには関係ないよ。」

と冷たく突き放した。……ここら、そのダメ親父。うなだれるな、会社行け、会社。

結局、うなだれた親父の機嫌を何とかお袋が直し、元通りになった状態で親父は会社に行った。どうなっているんだろうか、親父の精神構造は？

俺が片づけていると、お袋たちが朝食を食べていた。ただ、茜の食べるスピードが速かったことに驚いた。そして、茜は食べ終えたらすぐに自室へ戻ってしまった。そこまで場所を決めるのに苦労するのだろうか？とすごい勢いで自室へ戻る茜を見て、俺は思った。

お袋たちの片づけをやり終えた俺は、次に洗濯物を干していった。お袋は食べた後に寝ていた。よほど疲れてたんだなと思ったが、専

業主帰ってそこまで疲れるものなのかと疑問に思った。この時、時刻は七時半。俺はあと一時間半あるから何しようか悩んで、とりあえず遊びに行く準備をしに、自室へ戻った。

九時になった。俺は家の前に出て茜を待つことにした。準備をし終えたのが八時半くらいだったので（実際は三十分くらいで終わってたんだが、部屋の掃除をしていた。）、幾分か余裕があった。

待ち合わせが俺の家だと特に何も起きないが、他のところだと行く途中でいろいろと巻き込まれ、結果的に遅刻するのである。正直恨めしいぜ、この体質。

ケイタイを見てみると、九時十分になっていた。なのに、まだ茜が来なかった。

一体どうしたのだろうかと思い玄関を開けたら、茜が飛び出してきた。その時ちょうど俺は、茜が出てくるところにいたらしく、結果的に俺は茜を抱きしめる形となって受け止めた。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて。」

俺は受け止めた形のまま、茜に訊いた。だが、茜は全く話さない。どうしてだろうと一瞬思ったが、くっついてるのが恥ずかしいのだろうと思い、俺は離れた。だが、茜はなぜか残念そうな顔をしていた。もう訳が分からないぜ。

仕方ないので、俺は茜に「行くぞ。」と言って歩き出した。それを慌てて茜がついてきた。

俺が許される側のはずだよな、これ？

歩きながら、俺はそう思った。

幕間 八神つとむの災難な一日（後書き）

ま、幕間が続いてしまった！ど、どうしよう……。っというのは六割がた嘘です。頑張って更新しようと思います。

幕間 八神つとむの災難な一日その2

街を歩きながら、俺は茜に訊いた。

「で？どこに行くんだ？」

それを聴いた茜は、待つてましたと言わんばかりの勢いで話した。

「それはね！今すごい話題のショッピングモールだよ！！全五階建てなんだけど、一階一階にそれぞれちゃんとしたコンセプトがあるの！！」

俺ははしゃいでいる茜を見ないでこう言った。

「へエー。で、どこにあるんだ？」

「お兄ちゃん。さっきの返事にどうでもいいって感じがしたんだけど？・・・・・・ま、それはいいとして。どこって、鷹野町だよ。」

「鷹野町って、電車で三十分くらいのところか。ま、それならそれでいいか。」

場所が決まったところで、俺達はそこを目指して駅へ向かった。

何事もなく駅について、何事もなく電車に乗り、何事もなく鷹野町に着いた。ここまで何もないと逆に心配になるぜ。

そんな俺の心配を知らず、茜は「はやく、はやく！」と催促してきた。まったく、子供っぽいな、あいつ。とんだか兄というより父親のような感じになってしまったので、俺はそんな考えを頭から追い払い、茜と一緒に目的地に向かった。・・・・・・腕を組んで。

「ちょっと待て。」

「どうかしたの？」

「どうして腕を組む必要がある？」

その質問に茜は、

「迷子にならないためだよ。」

もつともな理由をこたえた。だが、俺はその裏に何か理由があるの

を感じた。けど、人の心なんて読めるわけないので、それで納得しようと思ひ、

「じゃあねえなあ。いいぜ。」

と答えた。それを受けて茜は、

「やったあ！」

と大はしゃぎだった。今日のテンションの高さは異常だな。何がそんなにうれしいのだろうか？

さて話が決まったので、俺達は再びショッピングモールへ行くことにした。

……結局、俺はまた面倒事に巻き込まれるわけだったが。

ショッピングモールに着いた俺たちは、人だかりとでかい看板に驚いた。

「『ミレントショッピングモール』？ここは鷹野町だろ？」

「お兄ちゃん、そこは問題じゃないと思う。」

しかし、結構人が多いなあ。これで知ってる奴と会ったら大変だな。そう思いながら、とりあえず中へ入ろうということになって、人だかりをかき分けて中へ入った。ただ、人だかりをかき分けて進んでいるうちに、「今日ここで撮影やってるらしいぜ。」「マジで！俺達も映れるのか！？」「それはわからねえけど、中に入ってみようぜ。」という声が聞こえた。

うつへえ、それは困ったなあ。

まあ、とりあえず中に入ってみた。それでも、人がたくさんいた。結構人気あるんだな、ここ。と思っていいたら、茜が俺の顔を覗き込んでこう言った。

「そんなことも知らなかったの、お兄ちゃん。」

俺は全体を見渡しながら、

「興味がねえから。」

と言ってその話題を終わらした。

「何を買った？」

「え？」

とりあえず休憩できるベンチがあったのでそれに座った後、俺は茜に訊いた。

「え？って、何か買う用事があってここに来たんじゃないのか？」

「そ、それはそうなんだけど……今買いたいもの特にないし……」

こんにやろう、ただの冷やかに俺まで巻き込んだのか？そう思つて怒鳴ろうとしたら、

「あ！」

と言つて、俺の手をつかんでいきなり立ち上がった。なんだなんだ？

「あつたよ！買いたいもの！行こう、お兄ちゃん！」

「お、おい！ちよつと待て！！」

という感じで、俺は妹に振り回されていた。こんなだったら、たかあき町でそこらへん散歩してればよかったぜと、素直に思った。

で、着いた先が、

「ここだよ！」

「アクセサリー店？ペンダントとか買うのか？」

結構有名なアクセサリー店だった（俺は知らなかったが）。

俺の言葉に、茜は頷いてこういった。

「ペンダントじゃないんだよ。ここじゃなきゃ買えない限定モデルのブレスレットだよ。」

どうして限定という言葉に弱いのだろうか。俺はそれをたびたび疑問に思ってしまう。

「じゃ、さつさと買つて帰ろうぜ。」

「お兄ちゃん、これ買つても私の買いたい物はまだ終わらないからね。」

「うわ。」

というやり取りの後、店の中に入った。

で、店に入つて分かったこと。

女性客が多い。カップルも少なくはないが、女友達同士で来てる方が多かった。

俺は居心地の悪さを感じながら、茜に手を引かれながら店の中を歩き回った。

「あれ〜？どこにあるんだろう、限定のブレスレット。」

「店員に訊けばいいじゃないのか？」

「でも誰が店員なんだかわからないんだけど。」

「そうなのか？」

俺はそういいながら、あたりを見渡してみた。そして、

「茜、こっち来い。」

「え？どうかしたの？」

俺は茜の手を引きながらある方向へ向かった。その先にいたのは、

「すみません。」

「ハイ、なんでしょうか？」

「この店限定モデルのブレスレットはどこに売っているんですか？」

「あ、はい。こちらになります。」

そう言いながら、店員さんは俺達を案内してくれた。

案内されている間、茜は俺に訊いてきた。

「どうしてあの人が店員さんだと分かったの？」

「ん？どうしてって、商品の補充とかやってただろ？」

「そうは見えなかったけど……」

「よく見りゃ、ちゃんとやってたんだよ。」

と言っていたら、

「こちらがその商品です。」

と言って、その店員さんは去っていった。俺たちは店員さんが示した商品の前に立ち止まって見た。

「これこれ！これなんだよ！！」

そう指さしながらはしゃぐ茜。ふん。デザインはいいんじゃないのか？俺はわからんが。

茜は、買おうとして値段を見たらしく、驚いてこう言った。

「え！五千四百円！？うつそ、私持つてないよ。」

そう言いながら落胆する茜を見て、俺はどうしようか悩んだが、
「すみません。」

「はい。なんででしょうか？」

「これ一つください。」

「かしこまりました。」

店員さんをつかまえて、そのブレスレットを買うことにした。あゝあ、またすごい出費だな。まだ大丈夫だろうけど。そう思いながら俺は茜を連れてレジのところへ行き、そのブレスレットを買った。金は俺が払ったぜ、もちろん。

「ありがとうございます。」

そう言われて店を出た俺たちは、近くにあったベンチに座ることにした。

「ほれ。」

「あ、ありがとう。」

俺がブレスレットを渡すと、茜はまだ現実に戻ってきていないのか返事が上の空だった。

「どうしたんだ？欲しかったものじゃなかったのか？」

「うつん！！違うの！ただ………」

「ただ？」

「お兄ちゃんって、人におごるとか絶対にしないのかと思ってた。だつて最近バイトでもらったお金、自分のためにしか使っていないでしょ？」

その答えに俺は苦笑しながら、

「お前、知らなかったのか？俺、中学二年のころから小遣い止められてたんだぜ。そのうえバイトして自分の小遣い稼げ、って言われたんだ。」

と答えたら、またも茜は驚いた。

「ええ！そんな話聴いてなかったんだけど！？私普通にもらってるから、お兄ちゃんはもらった上にバイトで稼いでるのかと思った！

！
」

「だから、中二と中三のころは大変だったぜ？何しろ、買いたいものは全く買えない。だから、俺はずっと見てるだけだったんだ。欲しいものとか。」

「ごめん。」

「謝るなよ。で、話の続きだが、お前がこれを見て物欲しそうにしてたからついそんな時のことを思い出してな、そんな思いしてるんだったら買ってやった方がいいと思ったんだ。それに、今日はお前のご機嫌取りに来たようなものだしな。」

俺がいつもの調子でそう言うと、茜は吹き出した。

「プツ！最後の言い方はないんじゃない！？・・・・・・・・・・でも、」

「でも？」

「ありがとうね、お兄ちゃん。」

その言葉を言うときの茜は、とてもうれしそうだった。良かったな、まったく。

それで、他の買い物をするかどうか話し合ったんだが、その前に昼食を食べようという話になった。

幕間 八神つとむの災難な一日その2（後書き）

最近、短編小説を書こうかな？と思ったりしますが、書くかどうか考えていません。なにぶん、更新が忙しいので。

短編小説を読みたいと思う人は、とりえあえずコメントをください。

第四話　へたな出会いほど、よく巻き込まれる（前書き）

幕間の途中ですが、本編をどうぞ。

第四話　ベタな出会いほど、よく巻き込まれる

「お疲れさましたー!!」

二つ目のバイトを終えて俺は、帰路についた。ただ、今日でこのバイトは終わりだ。

理由？工事が終わったからだよ。工事のオツチャン達が名残惜しうに、「次の工場所決まったら連絡するからな。よかつたらまた働いてくれ。」と言ってくれた。……これが人情だよな。嬉しくなるぜ。しかし、このバイトが終わったという事は、俺の財布事情が厳しくなるといふ事につながる。次のバイトが見つかるまでは、喫茶店だけで稼ぐしかないな。と考えながら自転車をこいでいると、交差点から人が飛び出してきた。

「うお!!」「きゃっ!!」

キキ――！！！！

あつぶねえじゃねえか!!ブレーキかけるのが遅かったら事故つたぞ、今の!!と思いいながらぶつかりそうになった人に、

「なんで飛び出してきたんだ!!」

と言いながらそいつを見た。そいつの恰好は、まず普通の人はそんなに着る機会がないであろう高級そうなドレス。どんなやつかって？知らん。次に顔を見てみると、結構端整な顔立ちで髪はややロング。……最近、どうしてこつても美人と出会うのかね？ふと疑問に思ったが、今はそれどころじゃない。なので、そいつの言葉を待っていると、

「いたぞ!!あそこだ!!」

と声がした。もしかしてこいつ、追われてる？そう思ったのも束の間、そいつが突然俺に迫ってきて、

「す、すみませんが、助けてくれませんか!!!!?」

と必死にお願いしてきた。それに対し俺は、断ればいいものを、「いいぜ。後ろに乗れ。とりあえず、あいつらをまくからな。しっかり掴まれ。」

と言って引き受けた。どうやら俺は、巻き込まれたらきちんと解決するまでやり通す性分のような。………今日は家に帰れるかな？と思っていると、

「は、はい！！お願いします！！」

と言って、俺の自転車の後ろの方に乗った。それを確認してから、「とばすぞ！！」

と言って、俺は自転車を本気でとばした。後ろの奴は「キヤア——！！」と言いながら、必死に俺にしがみついていた。………後ろに人を乗せるのは初めてだが、結構難しいな、フランスとるの。そう思いながら、ここから近い公園までこいでいった。

「いないだと！！？くそっ！お嬢様はどこにいったんだ！！？」

「さっき、誰かとぶつかったみたいだが………もしかして。」

「きつとそいつがお嬢様をさらったのだろうな。」

「探せ！！」

と黒服の連中が勘違いしながら探していた。

公園にて。

「あの！助けてくれて、ありがとうございました！！」

「あ、ああ。別にたいしたことはしていないさ。………それより、どうするんだ？」

「そ、そうですね。何処かに匿ってもらえばいいのですけれど………」

そいつは考えながらそう言った。今更だが、こいつ誰だ？恰好から察するに金持ちの部類だと思うんだが………と考

えていたが、

「おい。」

「は、はい！」

「どこでもいいんだな？匿ってもらうなら。」

「ええ。それからは何としますから。」

「どうやらこいつは当てがあるらしい。それなら……………」

「ちよつと待つてろ。」

「え？」

俺はケイタイで、ある奴に電話した。

ブルルルルッ！！ピッ！！

『応、どうした？こんな時間に？』

「ああ、ちよつとな。今からお前んとこ行くけど、大丈夫か？」

『そりゃ、急だろ。いくらなんでも……………もしかして、何かあったのか？』

「察しがよくて助かるぜ。事情はそっちに着いてから話す。実は俺もよく解つてないからな。」

『わあつたよ。部下もいるから早く来い。尾行されるんじゃないぞ。』

「分かった。」

と言つて電話を切つた。さてと、

「行くぞ。乗れ。」

「え？あの、どこに行くんですか？」

俺がいきなり乗れ、と言つたのに驚いたのか、そいつは不思議がつていた。それを無視して、

「匿ってもらえる場所だ。さつさと乗らないと捕まるぞ？」

と言つたら、そいつは驚きながらも、後ろに乗ってくれた。

「またとばすからな。しっかり掴まっとけよ。」

「はい！！！」

それを合図に、俺は再び自転車をこぎ出した。どうでもいいことだ

が、しがみつく、という行為は胸が当たることを意味している。それに気付かないのは、必死だったからなのだろうか。

4 - 2 逃走組

「おかしい。さっきまでここにいたはずなのに……………」
「」

「もしや、我々に気づいたのでは？」

「あり得るかもしれん。……………」しかし、レミお嬢様にも困ったものだ。」

「隊長。これからどうしますか？」

「くまなく探せ。ただし、ここは『本宮』の場所だからな。派手に動くな。」

『ハッ！！』

「しかし、お嬢様と一緒にいる奴は、一体何が目的なんだ？」

「着いたぜ。ここだ。」

二人乗りって、体力スッゲエ使うんだな。昨日と同じ状況になりそうだ。と思っていると、

「こ、ここですか……………」

と、そいつはちよつと怯えながら言った。まあ、無理もないか。なんせ……………」

「ああ。そうだ。」

「『矢木組』って、どう考えてもヤクザの人たちのところですよね！？」

そう。俺達の目の前に建っているのは、矢木組と看板が掛けられている門がある家だ。看板に書いてある通り、ヤクザ一家が住んでいるところである。（部下も住んでいます。）ちなみに矢木組は、この町のヤクザを取り仕切っている一角だ。

「え〜と、インターフォンは、と……………」

「し、知り合いのですか？」

「ここか。久し振りだから忘れてたな。……………」ああ。昔、

ちよつとな。」

ピンポンー！！

『誰だ？』

「俺だよ。さっき電話で話したから、話は通つてるはずなんだが。」

『あ、兄貴じゃないですか！！ひさしぶりっす！！』

「分かったから開けてくれ。」

『わ、分かりました！！』

と言うと、門の扉が開いた。その時、

「・・・・・・・・あなた、何者なんですか？」

と訊いてきたが、

「ただの高校生だよ。」と言って俺ははぐらかした。

「よう、久し振りだな。こんな夜分に悪いな。」

『お疲れ様です！！』

「す、すごいですね・・・・・・・・」

とヤクザの雰囲気にもまれそうになっていたが、大丈夫だったようだ。大した奴だな。

と玄関まで歩いている途中に、

「兄貴！自転車はどうしました？」

「兄貴！その女の人どうしたんですか？」「まさか、さらってきたんすか！？」

とか言ってきた。

「自転車はいつものところ。こいつは追われてたから助けただけ。それ以外はないからな。」

全く、変な勘繰りするなつてのに。と思いながら歩いていると、玄関に着いた。

「中に入ってもいいんでしょうか？」

「ここはすでに敷地内だ。今更どうこう言ってんじゃねえ。」

と言いながら、俺はとりあえず電話した奴のところに行くことにした。

幕間 八神つとむの災難な一日その3

そして、今俺達はジャンクフードの有名チェーン店で昼食を食べていた。

「それで？これからどうするんだ？」

「うゝん。特に決めていないんだよねゝ。」

「なんじゃそりゃ。」

「どうしようっか？」

「よし帰ろう。」

えゝという声を無視して、俺は席と立とうとしたら、茜が何かに気づいたみたいだった。

「お兄ちゃん。あれ。」

「ん？」

「もしかして、テレビ番組の撮影なのかな？カメラとか来てるよ。」

そう言われて、俺も茜が指をさした方向を見た。そこには、確かにテレビ関係者がたくさんいた。どう見ても撮影が目的で来ているみたいだった。

「・・・・・・ハア。」

「どうしたの、お兄ちゃん？テレビ関係者だよ！テンションあがらないの！？・・・・・・って、ゴメン。お兄ちゃん、嫌いだっただよね。」

「ああ。」

まったく。ただでさえ嫌いなのにいつきの野郎。勝手に入学させやがって。

そのことを思い出すとまたイラついたので、俺はいったん忘れることにして、茜に訊いてみた。

「どうするんだ？撮影を見てくのか？」

「うゝん。どうしよう？見たいのはもちろんあるけど、お兄ちゃんは見たくないんでしょ？」

「見たくはないが問題はない。見たからと言って、体調が悪くなったりはしないからな。」

「じゃあさ、観に行こうよ!」

ということで、俺達は撮影の見学に行くこととなった。

幕間 八神つとむの災難な一日その4

とにした。

一か所目。

「ここつて、婦人服売り場だね。」

「次行こうぜ。」

二か所目。

「ここは食堂がたくさんあるね。」

「カメラは見当たらないな。」

それから色々と見て回って、七か所くらいのところでカメラを発見した。その場所は、何かのイベントが行われる場所だった。

「なにがあるんだろう？」

「さあな。俺にとつちやどうでもいいが、誰かに訊いたらどうだ？
そう言ったら、茜は人だかりの一人に話を聴きに行った。茜に見た目はひいき目なしに可愛いので、話しかけられた奴はやたらテンションが高くなっていた。

一通り話を聴いた後、茜はその人にお礼を言って戻ってきた。

「どうだった？」

「なんでも、今日はここの紹介でタレントが来るんだって。しかもお兄ちゃんと同じ学校の人なんだって。」

「そうなのか。」

ま、知られていないから大丈夫だろうな。

そう思いながら、俺は茜と一緒にイベントを見ることにした。

『これから、ミレントショッピングモールでのイベントを始めたい
と思います！！』

「『いえーーーーーい！！』」

「うつせえな。」

「いいじゃん別に。私はこれが好きだよ。」

イベントが始まって、俺達は後ろの方で見ていた。だから、全体を見ることができた。

「それにしても、うちの学園の生徒が出てるだけなのに、どうしてこんなに人がたくさん来るんだ？」

俺は今更ながらそう思った。そしたら、茜が驚いてこう言った。

「え！？お兄ちゃん、自分の通ってる学園の知名度を知らないの！？」

「バツ！人前でそんなこと言うんじゃない！！」

「あ、ごめん。……じゃなくて！あの学園の生徒のテレビ出演率って結構高いんだよ！！しかも！その中のアイドルって呼ばれてる人たちには、まだ生徒なのに結構なファンがいるんだよ！熱狂的な人とか！」

「へえ。」

「お兄ちゃん！？」

「ごめん、ごめん。しかし、熱狂的なファンか……。」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

俺が考え込んだのが気になったのか茜が聴いてきたが、俺はなんでもないと行ってステージの方を見た。

茜も、それにつられてステージの方を見た。ステージでは、出演者の紹介をしていた。

『さて、それでは出演者の紹介をしていきたいと思います！！まずは、……』

それを聴いてる間、俺は考え事をしていた。

熱狂的なファン、か。俺にはどうしてそんな奴ができるのか分かってなかった。俺だったら、ファンより敵のほうができると自負できる。ま、それは関係ないが。

ただまあ、熱狂的なファンが何をやらかすのかわからないのは確実だろう。となると、誰かが止めないといけないんだろうな。

果たして止められる人がこの中にどれくらいいるのだろうか？そ

う考えていたら、茜が俺の裾を引っ張ってきこった。

「お兄ちゃん。あの人だよ！あの人！」

そう言われて、俺は指を差された方向を見た。

そこにいたのは、雰囲気的にはオドオドとしていて、スタイルが
いい人だった。ただ、その人に対しての声援がすごかった。もう会
場に響かんばかりの声。うるさいくらいありやしない。

でも、あいつの顔、どっかで見たことが……。気のせ
いか？

そう思いながら見ていたら、俺はイライラしてきた。

だって、あいつ緊張してるのかろくに話せていないんだぜ？そり
やイライラするって。

そう思いながら見てみると、俺はふと視界の端に気になるやつを
見た。

「なにやってるんだ？あいつ。」

と俺はそいつを見ていった。そいつは、あたりをきよきよと見
渡していた。

「え？どこどこ？」

俺の言ったことが気になったのか、茜が探した。

「ほら、あそこにいるやつ。なんか挙動不審じゃね？」

仕方がないので、俺は指をさした。

「え？……………うん、そう？」

俺が指をさしたやつを茜も見たが、どうやら何も気づかなかった
ようだ。ただ、俺にはよくわかる。あいつはここで、何かをやらか
す気だ。

なんでわかるのかって？雰囲気だよ、雰囲気。それに、あたりを
見渡してるのが怪しすぎるだろ。

俺はどうしようか考える前に、そいつに近寄っていた。やめれば
いいんだが、どうにもできなかった。

「これで……………」

「おい、そこのおっさん。」

俺が目をつけた男（推定四十歳くらい）が何やら呟いていたが、気にせず声をかけた。

「!?!」

男はびっくりして振り返って俺を見た。その顔には、驚きと焦り、怒りと独占欲が見えた。感情丸出しだな、おっさん。

俺は呆れながらおっさんに対してこう言った。

「今あんたがやろうとしてることは、やめた方がいいぜ。というか、止める。何する気か知らんが、ここで騒動を起こしても誰も得はしねえぞ。」

その言葉に、さらにおっさんは驚いた。

「な、ななな何を言っているんだ！わた、わた、私は……………」

俺はそれを無視して、

「じゃ、隠してるもの、出したらどうだ？長さによっては逮捕されるぞ、あんた。」

隠してるものを出せと言ったら、

「!?!な、なななな……………!?!」

なんでわかったんだ!?!的な顔をしておっさんが驚いていた。やっぱりわかりやすいなあ。

すると、そのおっさんが急におとなしくなつて、不気味な笑い声を出した。

「ふっふっふ……………こうなったら……………」

「こうなったら仕方がない。お前を口封じのために殺すってか？ありきたりすぎて馬鹿らし。おとなしく隠してるものを出せと言ってるだけだろ？なんでそんな簡単なものができないんだ？」

「!?!?!」

「いや、今更説明とか要らないだろ。小悪党すらなつてねえぞ。おっさんが言おうとしたことを言ったのがそんなに驚くようなものなのか？たいしたことじゃねえだろ？」

「く、くそ……………!?!」

おっさんがやけくそになったのか、突撃してきた。たいして、俺は突撃してきたおっさんの顔面のところにこぶしを突き出したから腕を引いて、

「じゃあな。恨み言は警察署で言ってくれ。」

思いつきりこぶしを突き出した。その結果。

バキッ！ドサッ！

と会場全体に響く音と倒れる音がして、集まっていた人が全員俺たちの方を見た。

俺はその視線を受け慣れているのでケイタイを取り出し、電話した。

「よ、菅さんか？実はちょっとしたもん捕まえたからさ、とりあえず、パトカーをミレントショッピングモールに寄越してくれない？・・・ああ。まだ確認はしていないけど。・・・ハア！いいから、さつさと来い！とりあえずは縛つとくから。じゃあな！」

そう言つて電話を切つた後、俺はのびているおっさんを担いで会場を後にした。

「・・・えゝ、ちょっとしたハプニングはありましたが、続けますよ！」

俺が出て行つたあと、司会の人がそう言つて場を何とかまとめた。

「お兄ちゃん・・・またなの？」

茜は、それを見てそう呟いた。

「まったく、なんだよいきなり・・・って、おい！こいつのことか！？さっきの電話のやつはー！」

「ん？あ、ああ。そうだぜ。こいつ、誰だ？めちゃくちゃ弱かったんだが。」

「弱かった、って。そりゃ、あの町にいりゃあ弱いとを感じるだろう。だがな、こいつは連続通り魔事件の犯人で、少なくとも十件はやっているんだ。この町に潜伏していたのか、こいつ。・・・」

ていうか、お前は どうして こいつを捕まえたんだ？」

「どうしてって、勘だ、勘。あと雰囲気。」

「お前のそういうところ、素直に尊敬するぜ。」

俺が根拠を言ったら、菅さんは苦笑しながらそう言った。すまねえな、菅さん。

「じゃ、俺はこいつを連れてくわ。お前さんは来なくていいぜ。それと、感謝状はいつも通りだな？」

「当たり前だ。いらねえよ。」

そう言って、菅さんは気絶しているおっさんをパトカーに入れて出発した。

俺は終わるまで暇潰そうかと思ったら、

「お兄ちゃん。帰ろう？」

「茜？」

茜がいた。

「どうしてここに？」

「だって、あの後つまんなかったんだもん。それに、お、お兄ちゃんが心配だったし……。」

そういう茜はなんだか恥ずかしそうだった。どうかしたのだろうか？

ま、気にしても仕方がなかったので、

「じゃ、帰るか。」「うん!!」

俺達は帰った。こうして、俺の一日が終わった。

（その裏側にて（イベント終了後））

「もしもし警察ですか！さきほど少年が暴行行為を行っていたのですが……え？殴られた人が連続通り魔の犯人だった？……ハイ、ハイ。そうだったんですか。ありがとうございます。」

「あ、あの、先ほどは一体何があったのですか？マネージャーさん。」

「ええとね、警察にさっきのことを言ったのだけど、殴られた人が連続通り魔の犯人だって言ってたのよ。しかも、凶器が一致したらしいんだって。」

「え？ということは……」

「私たちはあの子に助けられたってことね。ただ、その子の住所を訊こうとしたらダメと言われたわ。」

「どうしてですか？」

「どうも、彼の住所とかそういう類の情報は規制されてるみたいだわ。もしかして、とんでもない子かも知れないわ。」

「それはどうでもいいですけど、お礼ぐらいは言いたいですね。」

「そうね。ま、今日はお疲れ、光。」

その数日後、彼女は再び彼と遭遇することになるのだが、それは誰にもわからないことだろう。

幕間 八神つとむの災難な一日その4（後書き）

次からちゃんと本編をやります。

4 - 3 頭 篠宮妹（前書き）

すみません。たびたび謝ってすみません。話がすっぽり抜けていました。これからもそいう指摘がございましたら、よろしくお願いします。

4 - 3 頭 篠宮妹

「よう、頭^{かしら}。久し振りだな。」

「久し振りだな、つとむ。いや、皇帝と呼ぶべきか？」

「普通に呼んでもらって構わない。さて……………今日はありがとな。」

「いいってことよ。しかし……………この女は誰だ？」

と、頭は俺が連れてきた奴を指差して、訊いてきた。

「俺も知らん。」

「ここに来るまでに聴けたんじゃねえのか？」

「こぐのに必死だった。」

「そういや、そういう奴だったな。」

と言つて、呆れる頭。追われてるのにそんなこと訊けるか。気を取り直して頭が、

「んで？あんた誰だ？どうして逃げてたんだ？」

と訊いた。そいつは、ちよつと怯えながらも答えた。

「私は篠宮レミと申します。年は今年で十六です。逃げていた理由はですね……………」

「ああ！」

「な、なんですかっ!？」

こいつ——篠宮レミ——の名を聴いた時、俺は驚いた。

だつてそうだろ？まさか……………

「なあ、あんた。」

「なんですか？」

「いや……………もしかして、スミレ学園の二年に姉がいるだろ？」

「そうですけど……………そういえば訊くのを忘れてましたね。あなたの名前はなんですか？」

「公園にいた時に訊けたんだろうが……………それは置い

ておこつ。俺の名前は八神つとむだ。年はお前と同じだ。ちなみに、お前の姉と一緒にの学校に通っている。」

「八神、つとむさんですか。・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？姉とは学年が違うのに、どうして知っているのですか？」

「ちと、変なことに巻き込まれたただけだ。」

「？」

俺が何を言ってるのか分からない、って顔をしているが、もう無視して話進めるか。

「んで？どうして逃げてたんだ？まさか・・・・・・・・・・パーティに飽きて逃げてたんじゃねえだろうな？」

俺がそう訊いたら、そいつ――面倒だから篠宮妹にでもしとくか――がギクツッ！！とわかりやすい反応をした。・・・・・・・・・・
凶星かよ。

「え！？べ、別に、飽きて逃げたわけじゃありませんよ！！？ただ・・・・・・・・」

「ただ？」

「つまんなくなっただけです！！」

と胸を張った。・・・・・・・・・・あほか、こいつ。頭かしらを見ると、「面倒なことしてくれたじゃねえか。」と若干怒り気味。・・・・・・・・・・

・・俺も悪かったと思ってる。

でもまあ、こうなったのも仕方ない。とりあえずは・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

「こいつ、どうする？」

「俺に振るな。手伝ってはやるが、それ以上はしないぞ。」

分かってるよ、たくつ。こんな奴をどうすれば・・・・・・・・・・
・・

そこで、俺はこいつと似たような境遇の奴を唐突に思い出した。こいつの力を借りるしかないか。・・・・・・・・・・借りた後に何要求されるかわかんねえけど。

そして俺は、電話した。

ブルルルルルルッ！！ ピツ！！

『何？こんな時間に？僕眠いんだけど。』

「いつきか！それはすまんが、ちと厄介ごとに巻き込まれちゃったから助けてくれ！」

『………君は本当によく巻き込まれるけど、僕に頼るつてのは初めてじゃない？何があつたの？』

「ああ。実はな………」

（説明中）

「………という訳なんだ。」

『ふーん。それはまた変なことに巻き込まれたね。………さて、どうしようかな？』

「やっぱそうなるか。分かつてはいたんだ。こいつがわざと躊躇うなんてことは。」

「………仕方ない。俺としては使いたくなかった『カード』を使うことにした。」

「やってくれたらそうだな………お前が暇な日に何処か一緒に行つてもいいぞ。」

『本当！！？………うーん、それでもどうしようかな？』

「こいつ………。俺にまだ何か要求するつもりか！！俺としては最大限の譲歩なんだが、これ以上何を要求するつもりだ！！？」

「？」

『うーんそうだね………退学しないこと。それぐらいかな？』

「いつきの要求としてはずいぶん軽いな。もうちょっと重いもんになるかと思つてたんだが。」

「それぐらいならいいが。」

『え？退学しないんだよ？これから三年間、君が嫌いなあそこにい

ることになるんだよ?」

「ま、そうだが、もういいさ。退学するのは諦めたから。」

『君が『諦めた』と言うのは珍しいね。どうしたんだい?』

「うっせ。嫌いでもなんでも、あそこ退学したら他の学校に行けるかどうか判らないからな。だったら、あそこを卒業してテレビ関係のところ就職しなきゃいいだけだと思ったただけだ。」

実は、そんなことは前々から考えてたことだけだな。とは言わない。なぜなら、最初の頃は、まだ退学したいと本気で考えていたからだ。今日の騒動で、退学するのは無理そうだから前々から考えていた、これでいくしかないと思ったただけだ。

俺の言葉を聴いたときは、

『……嬉しいよ、つとむ。君が退学しないって言うてくれるなんて。僕が巻き込んだのに、君はいつも僕の事を支えてくれるよね。』

「?何を考えてるのか知らんが……助けてくれるのか?」
『いいよ。助けてあげる。それに、君のその状況を打開する策を教えてあげるよ。』

「本当か!?!マジで助かるぜ!！」

と、俺がお礼を言つと、

『いいさ。僕の方がいつも君に助けてもらっているからね。そのお礼だよ。……ただ、約束は忘れないでね?』

と言つてきた。言つた手前、破棄するつもりはないので、

「忘れるかよ。俺が忘れたことがあつたか?」といったら、

『あるよ。確か……小学二年の頃だったかな?』
と返された。

「スマン。ただ、あれに関しては、お前がややこしい所を指定したのが悪いんじゃないのか?」

『……とにかく、策を教えてくれ。』

『分かったよ。いい、策つてのはね……』
『……』

（説明中）

『・・・・・・・・・・・・・・・・って感じ。できる？』

「簡単じゃねえか、んなもん。・・・・・・・・・・それで行くか。」

『了承は取った？』

「今から取る。じゃあな。」

と言つて俺は電話を切った。そして、

「頭かしら、篠宮妹、これからやることに説明するぞ。いいか・・・・・・・・・・」

いつきの策を説明した。説明を聴き終えた頭は、

「いいんじゃないか？俺の部下たちにも手伝わせてやるから、きちんとやれよ？」

と言つてきた。どうやらこの策に乗り気のような。・・・・・・・・ホン
トにすまねえな、頭。

4 - 4 涙 準備（前書き）

さて、割り込み投稿しなくてすみません。分かり辛かったようで、
本当にすみませんでした。

4 - 4 涙 準備

一方篠宮妹は、

「なんでそこまでしてくれるのですか？これは私のわがままなのに。」

と訊いてきた。なんで、って訊かれてもな………、

「俺が巻き込まれたものは、ちゃんと解決したいと思っているからだな。それに、」

としか言いようがないだろ。そう言われて驚いたのか、泣きそうな顔をしていた。どうしてこうも女って、泣きそうになるのがはやいんだろうな？そう思いながら、続けて言った。

「そんなになるまで我慢するもんじゃねえよ。行きたくないなら堂々と言えばいいだけだ。俺の身近な奴は、お前より『自分』を持ってるぞ？」

その言葉で、篠宮妹は泣いてしまった。………悪いこととはしてないはずなんだが。

「なんで泣いてんだよ？」

「だ………だって、い、今まで………ヒック………
・そう言ってくれた・

………人は、いません………でしたから。」

と泣きながらも言った。余程気持ちを溜め込んでいたのか、こいつ？と思いつつも、泣き止むまで俺達は待った。

二分後、篠宮妹は泣きやみ、俺達はいつきの策を実行すべく準備していた。この時の時刻は午後十一時二十分。もうこうなったらこの家に泊まるしかない。そう考えて俺は、自宅に電話した。

『はいもしもし、八神ですが。』

「茜か？」

『お兄ちゃん！？ちよつと今どこに居るのよ！！？心配したんだからね！』

「悪いな。今日は訳あつて家に帰れないから。それで、知り合いの奴の家に泊まるから。」

『なんで帰つてこれないの！？お願いだから帰ってきてよ！』

「その代わりと言つちやなんだが、明日一緒に行つてやるよ。ドラマの撮影の見学に、な？」

『うう．．．．．本当だよな？信じていいんだよね？』

「当たり前だ。明日の朝には帰るからな。」

『．．．．．分かつたよ。私、信じるからね。』

「応。」

と言つて電話を切つた。さてと、準備の続きでもしないとな。

4 - 5 作戦決行前 待ち伏せ（前書き）

謝罪の言葉ばかりだったので忘れていたのですが、四十話超えていました。早いですね（笑）。

4 - 5 作戦決行前 待ち伏せ

「兄貴！！決まっていますぜ！！」

「そうか？」

「そうつす！！これならバレません！！」

「そうか。」

「これ持つてください！！」

「ああ、それもあるだな。」

こんな感じで、俺は準備をしていった。何の準備かって？そりゃあ、

「これでOKつす！！」

「そうか・・・・・・・・・・野郎共！！準備はいいか！！」

「ウイッス！！」

「今から俺の事は『若頭』だ！いいな！！？」

『若頭——！！！！』

俺がここの若頭になる準備だ。まあ、話を順に追っていくとだな・

・・・・・・・・・・

『つとむがその組の若頭になって、その追っている人達——SPの人達——をそこで足止めしておいて、頭とその部下数名は、彼女を乗せて僕の家まで送るって感じ。』

「途中でばれるんじゃないのか？」

『それは大丈夫だよ。君たちの場所はもうすぐばれるだろうけど、そこから先はそこに留まっていると思わせればいいから。』

という感じだ。俺としても簡単な方が楽だから、この策は賛成だった。それで、話を戻すと、

「立派な若頭に見えるぜ、つとむ。跡取りとして欲しいくらいだ。」

「そんなこと言うんじゃねえよ、頭。他のやつらの方が適任だろ。」

「・・・・・・・・そろそろ出発しないと駄目じゃないか？」

「分かってるよ・・・・・・・・・・あの子がお前に挨拶したいらしいんだが、どうする？」

「いらね。どうせ明日になったら忘れるだろうから。」

「そうか・・・・・・・・・・頑張れよ。」

「応。」

そう言つて、頭は車の方に向かった。・・・・・・・・さて、俺達はやることをするか。

「ここか・・・・・・・・・・。」

「どうしますか？隊長。」

「・・・・・・・・しかし、なぜこんなところに逃げたのだろうか？」

「分かりません。しかし、」

「分かつてる。・・・・・・・・まずは正面突破だな。全員、玄関に集合させる。」

「分かりました。」

「ようやく見つけましたよ。レミお嬢様。」

そう言つて男は、『矢木組』と看板がある門の正面に立った。

4 - 6 一方そのころ 車内での会話

「大丈夫でしょうか？」

「心配はいらねえよ。あいつらだつてヤワじゃねえんだからな。」

車の中で、頭かしらとレミはそんな会話をしていた。

「それに、心配するならお前さんを追つてきた奴らにするべきだな。」

「？どうしてですか？」

「つとむだよ。あいつはこの町、いや、周辺の他の町でもか？では最強の部類なんだよ。というか、あいつと喧嘩したら勝てる奴はいないな。少なくとも、本宮のSPたちとあいつの親父以外では負けないな。」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。俺らがあいつと会ったのはあいつが小三の頃だったが、その時にそいつが俺達の喧嘩に巻き込まれてよ、」

「え！？大変じゃないですか！？」

「そうだと思うだろ？けどな、あいつは俺達の事情も知らずにそのまま、手当たり次第に人をブツ飛ばしまくったんだよな。それから俺達は、喧嘩していたことも忘れてあいつに立ち向かったんだが、」

「返り討ちにあつたんですか？」

「そうさ。小三のガキ一人に全滅させられたよ。その時にそいつは『こんなクダンネエ喧嘩するんだったら、ちつたあ町の不良ども大人しくさせるや。』と言つて立ち去って行つたんだ。」

「随分キザッぽいですね……。」

「そうだろ？けどな、この町では不良もヤクザも強い奴の元にくつてのが、暗黙の了解なんだよ。だから、そいつを調べてみたんだが驚いたぜ。まだ小三のはずなのに、この町の半分近くのグループが、あいつに負けてたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの人は何者ですか？」

「さあな。・・・・・・ところで、話は変わるがあんた、つとむに一目惚れしたんじゃないか？出発する前にあいつの事、熱っぽい目で見てただろ？」

「！！？な、なに言ってるのですか！！？そ、そそそ、そんなことありません！！」

「ふん。ま、いつか。どうせもう会えないだろうからな。」

「え？」

「どういう意味だか訊こうとしたら、

頭。^{かしら}着きました。」

「分かった。・・・・・・さてと、降りろよ、嬢ちゃん。」

「は、はい。」

「インターフォンを鳴らして、自分の名前とつとむの名前を出せばいいだけだ。じゃあな。」

「そう言って車を出そうとしたら、

「あ、あの。この度は本当にすみませんでした。そして、ありがとうございます。」

「と言っってお辞儀をするレミがいた。

「これに懲りたらもうこんな真似すんじゃないぞ・・・・・・と言いたいところだが、無理して溜め込むんじゃないよ。」

「頭がそう言った後、車は走り出した。

「残されたレミは、言われたとおりにインターフォンを鳴らして、家に入れてもらった。」

4 - 7 若頭 黒服（前書き）

2万PV行きました！！正直驚きを隠せません。

4 - 7 若頭 黒服

さて、時を戻して車が矢木組を出発して数分後。残った俺たちは、いつ来られても良い様に準備していた。その途中で、

ピンポンー！！

とインターフォンが鳴った。それを聴いて俺はまず、部下数名を玄関（の様な門）に行かせ、相手の動向を他の奴らに見張らせた。

「あんたら、なにもんだ？この町では見かけねえ顔だが。」

「ここに一組の男女が来なかったか？片方はドレス姿なんだが。」

「知らねえよ。ここには誰も来てねえぜ。人違いじゃねえのか？アア！？」

「本当かね？」

「んな奴ら知らねえよ。っていうかよ、もし知ってたらどうするつもりだよ？」

「ふむ。この家を搜索する。」

「ふざけんじゃねえ！！なんでお前らに勝手に荒らされなきゃいけねえんだ！！」

「そうだ！！ここは俺達の家だ！！」

「隊長。この者たちをどうしましょうか？」

「やんのかおめえら？上等じゃねえか！」「こんな奴らに荒らされてたまるかよ！」

「……………仕方ない。君たちを倒して勝手に上がるとするか。」

と言って、双方ともにやろうとした時に、

『やめろ、馬鹿ども！！！！』

と言いながら、俺は門まで歩いて行った。その時に、俺と一緒にいた奴らもついてきた。俺の登場に驚いたのか黒服の一人が、

「君は？」

と訊いてきた。

「俺は矢木組若頭の矢木勉だ。あんたらがどこの誰だかしんねえが、うちの組に何の用だ？」

とっさに思いつかなかったたので、名前は自分を使った。正直、他になかったのかと思う。

「そうか。．．．．．ところで、君のお父さんはどこにいる？話をしたいんだが。」

「悪いが、頭は今、他の組達との話し合いに行っている。だから、この場合は若頭である俺が話を取り仕切ろう。．．．．．それで？何の用だ？」

「いや、何、ちょっとした人探しだ。この娘が男と一緒にここに来たらしいんだが．．．．．知らんかね？」

と言って俺に写真を見せてきた。それを見てみると、あいつの制服姿が写っていた。どこの学校だ、ここは？と思ったが、顔には出さずにこう答えた。

「知らねえな。俺はあんたらがここに来たからって起こされたんだ。お前らが無断で侵入しようとしている、と言われてな。」

そう言ったら、そいつを含め、黒服の奴らはやや驚いたみたいだが、「ここに来たって言う情報があるんだ。悪いが、無断でもなんでも調べさせてもらうよ。」

と言って入ろうとした。だが、

バン！！

「勝手に入るんじゃないやねえ、って言うてるだろ？入っていいのはな、俺か頭が許可した奴らだけなんだよ。」

銃を黒服の奴らの足元をめがけて撃ってから、こう言った。．．．．．
「．．．．．久し振りに撃ったな、銃なんて。と思いながら次の反応を待っている、」

「．．．．．ヤル気かい？」

とさっきから話してる奴が訊いてきた。．．．．．決ま

ってるぜ、そんなことはよ。

「ヤル気だぜ。ただし、お前らがこの敷地内に入った時にな。分かったか、野郎共!!」

『ウィッス!!』

「そうか。入らなかつたら攻撃はしないんだな。……分かった。行け。」

『ハッ!!』

と言って黒服の何人かが敷地内に入ってきた。……堂々と入ってきたな、この野郎。

そいつらが踏み込んできた瞬間に俺は、

バキッ!!ドシュッ!!ドシャアア!!!!

『ぐわああ!!!!』

「入るなって言っただろ。むやみにやらすんじゃねえよ。」

俺は木刀でそいつらを吹っ飛ばした。飛ばされたやつらは車道で仰向けになったまま、気絶したらしい。……怪我はしてないな。

4 - 8 決戦 殴り合い

その光景を見たそいつは、

「なるほど。君は言うだけあって強いようだな。どれ、私が直接相手してやろう。」

と言って踏み込んできた。だが俺は、

「へっ！他の奴らはどうするんだ？」

と他の奴らを挑発した。こいつは結構強い。観た感じでわかる。だから他の奴を先に倒す気でいたのだが………、

「いや、私だけでいい。君たちはそこにいなさい。」

そいつが他の奴らを留まらせた。チィ。ふざけやがって。こうなったら………。

「お前ら、俺がこいつの相手するからな。手、出すなよ。」

『わ、若頭！？』

「いいな。絶対だぞ！！」

『りよ、了解！！』

と言って、俺の方も下がらせた。

「いいのかい？君だけで？」

「ああ。足手まといはいらないんだろ？」

「君もそういう考えなんだね。いいだろう。君のさっきの実力を評して一対一で勝負しよう。」

「武器は？」

「君はどうする？私は使わないがね。」

「じゃあ俺も使わない。拳で勝負だ。」

「決着はどうする？」

「そうだな………背中が地面に着いたら負け。これでどうだ？」

「いいね。そうしようか。」

そう言いながら、俺達はそれぞれの間合いを取っていた。その周り

で、『若頭――！勝ってくださいねー！』『隊長――！頑張ってくださいー！』と俺たちを応援していた。のんきだな。

ま、こっちはこっちで始めるか。

「さてと、」「勝負だ。」「

ダッ――！バキッ――！

「くう。」「つてえな。」「

ドカツ――！バキッ――！ドコッ――！

「まだまだだな。」「そっちこそ。」「私はまだ半分も出してないぞ。」「俺だって。」「

「中々やるな。」「あんたこそ。」「そろそろ本気で行かせてもらおう。」「なら俺も。」「

と、互いに殴りながら言い合っていた。これ、ただ単に殴り合いだよな？と思ったが、気にする必要はないし、気にしてたら負ける。

こいつ、隊長と呼ばれてるだけあって、強い。いつきのSPと同じくらいの強さだろう。殴られながら分析した結果がこれだったため、この勝負は負けたくないという気持ちで一杯だった。何故かって？いつきのSPに散々やられたことを思い出したからだよ。向こうを見ると、そいつも負けたくないという目をしていた。

「・・・・・・・・・・いいぜ。勝負を続けようじゃないか。そう思いながら、俺達はまた殴り合いをした。

どのくらい経ったのだろうか。隊長と呼ばれてる奴とつとむの殴り合いが始まってから。

二人を見ると、両方とも肩で息をしていて、立っているのが不思議なくらいのレベルだった。

「ゼエ、ゼエ。・・・・・・・・そろそろ・・・・・・・・ぶっ倒れ・・・・・・・・やがれ。」「

「ハア、ハア、ハア。・・・・・・・・君こそ・・・・・・・・倒れたま・・・・・・・・え。」「

そう言いながら、一歩、また一歩と、互いに近づいて行った。そし

て、

「・・・・・・・・・・・・・・・・オウリヤア!!」 「・・・・・・・・・・・・・・・・ウオオオオオオ!!」

バキッ!!!!!!

と互いの顔を殴った。その後、

「くつ。・・・・・・・・・・・・・・・・参った。私のまけだ。」

と言いながら、背中からドサリ、と倒れていった。ヤクザ側からは歓声が上がリ、黒服の方は隊長に駆け寄っていった。その時に、つとむも限界だったであろう。こちらもまたドサリ、と背中から倒れていった。ヤクザ達もつとむに駆け寄っていった。それと同時に、
頭^{かしら}が帰ってきた。

4 - 9 思い 信念（前書き）

報告です。しばらく更新しないと思います。 たぶん。

4 - 9 思い 信念

なんだ、この状況は？」

「頭！つとむの奴、やりましたぜっ！！」

と言いながら、ある方向へと指を指した。それを見て頭は、

「ほう。俺が帰ってくる間にやったのか。やっぱ強えな。しかし・・・こいつらとどう話し合うつもりだ？」

と言われて、部下たちは目的を思い出した。

「仕方ねえ。ちと話して来るから、お前らつとむを家に運んどけ。」

『了解っす！！』

頭が言ったとおり、部下たちはつとむを運んで行った。そして黒服の方に近づき、

「！？誰だ！？」

「ここの組長だ。『頭』って呼ばれてるけどな。あんたらに話したことがあるからそいつ共々家に来い。手当くらいはやってやる。」

「・・・いいのか？」

「そう警戒すんな。俺に対して殺気がなければ、家にいても殺されはしねえよ。・・・それと、あんたらの探し人の居所について話そう。」

「お嬢様は一体どこに居る！！？」

「それを話すから、家に来てって言っただよ。ついてこないと置いてくぞ。」

と言って、頭は家へと歩いて行った。黒服の人たちは、警戒しながらも後をついていった。

「まあ、座りな。そこから自己紹介といこうじゃないか。」

と、頭は言った。それに従って座ってから、

「私の名前は、如月瑠唯。そして、先程あなたのところの若頭と闘っていたのが水上清です。」

我々はレミお嬢様をお守りするSPの部隊で、水上さんは私達の隊長です。」

と自己紹介した。

「そうか。ありがとよ。んで、早速本題に入りたいんだが……」

「レミお嬢様はどこに居るのですか!？」

「そう慌てなさんな。場所はちゃんと話す。ただその前に、あいつの気持ちにも気付いてやれば良かったんじゃないか?と、俺は思うんだが。」

「は?」

という事だと訊こうとしたら、

『兄貴!!まだ怪我が治ってないのに無茶しないでください!!』

『どうせ顔だけだろ?いうだけ言ったら寝るからよ、行かせろ。』

『あ、兄貴!!?』

ガラッ!!!!!!

「おい。大丈夫なのか?お前。」

「はっ。これぐらいで心配してんじゃないよ。大体、顔の殴り合いだったから顔以外は酷くねえよ。」

つとむがふすまを開けて、頭と如月のところに来た。

「お前は……!!」

「さっき聴こえたんだが、あんたの名前は如月なんだってな。……」

「……頭、俺に言わせてくれ。それを言ったら素直に寝るから。」

「……わあつたよ。さつさと言って寝ろ。どうせここで泊まるんだろ?」

と言って、つとむにバトンを渡した。

「さて、一つ訊きたいんだが、あいつ——お前らが追っていた奴はどんな理由で逃げてたと思う?」

「お嬢様はパーティの途中でお逃げになったのだ。理由なんか知るか。」

「そんなんでSPなんてやってんじゃないよ。」

「なんだとっ!!?」

「あいつが逃げた理由はな、単純に飽きたからだ。」

「そんなくだらない理由で逃げたのか!!?」

「くだらなくねえよ。いいか?あいつはお前らに泣き言言わずに、その気持ちをずっと隠してたんだぞ?それに気づかないSPが守るって?はっ。笑い話にはちょうどいいぜ。」

「貴様!!私達を愚弄するつもりか!!」

「お前らは所詮、あいつの親父に雇われてるから、っていう気持ちであいつの事守ってるだけだろ?そんなんじゃ、ほんとに厄介なことに巻き込まれた時に、お前らは守れないぞ。」

「.....」

つとむが言った言葉が、SPたちの心に刺さっていった。そしてSPの誰も喋らなくなった時、

「私は」

「隊長!!」

水上が上半身を起こして言った。

「少なくとも私は、お嬢様を命にかけても守りたいと思っているさ。命令されなくとも、ね。」

「.....そういう君はどうなんだい?守りたいものがあるのかい?」その問いにつとむは、

「.....『自分の気持ち』と、『友達』だ。.....」

「.....言いたいことは言ったぜ、頭。^{かしら}俺は寝る。」

一応答え、その後に自分が寝ていたところで寝た。それを引き継ぎ、「という感じだ。あんたらがこれからどうするかは、自分たちで決めろってこった。.....さてと、本題の場所についてだが、あいつは今本宮の家にいるぞ。今頃大人しく寝てるんじゃないのか?」頭が本題の場所について言った。その場所を聴いたSPたちは、驚いた。

「まさかそんな場所だったとは。.....ここに来ていたんだろ?」

「ああ。最初はな。その後、つとむが本宮に連絡したら、連れて来いって言われたそう。あんたらの足止めをしながらな。」

「つとむって、さっきの若頭だろ？どうしてあんな子が本宮と知り合いなんだい？」

「あいつは俺の子供じゃねえぞ。本当の名前は、八神つとむって言うんだ。家は……」

「……これ以上はダメだな。悪いが、あいつの住所やらはこの町じゃ極秘扱いになってるからよ。むやみに話せないんだ。」

「そうなのか。……どうしてだか知りたいが、今はそれどころではないな。」

「俺も眠いからな。お前らもここで寝ていけ。」

「いいのかい？」

「構わねえさ。どうせ、部屋は余ってたからよ。」

と言つて、頭は自分の寝室かしらに行った。それを見届けた後、

「では私達も寝るとしよう。」

「隊長。あの少年の事、調べますか？」

「それは明日からやればいいさ。いや、もう日付が変わっているから今日からだね。」

「分かりました。」

という会話をした後、S P たちは寝た。

4 - 10 その頃

一方、無事にいつきが住んでいる家にたどり着いたレミは、
「すみません。私のわがままのせいで」

「だからそれはいいって。あ、君の家には一応連絡はしといたから。」

「どうでしたか？」

「怒ってはいたけど、心配はしていたよ。流石にこれには驚いたみたいだ。」

「そうですか それにしても、これだけ広いのに人がほとんどいませんね。どうしてですか？」

「それは簡単だよ。父さんがそんなに人を雇わないからさ。それに、二人暮らしだとこれぐらいで丁度いいし。」

その丁度いいが、まさか三階建てでその部屋一つ一つが広く、さらには庭が広いとは、誰も想像できないだろう。

「そういえば、八神さんとはどういった関係で？」

「つとむ? ああ。僕と幼馴染なんだよ。昔は家がお隣だったから。ここに引っ越しても、学校とか一緒に通ってたよ。」

「そうなんですか あの方は素敵ですね。とっても強くてカッコイイです。」

ウツトリと話すレミを見て、いつきはこう思った。

（まったく、君はいつもいつも誰かを惚れさせるね。それが君の良所だろうけど、もうちょっと節度というか、配慮というか、とにかくそういうものをして欲しいものだよ。）

一通りつとむに心の中で恨み言を言い終えた時、

「いつき様。お電話が。」

「あ。うん。分かったよ。」

メイドが電話を持ってきた。レミは自室に戻っており、ここにいるのはいつきだけである。

「はいもしもし、本宮ですが。」

『あ。いつきさん？』

「その声は、茜ちゃんかい？」

『はいそうです。いつも兄がお世話になってます。』

「こちらこそ。．．．．．それで、何の用だい？」

『お兄ちゃん、いつきさんの家に泊まっていますか？』

「いや、泊まってないよ。客なら泊まっているけど。」

『そうなんですか？．．．．．うん、どこに泊まってるんだろ？』

「明日になれば帰ってくるでしょ。心配するの分分かるけど、寝た方がいいよ。」

『そうですね。夜分遅くに失礼しました。』
と言って電話が切れた。

「茜ちゃんは、つとむと違って礼儀正しいね。．．．．．さてと、そろそろ僕も寝ようかな。」

そう言いながら、いつきは自室に戻っていった。その後、つとむの電話での言葉で、小一時間ぐらい寝れなかったのは、何とも言い難いことである。

第五話、事故は地獄と紙一重（前書き）

これから、ゆっくり・まったり、をモットーにしていきます。

第五話　事故は地獄と紙一重

朝。目が覚めたら、いつもの俺の部屋ではなかった。辺りを見渡している、昨日の事を思い出した。頭の中で振り返りながら、俺はなんであんな真似をしたんだろうか？と思いながら、部屋を出た。朝起きて、初めにしたかったのは風呂に入ることだったが、風呂場がどこだか分からなかった。なので歩いていたら、この組の部下の一人に会った。

「兄貴！おはようございます！昨日の怪我は……………って治るの早くないっすか？」

「普通の人から見ると、そうだろうな。……………なあ、風呂はどこだっけ？」

「それなら案内しますよ。新聞を取りに行くついでっすから。」
「助かる。」

部下の一人に案内されて、俺は風呂場に着いた。……………ここ、男湯と女湯に分かれてるんだな。誰か入る奴でもいるのか？そう思いながら、俺は風呂に入ることにした。

「ふう〜生き返る……………ってか、広いな、ここ。いつきの家の風呂場より狭いけど。」

と一人で呟いていたら、誰かが入ってきた。そして、

「ふう。昨日はいろいろとあったせいで風呂に入れなかったからね。起きたら入ろうと思ったんが……………どうやら君とは考えることが同じのようだ。」

「オメエと思考が同じだったら、俺もヤキがまわってるな……………で？本当のところはどうなんだ？」

水上、だっけか？が風呂に入って早々、変なことを言ってきたので俺は言い返した。

「本当のところ、とは？」

とぼけるつもりか、こいつ。

「本当は、俺となんか話がしたいからじゃないのか？」

「見事だね。そうだよ。私はそのために君をつけてたんだ。さて、何から話そうかな？君はどれがいい？お礼、私の気持ち、これからについて。」

「全部だ。」

と俺が言ったら、そいつが言った。

「即答だね。それじゃ、私の気持ちから話そうか。．．．．．私の気持ちはなんであろうとレミお嬢様をお守りすること。そのことは昔からは変わらない。ただ、最近そのことを忘れていたようだ。」

「昔から決めてるものほど、薄れてくもんだ。」

初心忘れるべからず、って言葉があるくらいだからな。

「その通りだ。君の昨日の言葉で、私は自分の決めていたものを思い出せたよ。」

「それはよかったな。」

「次にこれからについてだね。これから私達は、本宮の家に迎えに行く予定ではあるけど、」

「けど？さつさと行けばいいんじゃないのか？」

それが普通じゃないのか？

「君は知らないのかい？本宮家は日本のお金持ちの中で、一番強い家なんだぞ。」

その言葉に、俺はものすごく驚いた。

「そうなのか？あいつの親は普通．．．．．とは言いがたいが、面白い人だぞ？」

ちよつと変わった人だと思うが。

「当主に向かって面白い、か．．．．．ま、君がそう思うのならいいさ。話を戻すけど、迎えに行ったとしても、追い返されるから私達では何もできないんだ。私達は一旦帰るとするよ。」
と言いながら上ろうとしていた。そこで、俺は昨日の騒動で思った

ことを口にした。

「なあ、あんた。あんたの部下、めちゃくちゃ弱かったんだが・・・あれでもSPか？」

「そうだ。ただ、あれに関して言わせてもらうと、君が強過ぎるんだよ。一般的だと、あれぐらいだ。」

「いつきのところはあんたぐらいの強さだったぜ。全員な。」

「それはさっきも言った通り、あの家が特別だからだよ。・・・しかし、君のような強さの人がお嬢様を狙ってきたら大変だな。これからの訓練を厳しくした方がいいかな？」

俺が言った言葉を受けて、水上はブツブツつぶやき始めた。隊長って大変だな。

「あんた。」

「・・・ん？なにかな？」

「大変そうだな。」

「ははは。ま、そうだけだね。・・・そうだ。これをやれば私達も・・・。」

何か思いついたのか？俺に関係がなければいいのだが。

「なあ、八神君。」

「あ？」

「君に手伝ってもらいたいのだが。」

「何を？」

「それはもちろん、私達の訓練のだよ。」

と思いつきいい笑顔で言ってきた。

「・・・おい、あんた。人を巻き込むんじゃないよ。それにどうして俺が手伝わないかんだ。」

「私達も強くないといけなくなったからな。・・・本当は君を入りたいのだが、嫌なのだろう？」

「当たり前だ。何が悲しくて、そんなことせにやなんのだ。」

第一俺はそんなことがしたくて強くなつたわけじゃない。

「君のその強さ、その外見だったら立派なSPになれるさ。私が保

証しよう。」

「俺はそんな保証はいらん。自分たちで何とかしろ。」

「それができたら私も苦労はしないさ。」

とため息をつきながら言う水上。・・・・・・・・・・いちいち動作がキザっぽいな。

そこまで言われるとなあ。そう思いながら俺は仕方なく、

「・・・・・・・・・・分かったよ。ただし、ちょっとだけだぞ。それに、俺が暇な時だけだ。」

条件付きで了承した。・・・・・・・・ま、これも何かの縁だろうな。すると水上が嬉しそうに、

「本当か！！ありがとう！助かるよ！！！」
と言った。

・・・・・・・・・・はあ。俺はどうしてこつも短絡的なんだろうな。

そう思いながら、俺と水上は風呂から上がった。

5 - 2 たかあき町 歴史（前書き）

五十話になりました。早いですね。

5 - 2 たかあき町 歴史

「いやゝさっぱりした。ここに来ることはないだろうけど、この風呂はもう一度入りたいと思うね。」

「俺は別に用がなければここには来ないが、風呂には入りたいな。」風呂から上がって、それぞれの部屋までの道。本当に広いよな、ここ。そう思いながら水上と話していたら、

「そういえば、君はこれからどうするつもりだい？家に帰るのかい？」

そう訊いてきた。時計を見ると、午前六時半。今日の予定を思い出して俺は、こう言った。

「ああ。家に帰る。これから用事があるから。」

「そうか。ならもうお別れという事か。少しは寂しい感じがするな。」

「そうかあ？俺はしばらくあんたらの顔をみなくていいと思うと、ホツとするんだが。」

「随分なことを言ってくれるね。…………お。部屋に着いたみたいだね。では。」

「ああ。」

そう言って、お互いに部屋に入った。

そして、自分が使っていた部屋で荷造りをしていたら、ガラッ！！

という音と、

「君に訊きたいことがあったんだ。」

デフォで笑顔なのだろうか、にやかな笑顔で水上が部屋に来た。……………笑顔が絶えない奴らと最近よく遭遇するな。いつきとか、白鷺とか、こいつとか。そんなことを思いながら俺は、荷造りをしながらこう訊いた。

「訊きたいことって？」

「忘れそうになったのだけれどね、君、昨日銃を使っただろ？あれ、どこで覚えたんだい？」

そんなことか。そう思いながら俺は答えた。

「あれは、こことか、他のヤクザの組とかで教えてもらっただ。他にも、花札とかの博打とか、色々なことを教えてくれたぜ。」

本当に助かったぜ。あいつら、見た目は怖そうなんだが、仲良くなると何でも教えてくれるんだよな。と教えてもらったことを思い出している、

「そうなのか。君の慣れた手つきを見て、どこで覚えたのか疑問に思っただ。ふむ。ますますSPに向いてるね。」

と言ってきた。お前、まだ諦めてなかったのか。と、俺は呆れた。そんなに俺をSPにしたいのか？そうこうしている内に荷造りが終わったので、

「それじゃ、俺はもう帰るわ。じゃあな。」

と言っただ、俺は帰ろうとした。したんだが、

「兄貴！！朝食ができましたぜ！！………って、帰るんすか？兄貴？」

部下（名前はおそらくヒロシ）が入ってきた。またすげえタイミングできたな、おい。もう帰る準備はしてしまったので、俺はこう言っただ。

「ああ。帰るわ。頭には『助かった』と言っただおいてくれ。」

「え？はあ、分かりましたけど、もうちょっとゆっくりしていても良いんじゃないっすか？」

とそいつが言ってきた。それは悪い話じゃねえんだけどよ、昨日約束しちまったからなあ。それをどういって納得させようかと考えていたら、

「ま、いいっす。兄貴がそうおっしゃるのなら。自転車置き場まで案内しましょうか？」

あっさりとひいてくれた。話が分かる奴で助かったな。そう思いながら、俺はこう言っただ。

「ありがとよ。今度この組に何かあつたら手伝う、とも言っておいてくれ！じゃあな！」

「気を付けてっす！！」

俺が言いながら廊下を駆け出したら、そいつは後ろで敬礼をしてくれた。それを見て俺は、

「……………今日もまた大きな出来事に巻き込まれそうだ。」

と直感した。当たらなければいいな、こんな直感。

つとむが帰るのを見届けた後、水上たちも帰ろうとした。

「さてと。私達も帰るとするか。色々と報告をしなければいけないからな。」

「ハッ！」

そして帰ろうとした時、

「ん？帰るのか？お前ら。色々とおつたが、それは水に流そうや。」

頭がいつの間にか、水上たちの後ろにいた。その事実全員が驚いて、それを確認するために、水上が代表で訊いた。

「あなた、結構強いんですか？」

「いや、それほどじゃねえよ。つとむと一対一だったら十分で負ける。ただこの町は、昔から無法者というか、ゴロツキが中心となっていたから、昔からここに居る奴はこのぐらいは普通にできる。治安が良くなったのだって、つい最近、三十年位前だな。」

水上の質問に対し、自分はそんなに強くないと頭は言っ、おもむろに町の歴史について語りだした。

その話を聴いた水上たちSPは、啞然としてした。この町のヤクザ達はみんな、この人と同じくらい強いのかと思ったからだ。その考えを読んだのか、

「俺達だけじゃねえよ。この町に住んでる爺さんや婆さんだって、結構強いぞ。この町は昔から、弱肉強食だからな。」

と頭が補足情報を話してくれた。

「なるほど。この町に住んでるものはそれなりに強い、と思って構わないんだね？」

「ああ、そうさ。それじゃ、気を付けて帰れよ、お前ら。」

水上が、町の住人が全員強いと考えてもいいのかと訊くと、頭はかしらそう考えてもいいからさっさと帰れ、と言って戻っていった。それを見送った後、

「帰るか。」

『ハッ!!』

と言って帰っていった。

5 - 3 出発前 家族の会話

「ただいま。」

「お帰り！！お兄ちゃん！！！」

家に帰ったら、茜が俺に走ってきた。これから察するに、余程嬉しいんだろうな。と状況を観察していたら、

「そういえばお兄ちゃん。昨日はどこに泊まってたの？いつきさんに電話したら、来てないって言われたんだけど。」

そう茜が言ってきた。うわぁ。それについて考えるの忘れてた。どう説明しようか、と頭を必死に動かしていたら、妹の恰好が気になった。

「なあ茜。その恰好、どうしたんだ？」

「えへへへ。気付いてくれたんだ。これはね、この日のために買っておいたんだ。どう？似合うかな？」

と回転しながら訊いてくる茜。この日のためって。そうツッコミたかったが、似合うかどうか訊いてきたので、とりあえずもう一度茜の恰好を見た。

フム。全体的に活発そうだな。ワンピースを着てるから余計にそう思える。

とまあ、俺の中で結論が出たから答えるか。

「よく似合ってるぜ。正直に可愛いと思った。」

「お、お兄ちゃんに褒められると、やっぱり嬉しいな。」

答えたら答えたで、テンションが上がったみたいだ。嬉しそうに踊ってる。

「……………さて、この隙に。そう思って、俺は二階に上がって着替えて、財布やら恐らく今日必要になるものを準備した。……いけね。なにも食ってない上に、どこに行くのかすらも分からない。」

ま、朝食は家で食べればいいし、どこ行くかは茜に訊けばいいか。

そう思つて一階へと降りた。

「おかえりつとむ。」「おかえりなさい。」

「ただいま。………つて飯がねえ!!」

リビングに行つてみると、朝飯がなかった。というか、俺の分が準備されていたかどうかすら怪しい。

親にそのことを訊いてみると、

「泊まった所で食べてきたんじゃないのか？だから母さん、つくつてなかったぞ。」

そう親父に言われた。畜生、こんなことになるんだつたら、あつちで食べてくればよかった。と後悔しても後の祭り。こうなつたらコンビニ寄つて行くしかねえなと考えてたところで、親父がこう訊いてきた。

「昨日、学校から連絡があつたんだが、お前、停学受けたんだろ？何やつたんだ？」

俺としては、昨日の事に関してはほとんど言う気がないので、こう言つた。

「別に。それを言つたつて何も変わらないからな。あえて言うなら、悪いことはしてない。」

そう言つたら、親父が「やつぱりか。」と言つて黙つた。ま、黙つてくれるんならそれでいいか。と思つた。そんなやりとりをした直後に、

「お兄ちゃん！もう行かないと最初から観れないよ!!」

茜がそう言いながらリビングに着た。なので俺は、

「行つてくるわ。」

「いつてらっしゃい。」「なんだと!!？つとむ！お前行かないんじゃないのか!？」

行つてくる、と言つただけでこの有り様。いつもと変わらないなと思つたが、両親、特に親父が何やら悲しそうな眼をしていた。……？いつもの親父らしくないが、どうしたんだ？そう思つたが、茜が

急かしてきたので家を出た。

「あいつ、昨日も大変な目にあっただな。心配しかできないのも、つらいもんだな。」

「そうだけど、心配も私達にとっては愛に変わりはないでしょ？」

「しかし、つとむの奴、本宮さんの正体に気付かないってどういうことだ？」

「それは分らないでしょ。私達だって、気付いたの三年位前ですよ？」

「ま、いいか。いまはそれより自分の息子の身の安全についてだな。」

「あの子なら大丈夫よ。なんたってたって、昔この町をまとめた英雄の息子なんだから。」

「よせやい、母さん。まとめたんじゃない、治安をよくしたただけだぜ？」

「そういうところも息子が受け継いだわね。唯一例外なのは」

「あの体質だけか。しかし、こればかりはなあ……………」

「神のみぞ知るって事ね。」

「ああ。」

5 - 4 戦友 到着

街を茜と一緒に歩いていて（ちゃんと飯は買って食べた）、どこまで行くのかと俺は訊いた。

「駅まで歩いて、そこから電車でムサシ町まで行って、撮影現場行くんだけど……」

「どうかしたのか？」

「場所が分からないんだよ。お兄ちゃん、知ってる？」

「知らん。そのドラマのタイトルは？」

「確か『男の戦い！』裏最強の恋を巡っての大バトル！』だったよ。」

「そつえば、長谷川が見せてきたのもそれだったような……」

「考えても埒が明かないので俺は、話題を変えることにした。」

「そつえば、好きなアイドルとか居るのか？」

「うえええええ！！？そ、そんなこと言えないよ！？」

「どうしてだ？テレビに出てる奴で好きな奴訊いてるだけなんだが。」

「……あ。そうなの？てつきりお兄ちゃんも含まれてるのかと思った。で、好きな芸能人だったよね？」

「範囲が大きくなったような気がするが、気にはしない。で？誰なんだ？」

「お兄ちゃんと同じ学校に通ってると思うけど、『光』っていうんだよ。最近小中高生の間で結構人気なんだよ？知らないの？……」

「……って、訊いちゃいけなかったね。ごめん。」

「気にすんなよ。それにしても光、ねえ……」

「写真とかないのか？」

「あるよ。前にグラビアアイドルやってたみたいだから写真集を出していてね、私つい買っちゃったんだ。……はい、

これ。」

と茜が写真集を渡してくれたが、さっきの説明で俺はもう誰だか目星がついてしまった。

「いい。もう誰だか分かったから。」

「本当！！？さっきの話だけでよく分かったね！」

「それにサインしてもらいたいから持ってきたのか。用意がいいな。」

「それはそうでしょ！私達も町の近くで撮影がやるんだよ！折角だからサインしてもらいたいでしょ！」

そんなもんなのか、と言ったら何を言われるか分からないので俺は黙った。

その後、町の不良どもにからかわれながらも電車に乗ってムサシ町まで行った。

二時間かかったがな。

今の時刻は十時。撮影は始まっているだろうが、始めの方だから大丈夫か。問題は……

「お兄ちゃんと私は恋人……えへへ、恋人かあゝ」

どうもあいつらが茶化してきたせいで茜がおかしくなったみたいだ。電車に乗ってからずっとこの調子だった。こいつはあとで何とかするとして、とにかく撮影場所に行かないとなあゝと思ひ案内図を見ていると、

「？よお！つとむじゃないか！！珍しいな、お前がこの町に来るなんて。何か用か？」

馴れ馴れしいな、誰だこいつ？と思ひ振り返ったら、

「お前……！飛翔^{トビカ}じゃねえか！！そういや、この町の不良仕切つてるの、お前だつけ。」

「久し振りだな、本当に。相変わらず変わってねえな。この町に来たのって、ひよっとすると、撮影現場観るためか？」

そこにいたのは、俺の知り合いの大地飛翔^{だいち とばさ}だった。車は近くに置い

てある。

「ああ。茜がどうしても見たいって言うからな。」

「茜って、そこでボーっとしたままの嬢ちゃんか？」

「妹なんだ。」

「ふん。．．．ところでよ、俺も丁度行くところだったんだ。乗ってくか？」

と言って飛翔が自分の車を指差した。その申し出は正直ありがたいが．．．．．

「いや、いい。」

「遠慮することあねえだろよ。」

「けどな．．．．．」

「今までの借りを返すと考えればいいだろ？」

「．．．．．分かったよ。乗せてってくれ。」

「元よりそのつもりだ。」

と言われて、俺と茜（飛翔との会話中に元に戻った）は飛翔の車に乗った。

「ありがとうございます。でも、飛翔さんはお兄ちゃんと何時から知り合いなのですか？」

「確か．．．俺が高二の頃だっけ？」

「ああ。もう五年になるんだな。」

車の中で、俺達はそんな会話をしていた。運転してるのはもちろん飛翔で、俺達は後部座席に座っている。この会話をして、俺は飛翔と最初に会ったことを思い出した。

あれは、俺が中学一年の頃だ。その当時から俺は、町のほとんどの不良やヤクザ達をまとめていた（自覚はなかったが）。だからなのか、俺の呼び名はいつの間にか『皇帝』になっていた。で、飛翔たちが来る前から『余所から喧嘩しに来るやつらがいる。』という話が不良たちで話題になっていた。俺は巻き込まれなければどうでもよかったので、聞き流していたが。

そんなある日、俺はいつも通り一人で散歩していると、廃工場の

方から殴り合いの音が聴こえた。どうでもいいから通り過ぎようとしたら、電話で応援を呼んだのか他の奴らがやってきて、俺まで巻き込まれた。仕方なく廃工場の中に入ってみると、飛翔たちのグループがこっちの方をボッコボコにしていた。その時の飛翔の印象は、今は違い少しグレていた。で、当然俺が前面に押され、飛翔たちのグループと喧嘩する羽目になった。結果はというと・・・

「いや、あん時から強過ぎたる。なんだよほぼ無傷って。ま、そのおかげで俺もまだまだだと思いきや知らされたからいいけどよ。」

「こつちが素手なのに、お前ら木刀使ってきたじゃねえか。本気でやらんと俺が死ぬ。」

ちなみに飛翔たちのグループ、ここが地元でこの町最強のグループだ。

と昔話をしていたら、

「そういえばお兄ちゃん。よく一人で散歩して帰ってきたら、服が破けてたりしてたよね。その度に自分で縫っていたよね。何をしたの？」

当然のように茜が訊いてきた。誤魔化してもいいんだが、遅かれ早かれ気付かれるんじゃないかと思い、

「親父達に訊け。」

と両親に投げた。自分で話す気になれなかったからだ。その答えに渋々ながらも、茜は納得してくれた。

そんな話（俺や飛翔の武勇伝）をしていたら、

「着いたぜ。ここが撮影場所の武士公園だ。」

と言って俺達を降ろした。しかし、武士公園って町がムサシだからか？と、どうでもいいことを考えていると、

「じゃ、駐車してくる。」

と言って飛翔は車を出した。待っている間俺は、公園の中を見てみた。公園は結構広く、撮影している傍らで、子供たちが遊べる広さだった。途中、何やら柄が悪い奴らを見たような気がするが、気のせいだと思いたい。

十分後、飛翔が来た。どうも駐車場所がほとんど埋まっていたらしく、空いてる場所を探すのに苦労したとか。三人揃ったので、場所を探そうとしたら飛翔が止めた。

「どうした？」

「いや、場所は取ってあるんだ。」

「どこに？」

そう訊いたら、飛翔が指を指した。その方向を見ると、先程見つけた柄の悪い奴らだった。

「やっぱりかよ。お前ら、よく観に来たな。」

「そりゃ、地元で撮影するって聴いたら観に行くだろ。それに、最近売り出し中だろ？俺もファンなんだ。」

「そうか。」

俺の短い答えに何か考えたのだろうか、茜が「自分のファンなんですよ」と言ったら、茜と語りだした。

もうこいつに任せて帰っかな、と思ったが、それをする妹から約束破ったからという名目で再びどこかへ行く羽目になりそうなので、歩きながら好きな芸能人の話をしている二人の後を追った。

5 - 5 撮影現場 再会

「あの、すみません。私のわがままのせいで……」

「気にしなくてもいいよ。僕も一日一回は彼に会っていないと、調子が狂うからね。」

「それはどういう意味ですか……?」

という会話をしていた二人がいた。いわずもがな、いつきとレミである。二人は、撮影現場が最も見やすい場所に陣取っていた。もちろん、SP付きで。

ふと気になったのか、レミはいつきにこう訊いた。

「目立ってませんか?」

「目立てばその分、つとむが見つけてくれるよ。」

しかし、つとむが来たのはここに陣取る十分前だったので、二人が来ていることは分からなかった。

「でも、さすが本宮ですね。私の父にこんな条件を付けたのですから。」

何気なくそう言ったら、

「別に。僕じゃなくてもつとむならこれぐらいやるよ。」

無然とした態度、あるいは無表情でいつきがこう言った。そこには、何かしらのしがらみが見て取れた。だが、そこは篠宮。そこには触れずに話題を変えた。

「つとむさん、遅いですね。」

いつの間にか呼び方が変わっていたのは、彼に対する気持ちの表れか。それが面白くないと感じながらも、顔に出さないいつきは、意地悪い考えを思いついて携帯を取り出した。

「どうするつもりですか?」

「電話で呼ぶんだよ。」

なにかとんでもないことが起こってそんな気がする。

しかも、ピンポイントで俺に降りかかりそうな。

そんな気がする。

と考えてしまう今日という日。今の状況を確認すると、

？ 飛翔と茜は撮影を見るのに夢中。

？ 飛翔の仲間たちは、誰が良いかという事で揉めている。

そして俺はというと、そんな奴らを尻目に散歩していたはずが、

捕まっていたというか、取り押さえられていた。

この場合、誰に、というのは愚問だろう。なぜなら、これを実行させるのは一人しか考えられないからだ。

こうなつた経緯を話すか。

事の起こりは、俺達が飛翔の仲間たちと合流してからだ。合流した時の茜の反応は、「これ、ホントにお兄ちゃんの知り合いなの？」だった。飛翔の仲間たちは俺の妹だと知って、平身低頭だった。これに茜は驚き、何とか敬語を使わせないようにした。

その後、撮影にまだ時間があるらしいので話していたら、仲間内で勢力が分かれていることが判明した。その勢力とは、

『今売り出しているアイドルの中で、誰が一番か』という話である。それは大きく分けて二つあり、『光』ファンと『白井美夏』ファンだ（飛翔は中立、俺は無関心）。ちなみに白井美夏、とは白鷺美夏のタレント名だった。……ここまで関わってくると、泣ける。

そこから揉め事が始まったのだが、奇しくもその時に撮影が始まったので、茜と飛翔だけ見始めた。

その時俺は、その前から適当に歩いていた。歩いていたら、見てはいけないものを見た気がして、俺は後悔した。そして、戻ろうとした。だが、こちらが見つけという事は、あちらにも見つかったという事だ。すぐさま黒服が俺に立ち塞がった。数は四。俺は抵抗したが、それもむなしく（黒服の一人を倒しただけは、彼にとってむなしい以外に感じない。）、先のような状況となる。

で、この状況を作り出した張本人はというと、

「やあつとむ。僕を見た瞬間に逃げるなんて……そんなに僕の事が嫌いかい？」

椅子に座りながらこう言った。俺はあれか、罪人か。って言うか、ビニールシートに椅子って意味あるのか？と俺のそんな思いはつゆ知らず、いつきは話を進めていった。

「まあいいけど。今日はそれを不問にしてあげるよ。」

それは俺に危険が無くなったと捉えていいのか？

「でもさ、なんで電話したのに気付かなかったの？」

「は？」

俺は解放された体をほぐしながら、いつきが言ったことに疑問を感じた。そんな馬鹿な、と思いながらケイタイを見ると、今日の日付の着信履歴を見た限り発信者はいつきで埋まっていた。

「………すまん。」

「君が直接来てくれたからいいけどさ。それで、僕がなぜここにいるのかというと………」

「……こっちに來たら？」

「？」

いつきが何で呼んだのか分からなかった為、呼んだ方向を見ると、

「あ、どうもこんにちは。昨日は助けてくれてありがとうございまして。」

と礼を言っている篠宮妹がいた。

5 - 6 物 メンツ（前書き）

三万PV突破しました〜！

あ、このサブタイトルあんまり気にしないでくれると助かります。

5 - 6 物 メンツ

「まだいたのか。篠宮妹。」

「私の名前はレミです！最初と言ったじゃないですか！！」

「で？どうしてここに？」

態々（わざわざ）こんな所まで来なくても良いじゃないか、という本音は置いておく。

それが伝わったのかいつきが、

「礼を言いに来たんだって。」

単純な目的だけを言った。俺としては、たいした事をしたつもりはないんだが。

「もう礼は言ったんだ、用は無いんじゃないのか？」

そう言うと、いつきがヤレヤレ、といった感じで首を振った後にこう言った。

「あのね？いつも言うけど、僕達はお礼を言ってハイ終わり、じゃ駄目なんだよ。君を知ってるよね？」

「知ってるが、それはそっち側同士だろ？俺は関係ないはずだが。」

「君の立場じゃなくて、僕達が助けられただけってのは、こっち側じゃ結構な問題なんだよ。」

「そついうもんなのか？」

昔からそんなやりとりをしてる気がするが、俺としてはイマイチ納得がいかない。

だが、たまにいつきの事を助けたりすると（厄介事に巻き込まれた時）、謝礼という形で何かが送られてくる。それが結構高そう（というより、実際高いのだろう）なものなので翌日返したりするのだが、いつき曰く『返却不可だからね』と言われ、返せなかった。結局、それは自分の部屋に置いてある（確認行為以外では開けた事は無い）。

一通り確認が終わったので、篠宮妹が話し始めた。

「本宮君が言った通りです。先程の言葉は正式な『お礼』という訳ではありませんので、これから始めたいと思います。」

「勝手にしろ。」

「分かりました。では。……昨日は私の事情も訊かずに助けてくれて、誠にありがとうございました。それで、そのお礼なのですが」

この時の篠宮妹の声、いや、雰囲気は、気高いお嬢様を想像させるものだった。が、

だからどうした、と俺は思った。続けて篠宮妹が、『お礼』の内容を口にした。それはいつきが驚く内容だった。

「このお礼は、わが自宅へ招待させていただくというものになりたいと思います。」

「ええ！！？それはちょっと、いくらなんでも大胆過ぎない！？」

その内容を聞いたとき、自然とあの女の顔が浮かんだ。いつきがなぜそんな慌てているのか知らないが、俺はあの女の顔を思い浮かべた時すでに、答えは出ていた。

「これでどうでしょうか？」

と不安を抱きながらも訊いてくる篠宮妹。こいつには悪いが……、

「断る。」

「ひどくないですか！？」

俺が即答したのに驚いたのか、つい最近誰かが言ったことと同じことを言った。ちなみに、この答えにいつきは胸をなで下ろしている。俺にはその意味が理解できないんだが。

「どうしてこれはダメなんですか！？折角昨日考えていたのに！」

「理由？あんたの姉に会いたくないから。」

「え？」

俺の言ったことがそんなに不可解だったのだろうか。篠宮妹は落着きを取り戻した。

「どうしてですか？」

「昨日言ったの、憶えてるか？俺はそれのせいで、ちと顔を合わせたくないんだ。だから、断る。」

理由込みで断りを入れた。俺が言った言葉を覚えていたらしく、それから篠宮妹は悩み始めた。

「悩んでいるならいらないんだが。」

「私にもメンツというものがあります！」

いらないと言ったら、プライドの問題だ、と返された。このままいくと平行線になりそう（実際は既になっている）な状況だったので、「また逢えたらでいいよ。じゃあな。」

と言って戻ろうとした。しかし、篠宮妹は「今度つて、何時会えるか分からないじゃないですか！」と言って俺を引き留めた。いつかはというと、「あれ？僕何を考えてたんだろ？」と顔を赤くしながら呟いていた。何をやっているんだか。

ここで考えがまとまらなくなったのか、篠宮妹が俺に訊いてきた。

「何が欲しいのですか？」

「俺に訊くのかよ。」

「仕方ないじゃないですか！私はそんなにあなたの事を知りません！……」

詳しくは知りたいと思いますが。」

こいつはなぜ赤くなっただ？しかも最後の方、聴こえづらかったし。

「それで！？何が欲しいのですか！？」

もはや勢いで訊いてくる篠宮妹。欲しいもの、ねえ……。

俺はとりあえず考えた。お金は自分で貯めてナンボだし、平和は無理。平穩も同じ。退学はしないうってしまったので、これも却下。となると、あれ？何にもない。

「何もないわ。」

「ええ！！」

俺が欲しいものがないと言ったら、篠宮妹が驚いた。誰もそんなことを言わなかったからだろうな。そう俺は結論づけた。

238

諦めねえなこいつ。と同時に、俺が欲しいもの、何かあったかな？と考えた。

うゝん・・・・・・・・あ！

「あつた！」

と、俺が唐突に言った内容に、二人が反応した。

「え！？本当ですか！？」「本当なの？」

俺は頷きながら、

「ああ。あつたぜ。」

と言ったら、篠宮妹が食いついてきた。

「なんですか！？」

それを受けて俺は素直に言った。

「欲しい物は木刀だ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

俺が欲しいものを言ったら、篠宮妹はともかく、いつきまで目が点となった。

ん？何か変なこと言ったか、俺？

「それでいいんですか？」

「ああ。前に何本か持ってたけど、全部折れちまって。それ以降買つてなかったんだよ。あれがないと練習できないんだよねあゝ。」

「安い気がするけど……」

「想いがあればいいだろ？」

その言葉のどこに赤くなる要素があったのだろうか。俺が言った言葉で、二人は顔を赤くした。なぜいつきまで？そう思ったが、俺は何も言わなかった。

「つとむさんがそう言うなら、仕方ありませんね。分かりました。それにしましょう。」

？昨日と違う呼ばれ方をしたような……………気のせいかな？

という訳で、俺に対するお礼の品が決まり、レミ（そう呼んでくれと必死に頼まれた）は名残惜しそうな表情でいつきと一緒に帰って行った。……………戻るか。

5 - 7 撮影観察 午前の部終了

俺が戻ってきたら、揉め事は終わっており、全員で仲良く観ていた。俺はそのまま眺めていたら、俺の視線に気づいたのか、茜が振り返った。

「あ、お兄ちゃん。今までどこ行ってたの？」

「そこら辺を散歩。」

俺の答えに茜は『？』となっていたが、それ以上考えるのをやめたらしく代わりにこう言った。

「今ね、中盤のところだね、光さんも出るところなんだよ。」

俺はどうでもいいのだが、それを言ったら怒られそうなので、俺はこう言った。

「実際に見てどうだ？」

「うん！とても綺麗な人だった！………私もあんな風になれるかな？」

最初の方は嬉しそうに、後の方は切なそうに言った。

「気にすんなって。お前はお前で良い所があるんだからよ。今でも充分だろ。」

と俺が言つと、

「ええ！！お、お兄ちゃんが、ほ、褒めてくれた！？」

「何故そこで驚く？」

顔を赤くしながら、茜がこんなことを言った。驚くようなものか？

「だ、だって、いつもはそんなこと言ってくれないじゃん……」

茜は、うつむきながら喋っているせいか、だんだん声が小さくなっていた。そのせいで、表情が見えない。だが、多分赤くなっただまだろう。これをどう対処しようか考えていたら、

「ん？午前中の撮影が終わってるぞ。」

俺がそう言ったら、

「え！？」

と言って、茜が後ろへ振り返ると、そこには片付けが始まっていたところだった。

「いや、結構よかったな。あのシーンのところとか」

「いや、もつと始めの方っすよ。」

「それよりもうちよつと中盤よりの方っす。」

と言いながら俺達の方に寄ってきた飛翔たち。その光景を見た茜は、
「しまった」という顔をした。

「さっきまで観れたからいいんじゃないか？」

「普通は最後まで観たいでしょ！？あそこまで観たんだから！」

どうやら全部観たいと思っていたみたいだ。どうするか考えながら時計を見ると、ちょうど正午だった。腹減ったなあ、と考えながら空を仰ぐと、

「あつ！！？つとむさんじゃないですか！！やっぱり見に来てくれたんですね！？」

と声が聴こえた。

・・・・・・これは幻聴これは幻聴これは幻聴、と心の中で呟いていたら更に、

「なんで空を見てるんですか！？私を無視しないでください！！」

と言いながら、そいつは俺に近づいて来たみたいだった。これ以上現実逃避は無駄だと思って俺は視線を戻した。そこにいたのは、

「やっぱりあんたか。」

「名前を憶えているなら名前で呼んでくれませんか！？」

長谷川光だった。そいつの恰好は、ヒロイン役の服装だと容易に推測できた。しかし、長谷川がなぜこんなに怒った声を出しているのかは想像できない。面倒だなあと思っていると、飛翔と茜が、俺に寄ってきてこう訊いた。

「「つとむ（お兄ちゃん）、光さま（さん）と知り合い？」」

息が合っとな、お前ら。そう思いながら俺は、

「そつだよ。」

と答えた。その答えを聴いた飛翔たちは、何故か変なテンションに

なっていた。

頭大丈夫かお前ら？そう俺は心配せざるを得なかった。

茜はというと、興奮を抑えきれずに長谷川にサインをねだっていた。ねだられた本人は、怒っていたのはどこへやら。笑顔でサインをしていた。それを見た飛翔たちもこぞってサインを要求し、それに長谷川も戸惑いながら、サインをしていた。その途中、俺はここから近い店まで歩き出した。最初にサインをしてもらった茜は、俺の行動を見てすぐに後を追った。

それを見た長谷川は、「あっ！！せっかく一緒にいられると思ったのに……」と言っていた。

ご愁傷さま。

全国展開されているレストランの店内にて。

「お兄ちゃん。みんな放っておいて良かったの？」

「終わったらここに来るんじゃないか？一番近いんだから。」

「だといけど・・・・・・」

と話しながら食べていると、ケイタイが鳴った。発信者は飛翔。周りがうるさそうにしたので、俺は席を立ち、外で話すことにした。

「なんか用か？」

『どこに居るんだ？』

俺がそのレストランの名前を言うと、

『俺達は人が少ない食堂にいるからよ。食べ終わったらさっきの場所に集合ってことで。』

と言われて、電話が切れた。その後自分の席に戻ると、茜が訊いてきた。

「お兄ちゃん、誰から？」

「飛翔。」

「なんて？」

「食べ終わったらさっきの場所へ集合だつてよ。」

「ふゝん。」

これで会話は終了。俺は黙々と料理を食べ、茜はそんな俺を楽しそうに眺めていた。

会計を済ませて店を後にし、再び公園に向かう途中。俺は気になったことを訊いた。

「なあ」

「なに？」

「俺を見てどこが楽しいんだ？」

「ふえ！？わ、私、そんな顔してた？」

「してた。」

と俺が言い切ると、茜は顔を赤くしながら何も言わなくなった。

それから、先程まで俺たち（俺はほとんどいなかったが）がいた場所に着いたら、長谷川が一人立っていた。俺が見つけると、長谷川も俺を見つけたのか、俺に走ってきた。

「わざわざ走ってこんでも良かったんじゃないのか？」

「いいじゃないですか。少しでも長く話したいんです。」

なぜって？それを訊くのは野暮だな。そう直感した俺は、妹の視線に気付いた。

「どうした？」

「別に」

訊いたら明後日の方向を向かれた。何か気に障ることがあったのだろうか？考えても埒が明かないので、長谷川にこう言った。

「取りあえず、場所変えないか？」

歩きながらも俺たち（茜もついてきた）は、会話をしていた。

「ここ最近、ずっとこのドラマの台本読んでたのか？」

「はい。八神君の言葉のおかげでだいぶ自信ができました。ありがとうございます。」

「別に。解決したのは長谷川自身なんだから、お礼を言われる覚えはない。」

「そうかもしれないけど、あのアドバイスが無かったら、私は変わってませんでした。」

そういうもんか？と呟くと、はい、そうです。と笑顔で返された。と、今まで黙っていた茜がいきなり爆発した。

「ちよっとお兄ちゃん！！？どうしてそんな風に普通に話しかけられるの！！？」

「どうしてって、言われてもなあ……」

「……お兄ちゃん……？」

茜が言った一言に、気になった単語があったのだろうか。長谷川はその単語を呟いた後、こういつてきた。

「八神君、もしかしてその子、妹さんですか？」

「もしかしなくてもそうなんだが。」

と俺が肯定すると、長谷川は顔を赤くして「私、もしかして勘違いでもしてたんじゃ……………」と言っていたのには、さすがにツツコムべきだろうが。

気分転換、という事で俺達は、公園の入り口近くで話をしていた。「しっかし、なんでそこまでやる気なんだ？」

俺は当然の疑問を口にした。さっきから話していると「頑張る」や「みんなに見てもらっているから」とかをよく耳にしたからだ。長谷川はその質問にちよつと驚いたが、真顔でこう言った。

「それはあなたのドラマ嫌いを直すためです！！」

このセリフを言った時の効果音は、きつとデーン！！だと思った。本人は「決まった…」と思っていそうだが俺は、そんな理由かよ・・・と頭が痛くなりそうだった。

そんな俺を無視して、長谷川はなおもヒートアップした。どんなことを言っていたかというと、なんか突拍子もない感じだったので、もはや聞き流していた。

5 - 9 予期せぬ 衝撃

だから、だろうか。

何気なく公園の入り口——歩道と道路は区分されている——の方を見たのは。

その時に見た光景は、横断歩道を走ってくる一人の少女と、それに気付かないトラック。少女の方は途中で気づいてしまったため、道端で立ち止ってしまった。

茜はその少女を助けようと動くが、それより先に——いつも巻き込まれているから体が普通に動ける——俺が動いた。

当然、俺が慌てて動いたのだから長谷川は話を中断し、俺が行く先を見た。その瞬間、長谷川は口に両手をあてて座り込んでしまった。俺の目測では、トラックと少女の距離はせいぜい二十メートル。今から走っていくと、俺は確実に怪我をする。いや、怪我だけじゃすまないかもしれない。それでも俺は、こう思った。
見殺しになんてできるか。

それが俺の本音。水上が俺に訊ねた時に答えた、俺の守りたいと思うもの。

トラックは俺が飛び出してきたから慌てたのだろう。ブレーキを思いっきり踏む音がして、ハンドルを思いっきりきつたみたいだった。その間に俺は少女を抱きかかえ、そして、

「あなただっ たんですの、本宮のものは。」

「久し振りですね。まさかこんなことでお会いになるとは。偶然って怖いですね。」

「図々しいですね。」

話しているのは、いつきと篠宮ルカの二人。両方とも、当家の代表としてきている。

「それで？妹を返して下さいるんですね？」

「そうですよ。そんなに身構えないでください。何も要求しないんですから。」

「そこはありがたく思いますわ。……………レミ、来なさい。帰りますわよ。」

「ハイお姉さま。」

「それではさようなら。」

と言って二人は帰ろうとしたが、いつきの方から電話が鳴った音を聞いた。それを気にせず帰ろうとしたら、

「ええ！！つとむが事故！！？……………うん、それで状況は？……………つて言うか、自分で詳細話さないでよ。え？もう無理？救急車とパトカーは？あ、妹さんに呼ばせてる？運転手の人の怪我はないんだね。え？君の顔を見て顔が真っ青になっている？それが普通だと思うんだけど。ま、急いで手配するから。」

と、途中の方はなんだかおかしな話だったが、最初の方でレミが驚いて、自宅に電話をかけてるいつきに詰め寄って、こう訊いた。

「つとむさんが事故に遭ったのは本当なのですか！？」

「うん、本人が電話してきたからまず間違いないね。……………」

「あ、もしもし。僕だよ。うん、そう。救急車呼んだみたいだけど、不安だからね。大至急現場に行つて。僕？僕は搬送される病院に行くから。そう。じゃ。」

いつきが電話をする前に答えた「答え」が、レミにショックを与えるのには充分過ぎた。その場に取り残された（雰囲気的に）ルカはというと、表情を変えぬまま、何かを考えていたみたいだった。

5 - 10 守るべきもの そして・・・

周りが暗い。これが「死」なのか、と不意に考えてしまった。あの時かばった少女は大丈夫だっただろうか。そう考えていたら、誰かに呼ばれてる感じがした。それは、だんだん強くなっていき、俺は「まだ死んでいない」と思い、目を開けた。

「うう・・・・・・」

目を開けてみると、真っ先に見えたのは庇^{かば}った少女だった。その子は、なぜ自分が助かったのか、余り分かってないようだった。俺としては、これを忘れてもらって構わないんだが。

次に見えたのは、俺に必死に声をかけ続ける茜と長谷川だった。二人とも必死なようで、目が向けられてることに気付いていなかった。なので、俺は体を仰向けにしていった（その時には少女を道路に置いていた）。

その時に、声をかけていた二人は俺が生きているのが分かって嬉しかったみたいだが、俺の姿を見て今度は慌て始めた。やっぱり慣れてないんだな、こういうの。そう思って、俺は体を起こしていった。その時、この騒ぎを知って急いで駆け付けたのだろう、飛翔たちが人混みをかき分け俺の前に来た。

「立てるか？」

「いや、多分足がイカれてるな。立てん。」

「ま、そうしてるだけで凄^{すご}いんだけどよ。仕切^{しき}っていいか？」

「ああ。」

と言いながら、俺はいつきに電話をかけた（電話もボロボロだった）。

『もしもしつとむ？何か用？』

「あゝ・・・・・・事故^{しこ}った。」

『ええ！！嘘^{うそ}！大丈夫なの！？』

「これで大丈夫だと強^{つよ}がれるほど、俺は頑丈^{がんじょう}じゃないんだが。」

『そんな冗談はいいから！！警察は！？救急車は！？』

まくしたてるように言ってくるいつきに俺は怪訝になりながらも、辺りを見渡して説明した。

「警察は長谷川が呼んでる。救急車は茜が呼んでる。」

『運転手の人は！？』

「飛翔たちに囲まれてる。」

『そう……分かったよ。今からそっちにへり寄越すから。』

「救急車無視かよ。」

『そんなこと言っていないよ。……とにかく、無事でいてね。』

と言って、いつきの方から電話を切った。俺はそのままボーっとしていたら、長谷川が俺に近寄ってこう言った。

「なんであんな無茶したんですかっ！一歩間違えたら死んでたんですよ！？」

よく観ると、長谷川は涙をためていた。いますぐにでもそのまま泣きそうだ。

あまり働かない頭で考えていた。何て答えたものか、と。そして、

「はっ。」

「！？」

「無茶？あの状況で無茶しなきゃ、助けられなかったんだぞ。目の前で危なくなったやつを黙ってみてられるほど、俺は冷酷じゃねえんだよ。お前だってそうだろ？」

「そう……です……けど」

「あとよ、」

「？」

「撮影、さっさとしないと遅れるぞ？」

「え？なに……」

「こっちは気にせずに、撮影、頑張れ。」

俺の言った言葉が理解できなかったのか、長谷川はしばらく固まっていた。

「お兄ちゃん電話しといたよ！……って大丈夫なの！？体起こして！？」

「ちと背中やら腰やらが痛い気がするが、これと言って問題はないぞ。だからよ、泣いてんじゃねえよ。」

「だって……私……」

最後まで言わずに、茜は泣き出してしまった。長谷川は、俺の言ったことを理解しただろうが、それでも行こうとはしなかった。その光景を見た俺は、どうしていけないのか考える間もなく、意識を失った。

エピソード～自分の近況・？～（前書き）

エピソードと書いてありますが、終わりませんからね？

エピソード―自分の近況・？―

ふと目が覚めた。それから体を起こそうとしたら、十分かつた。
「ここは・・・・・・病室？」

辺りを見渡すと、どうやら個室らしく俺以外の患者は見当たらなかった。

どうしてここに？と考えていたら、意識を失う前の事を全部思い出した。

そうか・・・・・・それで・・・・・・、と考えをまとめていたら、看護師の人が俺の様態を見に来たのか、病室に入ってきた。そして、俺を見るなり驚いて、急いで部屋から出て行った。

なぜそんなに驚くのか分からなかったが、俺はそれを考えることをやめて、窓から外の景色を眺めた。その景色を見ると、ここが四階ぐらいだと推測できた。

なんでって？ここは俺がよく（喧嘩によって）入院してた病院だからだ。さっきの看護師も見たことがあった。この年に入院なんて久しぶりだなあ〜と感慨にふけていたら、突然ドアが、ドバァン！！！！と勢いよく開いた。そこに居たのは、

「お兄ちゃん！！」

と言って嬉しそうに入ってくる妹と、それを穏やかに見守る両親の姿だった。

「心配したんだよ！？なかなか目を覚まさないから！」

そう言いながら茜は、ベットの近くまで来た。それに苦笑しながらも、ずっと心配していたであろう妹にこう言った。

「ありがとよ。心配かけてごめんな。」

茜が言うよりも早く、親父がこう言った。

「よく生きてたな。ま、それ位じゃなきゃ今までで死んでいただろ

うがな。」

「うつせ。それより珍しいな、親父が来るなんて。」

「当たり前だ。お前が事故に遭ったと聴いた時、普通に驚いたんだぞ。」

そんなことをやっていたらお袋が、

「元気になったのだからいいじゃない。それより、時々見舞いに来てた人達が私には気になるんだけど？」

と言ってきた。俺が寝てる間に誰か来たのか？いつきだったらお袋は分かっているから何も言わないだろう。となると、誰が来たんだ？と考えていたら、茜が急に不機嫌になった。

「どうした？」

「そつだよお兄ちゃん！あの人たちは誰なの！？それに、どうして光さんも来てたの！？」

そんなこと俺に訊かれても分からないんだが。寝てる間に何があったのだろうか？と不思議に思った。それを引きずるのに意味がないと判断したのか、親父がこう言った。

「そろそろ帰るか。明日にでも退院できるか訊いてからな。」

その一言に茜とお袋は渋々と従い、「また訊くからね！」「明日にまた来るわよ」と言って部屋を後にした。

また一人なった俺は、今度は自分の恰好を見た。入院患者がよく着ている服で、俺の服はどこに行つたのかと探そうとしたら、コンコン！とドアをノックする音がした、

また誰か来たのかと思いつながら時計を見ると、時刻は午後四時半。見舞いにいつきでも来たのか？と思い、「どうぞ」と言ったらドアが開いた。その時、お袋が言っていた「見舞いに来てた人達」の意味を理解した。

「本当に起きたみたいですね。……まだどこか痛みますか？」

入ってきて早々こう言ったのは、白鷺美夏だった。

「なんで俺が事故に遭ったのを知っているとか、ここに俺がいるこ

とを何で知っていると、訊きたいことが山ほどあるが、ご足労な
こつて。」

と言いながら白鷺を見ると、どうやら一旦家に帰って着替えてきた
みたいだ。これからパーティに行くみたいなのを嬉しそうにしていた。そんな
風に観察していると、白鷺が何故か頬を赤らめてうつむきながら
こう言った。

「そうやってマジマジと見られるなんて……私の
こと好きなのですか？」

ただし、あまりにも突拍子のない言葉だった。

「なんでそうなる……？」

「だって、真剣な眼差しで私の事見ていたじゃありませんか。」

「ちげえよ……？ただ『新鮮だな』と思っただけだ……！」

「……しまったああ……！」

何言ってるんだ俺……！

「ふふふ。それはありがとうございます。それで？似合いますか？」
頭を抱える俺を見て、白鷺は似合っているかと一回転してから訊い
てきた。

クルリ、と鮮やかな一回転。それを見て俺は、モデルでもやって
いたのか？と思いつつとまらず感想を言った。

「似合ってる。何処かのお姫様かと思った。」

そんなセリフは幾度となく言われたはずだ（勘だが）。

なのに、それを聴いた時の白鷺の反応は、

「え？そ、そうですか……ありがとうございます……」

と満面の笑み（本人にとってどうだったか知らないが）で返してき
た。

「……頬がちょっと赤い。」

普通に褒めただけなのに、この反応はいかに？とちょっとは悩ん
だが、悩んでも意味はないと結論付けた。

その後少し話したが、時間が近づいたとかで帰って行った。

その時に、白鷺から「美夏と呼んで結構です」と言われた。何か心

境の変化でもあったのだろうか？

美夏が去り、また暇になった俺はとりあえず、ストレッチをした。余談だが、この病院の面会時間は午後八時までとなっている（主にいつきのせい）。

それをやっていたら、急にドアが開いた。夕飯でも来たのか？と思つてドアの方を見ると、

「そんなことして大丈夫ですか！！？」

と言いながら長谷川が入ってきた。

「大丈夫、大丈夫。体ほぐしてるだけだから。」

それに構わずストレッチを続けていたら、

「怪我人なんですから安静にしてください！」

と言つて、強制的にベッドに戻された。その時に互いの顔が近づいたが、長谷川だけ赤くなつた。俺はというと、普通。ここまで平常心が保てるのは誰のおかげなのだろうか？ふとそんなことを思つてしまった。

そして、気まずい空気に。

沈黙を破つたのは、長谷川だつた。

「その後、」

「ん？事故の後か？」

「はい。その後、ヘリが初めに来て、八神君を搬送していきました。救急車は、何故か来ませんでした。そして、警察が来て色々と訊かれました。」

「そうなのか。ところで、あいつは？」

あいつ、で分かつたのかこう続けた。

「あの子ならどこも怪我はありませんでしたよ。それに「ありがとう」ってあなたに言つてました。」

ありがとう、か。いつも言われ慣れている言葉が、今回はくすぐったい感じだった。それを顔には出さずに、俺はこう訊いた。

「撮影はどうだったんだ？」

「撮影はですね、無事に終わつたんですけど……」

言葉を濁す長谷川を見て、嫌な予感がした。

「事故の現場を撮影していたらしくてですね、それをドラマに入れると言っていました。あの光景がとっても感動したらしく、編集で入れる！」と意気込んでいましたよ、プロデューサーさん。それであなたの事を話したら、「今度学園側に名刺送ろうかな」と言っていました。よかったですね。」

事の詳細を言った長谷川は嬉しそうだった。対照的に、俺は暗澹^{あんたん}たる思いだった。

その後、見舞いに来たはずなのに、何故か長谷川の愚痴を俺が聴いていた。長谷川は、愚痴を言っている間に俺の事を、八神君からつとむ君、に変えていた。一通り愚痴を言ってすっきりしたのか、長谷川は帰って行った。帰る時に、「光^{ひかり}、とこれから呼んで下さいね？」と言った。なぜみんな名前で呼ばせようとするんだろうか。俺には分からん。

さて、光（呼べと言われたので素直に呼ぶことにした）が帰った時の時刻は午後六時半。夕飯は光が愚痴を言ってる途中で食べていたので、シャワーを浴びて寝るだけなんだが、いかんせん、さつきまで寝ていたのか眠れない。なので、先程光に邪魔されたストレッチを再開したら、またドアをノックする音が聞こえた。今日の見舞客多くね？そう思ったが、黙ってドアを開けた。

エピソード・2 見舞客 そして…（前書き）

六十話って、結構キリがいいですね。

エピソード・2 見舞客 そして…

その先にいたのは、

「つとむさん！？大丈夫なんですか！？」

「見舞いに来た意味はないんじゃないかしら？」

篠宮姉妹だった。ひよつとすると、どこかで情報が洩れてるのではないか？何の気なしにそう思ってしまう。なので、

「誰から聴いたんだ？俺がここに入院してるって。」

思わず口に出してしまった。それに答えたのは、妹——レミの方だった。

「それは……………後をつけたと言いますか……………」
「は？」

しかし、何とも歯切れの悪い答えだった。それに見かねたのか、姉の方が答えた。

「あなたが事故に遭ったと聴いた時に、レミが本宮の子にどこに搬送されるのか訊いたからですわ。まったく、こんな男のために必死になってしまつて。みつともない。」

最後の方は俺に対する悪口だったが。

まだ根に持つてるなこいつ。そう思ったが、口に出すほど俺は幼稚じゃない。なので、俺は二人に部屋に入るよう促した。

「個室だなんて。だいぶ贅沢ではありません？」

「俺はいつも一人部屋だったぞ。入院費は相手側にほとんど払わせだから、そんなに家計に響かなかったが。」

篠宮姉が、部屋に入つて早々嫌味に言ってきたので、俺は、昔から入院するときは一人部屋で費用もそれほど掛かってない、と言つた。それにレミが反応した。

「つとむさんって、前にも入院してたのですか？」

「ああ。」ストレッチを三度再開させながら俺は言つた。
みたひ

「事故に巻き込まれたのは今日が初めてだが、喧嘩やら強盗やらに

巻き込まれたのは昔からだからな。その度に重傷だったり、骨折だったりしてよく入院してたな。」

その時に良く思っただのが、「俺、よく生きてたな。」だった。今日もそう思っただが。

それを聴いた篠宮姉妹は、絶句していた。

なぜ？と思っっていたら、姉が声を震わせながらこう言った。

「あなた……よくそんな平気な顔で言えますね。」

「過ぎた事は及ばざるが如し。そんな言葉を知ってるからだろうな。」

俺の口調はそんなに平然としてたわけではないのだが、聴いてた二人は黙ってしまった。

そして、気まずい空気に（俺にとって二度目）。

それに耐えられなかったのか、姉の方がレミの手を引きながらこう言った。

「帰りますわよ。いつまでもここに居る意味は無いのですから。」

「そんな！」

「それに、普通だったら面会時間はとうに過ぎていきますのよ。これ以上は相手側の迷惑になります。あなたも分かりますね？」

「……はい。」

渋々、といった感じでレミは従った。なお、部屋から出て行く際に「前の事はもう気にしていませんわ」と言われた。俺はとくに気にしてないんだが。

さて、時刻は午後七時半。風呂に入った時、俺は今日が何日だったか気になった。風呂から上がり、腕時計を見たら壊れていた。携帯も同様だった。テレビはリモコンが反応しないので、テレビカードを買ってないことが分かった（本当は買ってあったのだが、玲子たちが暇つぶしに見ていたため無くなっていた）。

どうすつか、と悩んでいたら、ドアがノックもなしに開いた。俺はその態度で誰だか分かったので、ドアに目を向けずにこう言った。

「ありがとな、いつき……それにしても、見舞い客多く

ね？」

そう、いつきだった。いつきは、俺が寝ている（または横になっている）ベットに近づいてこう言った。

「どういたしまして。……って、え？篠宮姉妹しか知らないはずなんだけど、他に誰か来たの？」

これは俺の両親以外で、という意味だろう。

「ああ。美夏、さん？と光も来たぞ。」

と言ったら、いつきは「しまった……。」「という顔をしていた。どうした？」

「いや、多分だけど、白鷺さんは独自の情報網で、長谷川さんは茜ちゃんから聴いたんじゃないかな。……。」「ところで、二人とも、しかも片方は先輩なのにどうして名前で呼んでいるのかな？」

途中から俺に対する質問になった気がする、と思ったが、隠すつもりはなかったので俺はさっきまでのことを正直に話した。

「へえ……。よかったじゃん。モテモテで。」

と、いじけて（？）いた。どうやって機嫌を直そうか。そう考えて、俺は最終手段に出た。

「いつき。」

「なに？僕は今機嫌が悪いんだけど。」

「いつも助けてくれてありがとな。俺はとても感謝してる。」

「え、そ、そうかな。」

「そうだって。俺が無茶する度に、いつもフォローしてくれるじゃん。俺、素直にありがたいと思ってるんだぜ。」

「そ、そうなんだ。……。ぼ、僕も、いつも感謝してるんだよ。」

最終手段に出ていたら、いつきが意外なことを言った。

「？感謝って？」

「だって、僕が巻き込んでいるのに僕に対しては何も言わないじゃ

ん。それに、君は何の気なしかも知れないけど、昔は僕の事、よく遊びに誘ったじゃん。他の友達と一緒にさ。あの時から僕は敬遠されてたのに、君はそれを無視して遊びに誘ったよね。僕が怪我して先生に怒られても『同じ生徒なんだから怪我しても自己責任だろ。』と言って先生に睨みを利かせたよね。」

俺がどういう意味だと訊いたら、いつきが昔話をしだした。

そのことを聴いてると、当時から柄わりいな、俺。と思えた。

その後もいつきの話は続いた。

「なんだかんだ言って僕を保健室に連れてってくれたよね。」

「先公に『保健室には連れて行け』と言われたからな。そうじゃないけども連れてくつもりだったが。」

「保健室に入って、君は保険医の事を無視して僕の怪我の処置をしてくれたよね。ずいぶん慣れた手つきで。」

「お前は知ってただろ？喧嘩してると、一人で怪我の処置をしないといけないんだよ。」

「その時に僕は訊いたよね？『なんでぼくのこと、遊びに誘ってくれるの？』って。」

「その時、なんて答えたんだっけ？俺。」

「その時は『遊びたそうにしてたから。』って言っていたよ。嬉しかったなあ。」

そういえば、そんなこと言ってた気がする。その当時から俺は、かなり考え方が大人だったらしい（らしいとは、両親が昔の俺の話をすると必ずそう言うから）。

一通り話が終わって、何とも言い難い雰囲気。

そこで俺は、ふと気になることを聴いた。

「なあ、」

「何？」

「今日は何日だ？」

それを訊くと、いつきが驚いた。

「え？今まで確認しなかったの？」

「ああ。」

「他の人に訊けばよかったじゃない。今日は……五月四日。火曜日だよ。もうすぐ君の停学が解けるけど、明日は休みだよ。」

「となんだか聞き捨てならない言葉が聴こえた。」

「五月四日？丸々二週間ほど寝てたのか？俺。」

「そうだよ。医者も『歩くことができない』って言ってたけど、君の回復力にはいつも驚かされるよ。あとね、停学明けて三日後に合宿だから。準備はしといてね。」

「そんな話聞いてねえ！！え？何！？ドッキリじゃないの！？」

「うん。」

「チクショー——！！」

なんだその仕打ち！！？もはや強行スケジュールと変わらないじゃないか！！俺、準備なんて全くしてないぞ！？と、どこにぶつけるべきかも分からない怒りに苛まれていると、いつきが帰り際、こんなことを言った。

「パンフレットとかは君の家に置いてあるよ。それと、学校で会おうね。」

その後、俺はとりあえず瞑想していたら、いつのまにか寝ていた。翌日。医者に「もう来ないでくれ」的な視線を受けながら退院（服は親が持ってきてくれた）。家に帰ってしたことは、まず合宿の準備……。となるはずが、ケイタイの新調だった。保険やらのおかげで弁償は無く、買い替えだけした（前のデータは全部消えていなかったことには驚いた）。次に、時計の新調。これには茜といつき（どこからともなくやって来た）が一緒に来たが、結局自分で選んだものを買ったため、帰り道の二人の視線が痛かった。だって、『どっちを選ぶの？』的な視線が鬱陶うっとうしかったから。

そこからやつと合宿の準備をししたが、やってる途中に電話がかかってくるわ、メールが来るわ、家に人が来るわで、ろくに出来なかった（それでも夕方には七割ぐらい終わらせた）。

夕飯は、家族だけでパーティ……。のはずが、どこで広

ったのか町を巻き込んだの大騒ぎになった。あれは、凄かった。そんな騒ぎも終結し、俺は明日の学校の準備と合宿の準備をしていた。ただ、持ってくるものに、『テント』や、『寝袋』はどういう事が気になった。大体準備が終わったので、寝た。

翌日。学校に行った俺は、爺さんに呼ばれ、担任に呼ばれ、クラスに入ってから女子に囲まれて、事故について訊かれた（女子はそれ以外にも訊いてきたが）。朝のホームルームで、担任が困った顔でこう言った。

「えー、大変なお知らせがあります。本宮いつき君ですが、本当は女子でした。」

それと同時に、あいつは入ってきた。女子の制服を着て。男子連中はもつてのほか、女子連中も開いた口がふさがらなかった。もちろん俺もだ。

だって、十年以上も一緒にいたのに、あいつは女子だと気付かせなかったんだぞ？

お前のほうこそ、根っからの役者じゃねえか。と思っていたら、いつきが挨拶をした。

「これからもよろしくお願いしますね、皆さん。」

笑顔で言っていたので、男子全員（俺以外）は鼻の下が伸びた。

俺はというと、空を眺めていた。こういう時は無視が一番だ。思っていたんだが、いつきが俺の近くの席に座って（空いてるのがこしかなかった）、笑顔を向けてこう言った。

「これからも末永く、よろしくね。」

「あ、ああ。よろしく。」

ちなみに、俺はまだ空を眺めている。いつきが言った言葉に違和感を持ち、かつ、視線を合わせることをしなかったことに若干の罪悪感を持ちながら、どうしてこんなことを？と訊こうとしたら、教室のドアが勢いよく開いた。そこにいたのは、

「あら、本宮さんじゃありませんか。ようやく正体をさらす決心を

決めたのですか？」

「会長さんの言ってることは本当だったのですね！！……」
・もしかして、正体をさらした理由って……！！？」

と、いつも通り笑顔の美夏さん（年上なので、さんづけにした）と、若干シヨックを受けている光だった。あんたら、ホームルームどうした？

この乱入者たち（？）の登場で、男子連中がいきりたち、普段からは想像もつかない大声で「……コロセエエー……！！！！！」

「……」と言って、俺に向かって走ってきた。

反射的に俺は、窓から飛び出して校庭を走っていった。

それを見たいときは、思いつきり笑っていた。後で憶えてろ。

美夏さんも笑っていた。あの人もいつきと同類か。

光は申し訳なさそうな顔をしていた。

俺はというと、走りながらこう言った。

「神様のバカヤロー——！！！」

まだ学園生活は始まったばかりだというのに、もうすでに疲れがたままる。

辞めたいと思う自分もいる。だけど、こんな学園生活も悪くはないと思っっている自分もいた。

なので、俺はここにまだいることに決めた。何と言われようが、何と言おうが、俺は俺の『気持ち』を守ると決めていたのだから。

（終）

「終わらないからな!!」

「「「待たんかい、テメエ!!」」」

「いい加減にしろおお!!」

エピソード・2 見舞客 そして…（後書き）

本当にまだ終わりませんからね!!？

主要人物について 紹介

プロローグ 〳 自分の近況・？

久し振りだな。俺だ。八神つとむだ。

なに？俺が誰だか分からない？そっちで何とかしろ。
という訳にはいかないので、自己紹介行くか。

俺の名前は八神つとむ。今年で十六になる高校一年生だ。趣味は読書、特技は家事全般。顔は、目つきが親と似つかないほど悪い点を除くと普通。巻き込まれ体質もち。ただ目つきが悪いだけのはずなんだが、見た目が不良っぽく見えるらしい。正直どうでもいいがな。

「嘘言っのやめなよ。本当は気にしてるんでしょ？」

「うるせえ。慣れたらどうでもよくなったのは本当だ。」

「僕も紹介してくれないかな？君だけってのは、ずるいんじゃない？」

「ずるい、の意味は分からないんだが。まあいいか。」

先程、人の心を読んだがごとく口を出してきた奴の紹介をするか。

こいつの名前は本宮いつき。俺の幼馴染だ。家が金持ち、成績優秀という、誰もが羨む奴である。身長は俺より少し低く、顔立ちは女っぽい………といつもならそう紹介するんだが、中世的な顔立ちである。しかも美形。

なんで俺が直したのかというと、男だとはかり思っていた奴が実は女でした、というドッキリにも似た自己申告があったばかりだからだ。未だに俺はドッキリじゃないかと思っている。

「嘘じゃないからね？」

OK。分かった。さて、いつきの紹介の途中だったな。こいつは何かつけて俺に色んなことをさせる。これで終わり。

「そんなに僕は、君にやらせてないよ？」

白々しく嘘いうな。それこそ山のようにやらせただろ。

「それは置いといて。学園の紹介は？」

逃げたな。まあ、俺としてもどこで学園の紹介をしようか悩んでいたところだから別にいいが。

俺達に通っている学園は私立スマイレ学園。この学校は裏方の大道具から俳優、タレントなどを育てることを目的として創設された学園である。この学校は、一度入学したら退学ができないという、間違って入ったやつに対して非常に厄介なシステムがある。

あと、この学校にはもう一つ面倒なシステムがある。

それが、学年ごとにいる『アイドル』の存在である。

普通の学校なら、アイドルというと結構な人気者をイメージするだろう（実際俺もそう思う）。だが、この学校でアイドルというと学校で一番推してる生徒の事を言う。そのため、アイドルに選ばれた人達は他の生徒より多くの出演依頼が来る。ちなみに、アイドルに選ばれるのは例外なく女子らしい。そうなると男子って不利じゃないか？と、今更ながらこのシステムに疑問を抱いた（彼の知る由ではないが、男子はそれが無くても出演依頼が多い）。

蛇足だが、そのアイドルに選ばれた三人の紹介をするか。

「蛇足ってなんですか！蛇足って！」

「流石一般。物分かりが悪いことで。」

「いくら私も怒りますよ？」

いちいち茶々入れんなお前ら。……………まったく、ちゃんと紹介すりゃいいんだろ？

最初に自らの扱いに怒っていた奴の名前は、長谷川光。タレント名は『光』。こいつは俺と同じ学年のアイドルである。最初に出会ったころはオドオドしていたが、最近は自信でもついたのか、堂々

としている。ただ、何故か俺に相談事を持ちかけてくる（そのせいで親衛隊から目の敵にされている）。

次に、俺の対する悪口を言ってきたのが二年生のアイドル。名前は篠宮ルカ。タレント名は知らん。こいつは篠宮財団の長女で、性格がもう典型的なお嬢様（要はわがまま）。いつきでさえこいつの事が嫌いである。

長女、という事は必然的に次女がいることになる。まあ紹介しとくか。

篠宮レミ。先程の説明通り、篠宮ルカの妹。ただ、姉とは対照的に性格が穏やかである。

こいつとの出会い方はあまりにもベタだったんだが、我ながら面倒なことに巻き込まれたと思った。そのお礼という名目で、本人が木刀を家に持ってきたときは驚いたが。

最後になったが、三年生のアイドルについて紹介するか。

名前は白鷺美夏。この学園の生徒会長であり、のほほんとした性格の持ち主である。しかも家が金持ち。最近こいつは、俺がバイト先でつくっている料理のレシピを訊いてくる。俺は一般的な料理本をもとにつくっているので、その本の名前を何度も言っているんだが、本人は曰く『私、その本通りにつくりましたけど、あなたみたいに美味しくなかったです。』らしい。実をいうと、ちょっとアレンジを加えているのだが、それを教えるほど俺はお人よしではない。

しかもこの三人、アイドルに選ばれることだけあって全員が美人、綺麗、可愛い、のどれかの容姿をしている。そんな奴らが、俺に何の用だと思えるくらいやってくる。正直うぜえ。

だって、そのせいで親衛隊に睨まれるわ、ただでさえいつきと一緒にいるせいで男子連中から顰蹙ひんしゅくを買っているのにそれがさらに上積みになるわ、で面倒だ。

長々と説明および紹介をしたが、今回の話はまたやたらと面倒なことになる話だ。

停学明けて二日後——合宿が舞台となる話。正直行かなきゃよ

か
っ
た
と
思
う
。

主要人物について 紹介（後書き）

遅くなりました。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6917x/>

アイドルッ！

2011年11月28日09時45分発行